今日も日向は暖かい

licop

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿なので拙い文章ではありますが、楽しんで読んでくれたら嬉しいです

目次

始まりは突然に ―― 1
2日目 ―― 8
3日目 ―― 26
少し時はたち ―― 34
出発!! ―― 41
閑話　とある新兵の日常 ―― 47
ココヤシ村へ着くまで。 ―― 59
村1日目 ―― 68
村生活2日目 ―― 76
朗報です!! ―― 83
呼び出し ―― 90
到着 ―― 97
奴隷との会合 ―― 106
船旅 ―― 115
日常 ―― 122
島は突然やってくる ―― 128
メルヴィユにて ―― 136
間話　日常 ―― 146
脱出!!! ―― 153
お会いするまで ―― 167
宮殿にて ―― 176
間話 ―― 185
あぁ、歳をとるのって ―― 196
数年の時間を経て ―― 204

動き出します ―――― 214
再会 ―――― 222
実力 ―――― 229

始まりは突然に

この度、記録致しますのはとある少女の物語。
少し変わった臆病な性格の少女ではございますが、懸命に生きるために努力をしながら一風変わった人生を生きていく物語になっております。
そんな彼女の物語を一緒に見ていってくださいな。

ここは、イーストブルー（別名最弱の海）と呼ばれる海の片田舎の孤島である。
島のほとんどが大きく育った木々に囲まれ、人の気配はなく、獣の声のみが聞こえる島。
その島に一人、少女が暮らしていた。
その少女の外見は、髪の色は黒く、長さは腰丈ほど、乱雑に切り揃えられた髪からはどこか野生味を感じられる風貌。
また頭の上には、人には生えるはずのないこちらも黒色の猫科の耳がついていた。
また見た目は幼く、身長も１４０センチに届くか否かと非常に小柄である。
また格好も布きれを一枚、体を覆うように纏ってい終いと言いた状況。
見た目は捨てられた浮浪児のようだった。

そんな少女の名前は、フェンといった。
親は気づいた時にはおらず、フェンという名前も物心がついた際に

持っていた1つの手紙に書いてあったものだった。

その手紙に書いてあったのは以上の通りである。

【拝啓　フェンへ

神です

あなたは私が殺しました。すいません。

転生しますので、楽しんで生きてください　敬具】

全く意味がわからなかった。

フェンの前世は、フェン自身が覚えていた。

別に特に変わったこともなく、小学校、中学校、高校、Ｆラン大学と義務教育を終え、パッとしない会社へ入社。

油ギッシュな上司にこき使われる、そんな普通の人生を送っていたはずだ。

なのに次の瞬間には、よくわからない無人島にいるわ、変な手紙があるわ、神だわ。

何も理解できなかった。

無人島に拉致されたのかと思い、周囲を探索してみるも、周囲には日本では見たことのない植物や、動物たち。

そして極め付けは、前世というのか自身の記憶というのか、男で生きてきたはずなのに現在は浮浪者ファッションの幼女だ。

文面だけで解釈するのであれば、

死んだｏｒ殺された

←

殺しちゃったから、転生だ

←

無人島

なのだろうが、一言言わせてくれ。

どうしてこうなった

どうやら、勝手に殺され、勝手に転生されたらしい
非常に迷惑なことだ。

まあ良い。
アブラギッシュな上司とはおさらばしたかった記憶もある。
これ幸いと思うようにしよう。

今一番行わなくてはならないものは、現状の状況把握や食糧問題、水確保だろう。
現状は何も知らない無人島に飛ばされ、また現在頭の上にはぴこぴこと動く猫耳だ。
猫耳幼女なんて、現実コスプレでしかお会いしたことはなく、転生先の世界は地球なのか、別の世界なのか。いわゆる獣人が跋扈している世界なのかも不明である。
人に出逢ったらどんな状況になってくるのかもわからないため、自身一人でなんとか先の内容は解決しておかなくてはならない急務である。

勝手に殺されて、転生までさせられて、悪いと思っているなら他に

何か頼りになるものを置いておけと言いたい。

文句を言っても状況の好転はしないことは分かり切っているため、先ほどの手紙付近に他に何か頼りになるものがないか付近を探す。

あった。もう一通の手紙だ

【さて、転生するだけでは生きていくことが困難になってしまうため、必要情報と転生先の情報を記す。

・転生している世界は（某　海賊王がいる世界で主人公が活動する25年前である）

・無人島で食糧を探すことが困難であるかと思うため、仙豆が無限に（1日一粒）沸く袋を一つ

・純粋にその世界で戦っていけるレベルの戦闘力と戦闘知識や経験

まずは、上記内容で特典をつけておいたため活用すると良い。

戦闘力については、前世での経験では一般人の域をでないため、活用できる経験と知識とインストールしておいたため、現在でもすでに自然と戦える状況になっていることと思われる。

転送先で最初から襲われたりしないために、イーストブルー最弱の海の無人島を選んでおいたが、目視で見える距離に有人の島もある島で選んでおいたため、寂しくなったら筏でも作って移動されたし。

以上。またこの手紙は読み終わった後、仙豆用の袋に変化するため捨てないでね】

手紙は記載の通り、読み終わった瞬間に、バンっっと衝撃的な音と共に布の巾着へと変化した。

おばあちゃんの家にありそうな柄付きの巾着袋だ。

絶妙にダサい。

この手紙で、今後どうしなくてはいけないのか。

方針や状況が決まってきたのは非常にありがたい。

週刊少年ジャンプは非常に好きでよく読んでいた。
オタクとまではいかないが、ある程度の筋道ぐらいは現在覚えているだろう。
また仙豆巾着もありがたい。
一粒で１０日分の食糧は賄えるわ、死にやすいこの世界で回復手段にもなるわ、この巾着があるだけで今後の生活や内容が全然変わって来るであろう。
それにしても、ワンピースの世界とは……。
もっと安全な世界はなかったものかと問いかけたい。

平和に暮らしていても、海賊に襲われる世界だ。
原作開始が２５年後だとすると、有名なゴールドロジャーの処刑の３年程度前と言ったところだろうか。

ワンピースを探せ宣言をされてしまうと海賊が、活発に活動し始めることが予想できるため、自身の実力がどの程度まで通用するのかも測っておかなくてはならないだろう。

当面のやることは決まった
・水の確保
・イーストブルーのどこに位置するのかの確認と、可能であれば地図の入手
・猫耳が受け入れられるのか否かの確認

こちらの内容で当面は進んでいく必要がありそうだ。

水の確保は無人島であるが故に、海岸も非常に近い位置に見えており、火さえ確保できれば蒸留にて確保できるだろう。
または湧水があれば儲けもんなのだが。

問題はどうやって、火を起こすか。
それと、加熱に耐えうる金属の器を用意することである

待て。
ある程度の戦闘力次第では火おこしぐらい簡単にできるのではないかと頭によぎる。

戦闘力基準が、仙豆でのドラゴンボール基準なのか、ワンピース基準なのかは不明ではあるがドラゴンボールであればビームで火をつけられるし、ワンピースでも摩擦で足に火をつけている猛者がいる。

まず先に戦闘力の確認から始める必要があるようだ。

思い立ったら早速行動である。

インストールされたものというものはどうやって確認すれば良いのだろう。とふと考えては見たものの、思いつくものはなく疑問だったが、この作業は気持ちの悪いものだった。
なんせ、頭の中にできた覚えがないのに、できるという謎の自信とできる経験が即座に浮かんでくるのだ。
自身は行ったことがないのに、知らない記憶として蘇ってくる。
行ったこともないのにできると感じる。

他人の記憶を覗き見しているような、なんとも不快な作業だった。
そのおかげで火は起こせるようになったのだが。

ともあれ、なんとも便利な状況だ。
戦闘訓練などしたこともないのに、体と知識は知っているようだし。
火はつけられるし。

非常に気持ちが悪いが……。

幼女が足を地面に擦り、摩擦で火を集めた枯れ木につける作業は他からみたら、シュールなんだろうなと思いながらも火をつける。

これで火の確保も、水の確保もなんとかなったわけで早速仙豆を口に放る。

ボリボリとまるで大豆のような豆を噛み砕き、呑み込む。

豆を一つ食っただけで、満腹感が襲って来る感覚にびっくりしながら、仙豆を初めて食ったことに喜ぶ。

一度は考えたことがあるだろう、怪我は治るし、作中に度々登場するあの仙豆だ。

食ったという状況に非常に満足だった

あとは１０日は飯を食わなくても仙豆で生きていけるらしいので、できる限り仙豆は確保しながら、１０日にいっぺん食べるようにしよう。

気がついた時間は昼だったがそうこうして居る間に、すっかりと周りも暗くなり、日も落ちてきた。

流石に現代っ子が野宿は辛いものはあるが、何もわからない状況で街に行って怯えられるのも得策とは言えないため、少しでも快適に夜過ごすべく、まだ背中が柔らかい砂浜付近で仮眠を取ることとする。

今日は散々な1日だ。

明日はなんとか鍋か金属の器を手に入れなければ……。

2日目

波乱の1日目を終え、朝を迎える。
少しは地面の柔らかい砂浜で夜間を過ごしたとて、やはりベットで過ごしていた環境と比べると天と地ほどの差があり、寝ては目覚め、寝ては目覚めを繰り返し、寝れたのか寝れていないのかといった気分での起床だ。

さて本日の予定を発表しよう。
・鍋や鍋の代わりになりそうな物を探す
・年表を整理し、やりたいイベントを考える（また、ワンピースの世界と言えども原作に沿って進んでいくとも限らないため経過観察）
・水づくり

本日の予定といったら、こちらの内容だろう。
まず一つづつクリアしていきたい物だが、如何せん現代の無人島のようにゴミが滞留している様子もなくもちろん金属器などが転がってるなどのこともない。
また、土を選別して土器を作るにも戦闘経験や知識はインストールいただけた模様だったが生活知識や付随する知識は自信の中含め持ち合わせていない。
となると、有力なのは有人の島へと足を伸ばさないといけないわけで。

そこでネックになるのは、こちらの猫耳だった。
この猫耳は後にわかったことだが、この体のことも手紙の片隅に書いており、ミンクと人間のハーフといった設定らしく、身体能力は非常に高いことがわかっている。
その点は、ハーフ設定もありミンクの特徴に準じているようだ。
またその点もあり空中浮遊もできるようになっており、ミンク様様である。

ただそのところ、原作を多少読んでいた自身ではそのハーフに関しての話はなかったように思う。
そうなると懸念されるのが
非常に希少な状況ではないか
希少故に迫害対象ではないか
天竜人に出会ったらまずいのではないかという点になる

イーストブルーに天竜人がいたという記載はなかったような気がするため、４つ目はグランドラインに入ってからの懸念にはなるが、うち２つの可能性があるわけで……。

さて、まずは耳を隠す布か何かを見つけ隠す。
そして、隠した状態で目算は１ｋｍ程度だろうか、離れている島へ上陸。
そこから人の反応を確認と、可能であれば鍋の取引。
不可であれば、こっそり盗んでくるしかないだろう。

本日の予定は決まったため、次は今後の行動指針だ。
せっかくイーストブルーにいることもあり、できれば関わっておきたいイベントがある。
ベルメール殺害事件だ。

おそらく時系列から考えると、今より８年程度経った後に起こると考えられる。
主人公周りの状況のおおよその記憶しかないわけだが、現代人としての倫理観は持ち合わせているつもりだ。

オハラは流石に遠すぎて、どこまで通用するかの実証が出来てない今では無理だが、同じイーストブルーでの状況で母がいないとなってしまう状況は、なんとか出来るようであればしてあげたいところだ。

今後の行動方針としてはこんな物だろう。
まあ、８年としばらく猶予はありそうだ。
まずは目下の鍋確保の問題を早急になんとかしないと。

行動指針を決めてから、1日目には行わなかった付近の探索をしてみたが、この島には目ぼしいものはあまりない。
もちろん無人島故にブティックや服屋はあるはずもなく、布という布がない。
あるとすれば現在身に纏っているボロきれのような布生地。
また隠せそうなものは少し大きめの葉っぱぐらいだ。
他にあるものといえば、動物が少々いる程度。

血抜きなんかしていては、待つまでの間で脱水症状を起こして死んで終わりだ。
そんな悠長に時間を待っている暇はないわけで。

そしてこの島の広さは、この体で十分に一周できる程度で、上空から空中浮遊（インストールされた体の使い方の経験より抜粋）で見てみても、東京ドームが2～3個程度といった広さであった。

全く役に立たない無人島へ転生してくれたものだ。

こうなると、葉っぱで頭を隠しながら、偽装のため筏で隣の島まで移動しなくてはならない。

身体までは、漂流者で流してくれても頭の葉っぱまでは流してくれない気はするが最悪奇特な人だと思われても、バレなければいい。

こうなると、鍋を盗まなくてはいけない状況も視野に入れてか。

決まったら行動は早い。

まずは筏の作成に取り掛かる。

空中浮遊で出発も考えたものの、外見のリスクや空中を移動できる種族ということの露見する危険性も考え、筏作成の素材調達から進めていく。

素材調達は非常に簡単だ。

そもそもミンク族が非常に高い身体能力を有している種族ということもあり、話した通りハーフの私ももれなく身体能力は凄まじい。

その辺に生えている木程度であれば、手刀できれる。

あとは何本か手刀でカットしてきた木を長さを整える。

また森に行き、木のつるを持ってきて結べば簡易的な丸太の筏の完成だ。

マストはなく、乗るだけの仕様だ。

どうやって進むのかというと、この身体、本気で拳を振り抜くと拳圧による衝撃が起こるのだ。

ワンピースの世界といえど、個人で特典込みとはあってもこの状況は非常に恐ろしいものだが、この際気にしてられる状況ではないため一度置いておこう。

今回はその衝撃を利用して、自身が船に乗って後ろに拳を振るい続ける。
その衝撃の推進力でエンジンの代わりをしようという魂胆だ。

早速作ったマルタ号を海岸より海へと浮かべる。
つるがバラバラに解けてしまう心配もしていたが、木も素手で切れ、かつ拳から衝撃が出るほどのスペックできっちりと結んでいるため、ひとまずは解けずに浮かんでくれていた。

私も筏の上に乗り込む。
ワンピースの世界観や、内容、キャラは非常に好ましいものだった。
ただ現実となった今は、その世界に関われるワクワク感はあるものの、命の重みの軽い世界というだけで憂鬱だ。

さて、現地人第一号は受け入れてくれる方であればありがたいものだが。

行うこと自体は簡単である。
ただ筏のヘリに腰掛け、ヘリを足で固定し、反対側に拳を全力で振るうだけ。
と思っていたのも束の間、振るった瞬間に筏が大破した。

私の拳の推進力に耐えられなかったらしい。

試行錯誤して、何度か筏と推進力の調整を行っているうちに、３つ目の筏でコツを掴んだ。
筏のヘリで足をバタバタさせているだけで、この身体のスペックなら進めるらしい。

筏いらないっぽいです。
考えてみれば、いや、考えなくてもここまでのスペックであるならば１ｋｍ程度の距離泳いだ方が早いわけで……。
たっ、ただ偽装しなきゃならないしな。
誰に言い訳するわけでもないが、己に言い聞かせ必死に筏の上でバタ足だ。
見た目だけで言えば、海辺で浮き輪を抱えてバタ足をしている幼女といったところだろう。
まあ軽いバタ足でも、こちらの体のスペックだと上空数ｍの水飛沫のため、全く可愛くはないが。
のんびりしていて海王類などに絡まれても厄介なため急ぎ、隣島へと移動する。

こちらに来てから、海王類はまだ遭遇してない。
ミンクのスペックや原作序盤で打倒している状況も踏まえると、この体で負ける要素はないのだろうが、ゴジラばりの大きさの魚類など見るだけでも怖そうだ。
勘弁してほしい。

筏での移動も、中程まで進むと島の状況がよりくっきりと見えてくる。
どうやら人が一人だけとか、住んでいるけど街などはないです。などではなく住居は立ち並び、見る限りでは、八百屋や服屋なども少なからずある模様。
また人も歩いている状況も見えており、人たちの顔も明るく、にこやかに見える。

よかった。
とりあえず、スラム街のような場所ではないようだ。
すぐに奴隷云々といった状況も、まずは希望が見えてきた。

偽装工作用のオールに持ち変え、島への航路を進める。
頭に葉っぱを木のつたを通して作った、冠??帽子??を被るのも忘れない。

さてさて、めっちゃ緊張する。
腹いたい。

好印象でありますように、鍋もどうにか手に入りますように。

どんどんと順調に島への距離も近くなり、街の船着場へと筏を停泊させる。
錨などは用意していないため、流されていった場合は泳いで帰るとしよう。
帰りは不審に思われても、ほしいものさえ調達してしまえば問題はない。

「嬢ちゃん!・どうした、その格好!・もうボロボロじゃねえかよ!」
この世界に来て、初めて人の声を聞いた。
言語は理解できるらしい。
これも何かの特典の一環だったのだろうか。
声をかけてくれたのは、船着場に停泊している船の男だった。
立派に髭を蓄えており腹も少々出ているが腕っ節の強そうな、いかにも船長な風貌のおじさんだった。

「知らない……、気づいたら隣の島にいた。服もこれだけ。おじさんは船長さん??」
「おう。この船の船長だ。って、そんなことより大丈夫か嬢ちゃん。海王類なんかはこの辺では滅多にみねえけど、よくもまあこんな筏でここまでこれたもんだ。お父さんやお母さんはどうした?」

腰を曲げ、わざわざ目線を合わせてこちらと話してくれるこの船長は、眉を顰めながら心配そうに声をかけてくれた。
「お父さんも、お母さんもいない。1人だけでそこにいた。ご飯はあるけど、水がないの。鍋が必要だから、鍋売っているところを教えてほしい」
「お嬢ちゃん一人なのかよ！（お父さんもお母さんも居ないってこたあ、捨て子かなんかかい。胸糞悪いなあ、おい）まあ、鍋売っているところに案内するのはいいが、金か金目になりそうなものは持っているのかい、嬢ちゃん」
「なんとかする。ただ場所を知らないと買えないから、場所だけでも教えてほしい」
「わかった。案内してやらあ。ちょっと船の錨下ろしてくるから、待っときな」
おじさんは船の錨を降ろしにいった。
とりあえず第一関門クリアだ。
まだ見る限り、軽蔑や変なものを見るような印象はなく、かわいそうな少女として扱ってくれている。
このおじさんだけなのか、街での状況なのかは不明だが、色々今のうちに聞けるだけ聞いておこう。

「待たせたな！そしたら、すぐそこだから行くか」
おじさんと一緒に歩き出す。
目的地に着くまでの間は、おじさんから現在の位置と周辺との位置関係と、街の状況を聞いた。
現在地は、思っても見なかったがシェルズタウンらしい。
ここは街の裏側にどちらかと言うと位置しており、反対側には海軍本部があるときた。
どう考えても、斧手のモーガンイベント地だよな。
どうやら現在の大佐は聞いたこともない名前だったが、原作通りならば、いずれ赴任してくるのだろう。

原作の5年前赴任だったため、後２０年後といったところか。
はて、この肉体年齢は幾つなのかは不明だが、原作開始の際にはい
い歳になっているのか。
主人公が２０歳行くか行かないかだったため、おばさんになってい
る頃合いである。
おばさんと呼ばれたくはないなあ。
主人公や仲間たちには、お姉さんぐらいに思ってほしいものだ。

考えが逸れてしまったので戻そう。
まずは鍋の確保である。
「嬢ちゃんついたぞ！おい、婆さん！客だぞ！鍋が欲しいらしい」
「はいはい、待っとくれ！今行くから」
店は昔の個人の八百屋などを想像してくれると、まさにそのままの
見た目。
一階でものを売って、二階が住居。
こじんまりとした外装だ。
まあ、この世界にデパートなんて出てきた覚えはないし、街の金物
屋さんな外装である。
奥から出てきたのは、頭は白髪なものの背筋はしっかりと伸び、快
活な印象を受けるおばあちゃんだった。
「あれ、ちっちゃいお客さんだこと。ジゲス、どうしたんだいこの子。
まさかどっかから誘拐してきたんじゃないだろうねえ！」
「バカ言うな！嬢ちゃんは少しここで待っててな。ちょっとこっちに
来い、婆さん！」
「いい度胸だ、ジゲス！誘拐なんかしてきたら、とっちめてやる！」
少し揉めそうな雰囲気もあったため、仲裁に入ろうかと思ったが、
こんな子供が何をいっても悪い印象につながってしまう危険がある
ためやめた。
ここは大人しくなっていよう。
おばあちゃんと、おじさん（ジゲスというらしい）は少し離れたと
ころでコソコソと話していた。

「あの子は、お父さんもお母さんも今はいねえそうだ。挙句に、近くの無人島で一人でさっきまでいたらしい。俺が話しかけたのは、俺の船の停泊している船着場に筏で一人できてたから、軽く話しかけたら鍋が欲しいってんで連れてきたのよ」
「そうなると、あの子は捨て子か漂流かってところだね。なんであんなちっちゃいのに、一人になっちまったのかい」
「そうだと思う。流石に、あんなちっちゃい嬢ちゃんに根掘り葉掘り聞いてくるわけにも行かねえから、俺の想像も混じってはいるが、あながち外れてもいねえだろう」
　見ている限り（聴力も獣並なのか、話している内容はおおよそ聞こえてしまう）捨てられたｏｒ漂流者で天涯孤独の少女だと思われているらしい。
　あながち外れてもいないため、訂正もする気はないが。
　２人とも難しい顔で話を続けている。

「どうするんだい、私も聞いちまったらそのまま無人島に返すなんてことはできないよ」
「そりゃあ、そうだよなぁ。だがよ、俺の家なんて男一人だ、女の子の嬢ちゃんには辛えだろうし、婆さんどうにかならねえかよ」
「私んとこも、私が食べるので一杯一杯さ。近頃は海賊が来ていない分、少し余裕があるぐらいだよ」

　困った表情で、悩んでいる２人を見ながら今後の身の振り方を考えていた。
　まだ自身の頭の状況を教えていない状況で、今後の物事が進んでしまっても困るからだ。
　ただ、海賊が闊歩している世の中で人の温かみなんて現実問題ないのだろうと考えていた。
　現実は見ず知らずの少女や状況で真剣に考えてくれる人がいた。
　演技かもしれないが、現在、この世界で頼れる場所は作っておいて損はない。

衣食住も流石に無人島でずっと暮らしていくのは無理があると考えていたところもあり、渡りに船かもしれない。

「仕方ねえ、俺んちにひとまず置いてやる方がいいか。婆さんも嬢ちゃんの面倒見てくれっか。俺が家にいない日だけでも構わねえからよ」

「それぐらい、お安い御用さ。うちにもっと蓄えがあればねえ」

「そうと決まったら、早速だな」

聞いていたため、内容は理解しているが、こちらとしても話しておかなくてはならない内容がある。

話し合いが終わり、ジゲスのおじさんと金物屋のおばあちゃんが戻ってくる。

「お嬢ちゃん、流石に無人島で一人で生きていくのは無理がある。海もこの辺は海王類はあんまり出ねえが、全く出無えわけでもねえ。毎回、海を通ってこの島に来るんじゃあ、いずれ食われておしまいだ。お嬢ちゃんみたいな別嬪がそれじゃあ、寝覚めが悪い。だからよ、俺の家を寝泊まりに使ってくれねえか」

「そうだね、お嬢ちゃん一人で生きていくのは、辛い世の中さ。お婆も孫もいないし、お嬢ちゃんのお世話させてくれないかねえ」

人の温かみは、殺伐とした日常を送っていてもあるもんなんだな。わけもわからず、意味もわからない世界に送られ、ひとりぼっちの状況。

初めて会った人がこんな温かい人たちがいるなんて思っても見なかった。

考えれば考えるほどに涙が出そうだった。

だが、今泣いてしまう前に話しておかなくてならないことを伝える必要がある。

「おじさん、おばあちゃん。嬉しいけど、私話しておかなきゃならないことある。もしかしたら、迷惑かけちゃうかもしれないし聞いてから

決めてほしい」
話して、草で隠していた頭を見せる。
ジゲスとおばあちゃんの表情を見ると、やはり驚愕の表情だった。
「お嬢ちゃん、それは本物なのかい」
「うん、尻尾もある」
実のところ、ボロ着に隠れて見えないようにしておいたのだが、尻尾も有った。
普通の猫の尻尾ではなく二股で、２本だ。
「驚いた、お嬢ちゃん悪魔の実の子だったのかよ！よくもそれで海なんて渡ってきたもんだ！」
「ジゲス悪魔の実って、なんのことだい！自分ばっかり納得してるんじゃないよ」
状況の理解ができていないのか、困惑しながらおばあちゃんはジゲスおじさんに声をかける。
「悪魔の実っていやあよ、売ったら1億ベリー相当で食ったら不思議な力が手に入る世にも奇妙な実って噂だ。俺も実物は見たことねえけど、実際のところ手が伸びたり、獣になったり、いろんなことができるって船乗りの中で噂だ」
「なんでそんなもんをこんな嬢ちゃんに！」
「それはわからねえが、たまげたぜ。そうか、葉っぱで隠してたんだな人と違うから。安心しな、少なくとも俺は別に獣の耳があったところでこうやって話せるし、人間の子供であることは一緒なのは変わんねえからよ。気にしねえよ」
「そうだねえ、こんなに可愛い孫欲しかったからちょうどいいよ。ジゲスはさっさと部屋を片付けておいで！船から戻ってきて、部屋に帰ってないんだろう！嬢ちゃんを住める状態にしておいで！」
ああ、涙が出そうだ。
そうか。心細かったよなあ。
なんか必死で考えなきゃいけないことばっかりで、全く気づかなかったけど。
なんて考えている頃には、涙が出ていた。

大人になってから、子供のようにエグっエグっと泣くなんて思わなかった。
前世は成人もしていたし、男だった。
それなりに辛いことも経験してきたはずで、まさか涙が出てくるなんて自分でも驚愕だった。
「・・・・・おばあちゃ、んっ、おじさん・・・あ〝りがどう〝っ・・・・」
「子供が無理するんじゃないよ！ほら、お婆のところにおいで。お嬢ちゃんはお婆の家でゆっくりしてようね。ジゲスはさっさと行っておいで！」
「わかったわかった！お嬢ちゃん、また片付け終わった頃に声かけにくるからそれまでは婆さんと遊んでやってくれや。店も年中閑古鳥で暇してっからよ」
「余計なお世話さ！さあさ、行った行った！」
ジゲスおじさんは急かされるように去っていった。
それからしばらくはおばあちゃんに抱かながら、ひとしきり泣き、収まった頃にはおばあちゃんの服も濡れてしまっていた。
「さて、お嬢ちゃんも泣き止んだことだし、いつまでもお嬢ちゃん呼びじゃあ他人行儀だから名前を教えてくれないかい」
「フェン。それだけ」
「そうかい、じゃあフェンちゃんだね。お婆の名前はシジマっていうんだ。お婆でいいよ。いっぱい泣いて喉乾いただろう。ちょっと、お婆のお茶に付き合っとくれ」
店の中に入ると、スプーンやフォークなどのカトラリーに、鍋やフライパンなどの金物まで幅広い商品が置いてあった。
また自衛は自身でとの世界なのだろう、刀も商品棚の一番上に置いてある。
「気になるかい、あれは刀なんだがお婆は全く使えないんだ。護身用さ」
原作で見たような特殊な鞘ではなく、棚の上に置いていることから大業物などの名刀ではないようだ。
おそらく大衆用の刀なのだろう。

「そんなところにいないで、早くこっちにきておくれ。あったかいうちにお茶にしよう」
なんとここで驚愕だったのは、緑茶だ。
日本の心だ。
ワンピースの世界では、テキーラやウイスキーなどの印象やオレンジジュースなどの描写は見られるがまさかの緑茶だ。
「おっ、フェンちゃんそれはお婆のお茶だよ。ジュースはないからお水でも出そうかと思ってたけど、そっちの方がいいかい？」
「んーん。お茶でいい。お茶がいい」
こちらでは緑茶ではなく、シジマおばあちゃんが庭で採れた草を潰して飲んでいたらしい。
その際に一番美味しかった草を栽培し、今の形になったそうだ。

そこからは、おばあちゃんといろんなことを話した。
どうやらおばあちゃんには孫がいて、孫は現在海軍で働いているそうな。
息子も海軍にいたそうだが、現在は表側の街で同じく金物屋を営んでいるとのこと。
旦那さんが他界してから、一人で暮らし始めて、もうしばらく経つとのことだが、息子夫婦も帰ってこず孫の顔もしばらく見ていないそうだ。
「一人で暮らすのも気楽でいいけどね、寂しい時もあるからフェンちゃんがいてくれたらお婆も大喜びさ」
「うん！私でできることなら手伝うし、お婆ちゃんの役に立つ！」
そうしてしばらく、シジマおばあちゃんとお茶をしているとジゲスおじさんが帰ってきた。
「おい！迎えに来たぞ、婆さん！」
「思ったよりも早かったねえ！ちゃんと片してきたんだろうね！」
「当たり前だ。元々、魚獲りに行くとしばらく帰ってこねえってんで、家にものあんまり置いてねえんだ」

「なら、良しだ！フェンちゃんお婆の相手してくれてありがとうね！お婆もお家に行くから、お婆の家にもいつでもおいでね」
「げえ！来んな来んな！必要な時は、お嬢ちゃんに来させる！（婆さんがうちに居着いた時には、やれ掃除だなんだってうるさくて敵わん）」
　おじさんはおばあちゃんの息子の友人らしい。
　小さい頃から知っており、おじさんのお母さんとも仲がいいとか。
「じゃあな！婆さん。これから頼むわ」
「任されたよ！今日はお婆の相手をしてくれて本当にありがとね、久しぶりに孫が帰ってきたみたいで楽しかったわ」
「んっ。また来る。またね」
　お婆と別れて、ジゲスおじさんに連れられておじさんの家に向かう。
「お嬢ちゃん、名前フェンって言うんだな。俺は、散々婆さんが呼んでたからわかっていると思うがジゲスってえんだ、改めてよろしくな」
　おじさんには家族はいないのだろうか、家族がいたら知らない子供連れてきて喧嘩になったりしないのだろうか。
「おじさん、私連れてきて家族は嫌じゃない？私、変な子。人とは違う耳と尻尾ある」
「子供がんな事気にすんな！ま、おじさんは家族はいねえからよ安心して良い」
　現在は一人で暮らしており、両親とは別に暮らしているらしい。
　また喧嘩で家を飛び出しての漁師になったそうで、しばらく両親と顔も合わせていないそうだ。
　そしておじさん呼びしていたものの、実際のところは３０半ばであるとのこと。
　家庭を持つ気は今の所はないとのこと。
　また恋人も漁に出て帰ってくると、少し休んでまた漁に出てしまうため作る暇がないようだ。
「おじさん、家族は大事。喧嘩勿体無いよ？」
「んな事はわかっているんだがなあ。子供に諭されると響くぜ、おい。（婆さんだけに任せんもの無理があるだろうし、かといって俺も漁に

行かねえといけねえし。しょうがねえか)」
おじさんの家は2階建て一軒家だった。
間取りは一階にリビングに寝室、2階に上がると倉庫がわりの部屋が一つ、そしてトイレに洗面台といった間取りだった。
「2階の部屋は好きに使っていいぞ！あとは客人用のベットも二階倉庫に放ってあるから、寝起きはそれでするといい。ただよ、女の子用のもんなんて俺は気にしたこともねえから、今日はこれで我慢してくれるか。明日にはなんとかするからよお」
寝起きできる部屋をくれるらしい。
なんとも、おじさん様様である。
「おじさん、ありがとう！」
「良いってことよ！子供が死ぬのを見てるだけなんて寝覚めが悪くて敵わねえもんよ。欲しいもんは明日まで我慢してくれ」

お腹は減っていないことをおじさんに告げ、その日はそのまま就寝となった。
仙豆のパワーは改めて凄まじい。
昨日口にしてから全く空腹もなく、続く満足感。
全くお腹が空かないのだ。
そして、1日一粒生まれる魔法の巾着からは一粒豆が生まれていた。
原理はわからないが知らぬ間に豆が入っていたと言うべきか。
食さずにそのままにしておけば、増えていくのだろう。
こちらはいざという時のために取っておきたい。
考えれば、ミンク族スペックはイーストブルーでは過剰戦力ではないのだろうか。
ハーフ設定とのこともあり、どこまでのものなのかは不明だが、木

は手刀で切れ、パンチは衝撃で数メートルの水飛沫と推進力で筏は大破（大破といっても粉々だった）。

またインストールされた知識は思い出すと言う表現であっているのかは疑問だが、思い出すとおそらく縮地や徒手空拳での武術経験の知識。

対人戦での関節技などの知識がどんどんと湧いてくる。

戦闘力や経験はどうやらワンピースでの六色などのびっくり技術ではなく、現代日本の知識であるようだ。

ただワンピースでの基本ベースは対人戦がベースのため、武装色と見聞色を身につければ戦えるようにはなりそうだ。

またハーフといえど、エレクトロやスーロン化もできるらしい。

十分に過剰戦力ではないだろうか。

手加減と、早急に覇気を身につけよう。

これは今後の急務だ。

もう一つ、ミンク族の特徴は獣に準じているはずだったように記憶しているが2本尻尾がある理由も確かめねばならんだろう。

今日1日で、自身が非常に幸運だったと思う。

または有人の島の人口が優しい風潮の島を選んでいただけたのか。

人は温かく、こうして今日出会ったばかりの人間かもわからない子供を迎えてくれた。

海軍のいる街では海賊は跋扈しずらく、手も出しづらいだろう。

現在がモーガン前ということもありがたい。

あのゴリゴリが出てくると、生きづらい島に早変わりだからだ。

ここまでよくして貰っているのだ、あのゴリゴリからは島の人を守りたい。

目標

・手加減、覇気を物にする

・ベルメールを助ける

・モーガンから島の人を守る

これで当面の目標はできた。

明日から頑張ろう。

3日目

「朝だぞ！起きってかい、嬢ちゃん！」
　先日は2階のベットを使わせて頂き、海岸でのほとんど睡眠が取れなかった1日目と比べて、ぐっすりとしっかりとした睡眠がとれて快眠であった。
　朝の太陽の日差しも窓から差し込み、非常に気持ちのいい朝だった。
「起きた。今降りる」
「おう！朝飯作ってあるから、ゆっくりと食べな。昨日は夕飯は食べなかったけど、体調悪いか？」
　ジゲスのおじさんは心配そうな面持ちで声をかけてくれる。
「大丈夫！心配させてごめんね」
「大丈夫ならいいんだよ！今日は俺はちょっと実家へと用事があって出なきゃいけなくてよ。鍵かかけるぐらい大層な家じゃねえから、外に出ててもいいが、お昼頃に一度戻ってきてくれるか。今後のことで話がある」
　ジゲスおじさんは頷くのを確認すると、そのまま出ていった。
　帰ってきた。
「っと、伝え忘れた！ごめんな、昨日は用意出来なかったけどよ、そのボロのままじゃ格好がつかねえからちゃんとした服、婆さんが持ってきてくれててよ！飯食ったら婆さんとこ行って来い、じゃまた後でな」
　と残して、再度出ていった。
　今日の予定は、昼までの自主練とおばあちゃんのところに顔を出す。
　昼になったら、家でジゲスおじさんを待つ。になりそうだ。
　だが、まず飯を食いながら昨晩考えていたことを整理しよう。
　ご飯はちなみにベーコンやレタスなどが挟んであるサンドイッチだった。
　やっぱりちゃんとしたご飯はうまい。

昨晩は、就寝前に今後の内容や状況と目標のことを考えていた。
主に覇気の身につけ方や、内容に関してを考えていたわけなのだが2つ思い浮かんだことがある。
流石に本物の見聞色は見当もつかないが、近いものであれば苦労せず身につけられるのではないかという点だ。

現代武術の知識や経験がすでにインストールされている件。
イメージをするのであれば、ＭＭＯ小説によく出てくるシステムアシストみたいな感覚に酷似しているのではないか。
意識しなくても、自然に動作として体が動いてしまう感覚だ。
それに加えて、脳内で考えたことに関して普通に記憶を思い出す感覚で、動きの知識などが出てくる。
インストールされているのは剣道や、空手などの日本武道から、ソバットのような格闘技などが主だったものである。
その中には、武道の見切り技術がある。
見切り技術は、相手の動きの起こりを筋肉や動作より読み取り相手より一歩先に動作を行うものだ。
これは悪魔の実の能力者であっても、移動するときには動き出す際の動作を行っている描写があったと思う。
それはいかにロギア系の能力だろうが、移動する際には初動は走る動作なり歩く動作などが必要ということだったのではないだろうか。
その初動を見切り、起こりから次の動作を読み取れれば立派な見聞色なのではないか。

もしくはエレクトロである。
こちらは電気に関しての能力であると理解している。
電気に関しての能力とあれば、人体の電気信号の一端でも感じ取る方法があるのではないか。
電気信号での指令の内容が流れる場所や、信号の強弱から動作を読

み取ることができるのではないかということだ。
もしくは電気信号の電気自体の電力を強めることで、電気を作る以上ある程度の電気の耐性のあるこの体であれば、反射や身体能力を極限まで強化することができるのではないか。
どちらにせよ、疑似的な見聞色まではつなげることができるのではないだろうかと考えている。
まあ、本物の見聞色やマントラは全く見当もつかない。
気配を読むなんて、練習の仕方の検討もつかない。瞑想でもしていればなんとかなるのだろうか。
武装色なんて意味がわからない。
なんだ、腕が硬くなるって。
硬くなるって念じればいいのだろうか。
覇王色なんて、期待していない。
もうあんなもの無理だ。
よくわからん状況で周りが気絶するのだ。
謎しかない。
また追加でも課題も見えてきた。
スーロン化である。
できること自体は以前の内容で確認をしている通りなのだが
できると上手く扱えるは全くの別物である。
こちらは、練習を経て凶暴化や見境なく暴れ回らないようになっていく描写が本編であった。
だが、今回の私のスーロン化はどの程度の強化割合なのか、理性は保てるのか、こちらの知識や記憶は全く出てこなかった。
おそらく、スーロン化をすると理性は無くなってしまう（練習が必要）のではないかと思われる。
ただここで難点は、満月の周期が1ヶ月に1回程度というところだ。
個人の状況で言うならば、月1回だけで自主練もできない状況で慣れていくという作業は不可だろうと考えている。
普通に考えても月1の練習でうまくいくなんて、何事も才能に溢れ

ているもののみの特権である。
そうなると、某アニメのブルーツ波のごとく、疑似的な満月発生装置を作るのか、ランブルボールのように丸薬で代用できるものを開発するのかしない限り、満月のみの能力がピンポイントすぎて使えない、かつ練習もできない。

かといって、イーストブルーにくるやつで覇気を知っていそうなやつは、バギー、アーロン、シャンクス、ガープ、クロッカス。
後者のスーロン化は、ランブルボール的な観点で船医のクロッカス。科学者に関してはグランドライン以降の状況しか知らないのでなんともいえない。
いずれにせよ、イーストブルーにくるまで時間がかかりそうだ。
練習場所に無人島という誰にも迷惑をかけなくて済む場所があることは素直に救いだろう。
それに覇気使いがポンポン現れるとも思えないし、追々やっていこう。
考えれば、課題は山積みか。
まあ、ベルメールが殺されるのも今から17年後の状況だしな。

さて、ご飯も食べ終わったことだし。
早速おばあちゃん家へと訪問し、服をまず着替えようと思う。

お婆ちゃんの家は、実はそこまで遠くない。
ジゲスの家より歩いて5分少々といったところだろう
街自体は島の裏側といえども、街もある程度しっかりとしている。
見た限りだと、住宅の個数も数十棟は並んでいるし、飲食店や服屋、シジマお婆の金物屋、八百屋。
海軍基地があることで、治安が保たれているなどの理由もあるのだろうか。
また見渡す限りの海も眼前に広がっており、非常に気持ちが良い。
海自体も透き通るぐらいの透明度で、海を見ているだけでも、癒さ

れるようである。
　海を見ながら少し歩けばもうお婆ちゃんの金物屋は目の前だった。
「あら、フェンちゃん、昨日はよく眠れたかい」
「心配かけた。ジゲスおじさんも優しくて、ゆっくりと寝れた。ありがと」
「あの子、顔は怖いけど人一倍お節介で優しい子だからね。ほら上がっておくれ。服の着替えを済ませちゃおう。せっかく別嬪さんなのに、いつまでもボロボロじゃ勿体無いよ」
　お婆ちゃんと共に、店の2階に上がっていく。
「お婆の孫のお下がりで悪いね、急拵えで準備できるのが孫のお下がりしかなくってさ。許してくれるかい」
　そういって取り出してくれたのは、大きめのTシャツとハーフ丈の黒のパンツだった。
　サイズもぴったりで、ちょうどいい。
　そういえば、耳や尻尾のことは出していても問題ないのだろうか。
　お婆ちゃんに聞いてみると
「そう言うと思って、これも作っておいたんだ」
　そう言って、出してくれたのは猫耳用に耳のカバーもついているニット帽を渡してくれた。
「うん、ぴったり！嬉しい！」
「そりゃあ、よかった。お婆も頑張った甲斐があるね！それだったら耳の部分も帽子のデザインに見えるだろう。今はこの島の者しかいないから心配はないだろうけど、信じられる人間以外には見せない方がいいだろうね」
「気を付ける。でも不服」
「何がだい？」
「私もらってばっかり。私も何かしたい」
　結局のところ、何着かお下がりをベースに拵えてくれた服を貰ってしまった。
　それに、帽子まで。
　こんなにもらってばっかりでは、流石に何か自身でできることで返

せるものや仕事などはないのだろうか。
「子供が気にするんじゃないよ。お婆は、フェンちゃんみたいな女の子には恵まれなくてさ、男の子ばっかりだったんだ。女の子の娘が欲しかったんだ、娘ができたようで楽しくてね」
「それにお婆のお茶に昨日付き合ってくれたお礼さ。それに着ることがもうなくなった服さ、フェンちゃんみたいな可愛い女の子に服も着てもらった方が嬉しいよ」
「じゃあ、お茶にしよう。今日のお礼は、お婆のお茶に付き合っとくれること。それがお婆は一番嬉しいよ」
そこまで言われては仕方がない。
後で何か、お礼できそうな物探しておこう。

別にその後は何かあったわけではなく、普通にお婆ちゃんと茶を飲んでしばらくまったりとした時間を過ごした。
お婆ちゃんとのまったりとしたお茶の時間を過ごした後は、お昼になる前に家に戻っておく。
早速エレクトロの電気信号の実験に入るためだ。

エレクトロの練習は、順調だった。
なんせ、知識と経験はすでに持っているのだ。
使い方も自然にわかるし、念じれば電気がバリバリしだす。
ただ繊細な使い方に、ミンク族が向いていないのか、そこまでは戦闘力の部分ではなかったのか、微弱に電気を流そうとする調整は非常に困難だった。
箸で胡麻をつかむように、めちゃくちゃ集中してやっとこさできるぐらいの状況だ。
また、その状況では流石に自身の末梢神経や電気信号に関しての電気を強めるなんてことは怖くて行えなかった。
この状況で人の電気信号まで読み取るのは、まあ難しいもので、こちらはまずは自分自身の電気信号をまずは感じることや、微弱な電力を安定して自然に作り出せるようになるまでは、次のステップはお預

けだろう。

内容をしっかりとまとめて、今後の内容を倉庫件、現在の自室で考えているとおじさんが帰ってきた。

「おーい嬢ちゃん、帰ってきてっか！紹介しておきたい人がいるからよ！降りてきてくれ！」

自室より、１回のおじさんの下へと降りていくと

「っ！めっちゃかぁわいぃ!!!!!」

突如、何かふわふわしたものに抱えられる。

ちょ、ちょっと待て!!!

いき、、いきができない、、、

「おい！嬢ちゃんが死んじまうからやめろ！」

死ぬかと思った。

無事にジゲスが引き離してくれ、地面に降ろしてもらった。

「ごめんなあ、嬢ちゃん。うちのお袋、可愛いものに目がなくてよ」

どうやら改めて状況を見てみると、先ほどまではジゲスのお母さんに抱かれていたらしいと理解した。

ジゲスのお母さんは、私よりは流石に大きいけれど、私の目線に肩があるぐらいのため１６０センチぐらいだろうか。

また目はクリクリと大きく、髪もボブ程度で、おっとりとした印象を受ける。

ジゲスのｔｈｅ船長といった風貌からは想像のできないお母さんだ。

「ジゲスちゃんも、こんな可愛い子がいるんだったら昨日のうちに教えて欲しかったわ！隠していたのね、ずるいずるい！」

絶賛プリプリしている方を何度見ても、見た目も若く、どう考えてもジゲスの見た目から考えられる年齢ではないのだが。

ワンピースミラクルなのだろうか。

「ねえ、もう一回！もう一回でいいから抱っこしていいかしら！」

「後でだったら、時間取るからとりあえず今は待ってくれ！嬢ちゃん、

びっくりさせてごめんな。俺だけだと嬢ちゃんの飯とかよ、面倒見てやれねえ時も出ちまうから、お袋が俺がいない時に来てくれることになったんだ」
「フェンちゃんっていうのね！私はロロよ。ねぇ！ジゲスちゃんこんな可愛い子の世話だったらむしろ毎日でも来ていいかしら。むしろ、毎日来たいのだけれど！」
流石に最初のいきなりの抱っこは怖すぎた。
現在もずっと視線はこちらに向いており、ちょっとばかりジゲスの脚を盾にする。
「・・・・っよろしく」
ちょっと、よだれが出ているんだが……。
目も獣の目なんだがっ!!
「こんなお袋でも、俺を育ててくれた実績があるから。信じてやってくれ」
「俺がいないときはお袋が来てくれるから、いないときはお袋を頼ってくれや」
次の瞬間には、もう腕の中に収まっていた。
「もう我慢できないの!!かぁわいぃ!!フェンちゃん、お母さんって呼んでいいのよ！むしろ、呼んで欲しいわ！ジゲスちゃん、今日は一緒に寝ていいかしら!!」
めちゃめちゃほっぺたとほっぺたですりすりされる。
可愛がってくれるのは嬉しい。
幼女になっているためか、別に女性でふわふわしていても何も感じはしないのだが。
近すぎやしないだろうか。
そしていつまで抱っこされていなくてはならないのか。
そんな目線をジゲスおじさんに向けるものの、目を逸らされる。
おい、こっちを見ろジゲス。
（ごめんな、お嬢ちゃん。お袋が飽きるまでそのまま頑張ってくれ）

少し時はたち

それからの話は何年も変わったことがあるわけでなく、海賊が襲ってくることもほとんどない平和な日常を送っていた。
ジゲスは漁に行ったり帰ってきたり、シジマのおばあちゃんのところに行ったり、ジゲスのお母さんに捕まって離してもらえなかったり。
そんな生活を8年程度過ごしていた。
当初心配していた、海賊がロジャーの死後劇的に増えたのは増えたらしいのだが、結果海軍基地の周辺にわざわざ寄り付きたいなんて海賊がいるわけもなく懸念したことが起こったりはしなかった。

変わった点といえば数点ある。
・スーロン化を擬似的に引き起こす錠剤が出来上がったこと
・例の覇気もどきの習得
である。
中でも苦労したのが、スーロン化の薬作りである。
まず一番最初に行ったことは、海軍とのつながりを持つことである。
これは、薬作りに関して医学書などの書物を閲覧できる可能性が街では一番高いこと。
薬作りとしても、薬の保管場所に支部内の救護室（スポイトやピペット、ガラス瓶、冷蔵庫）などの設備が必要だったためだ。
ただ物語序盤から読み取れる状況より察するに、イーストブルーでの海軍軍部での腐敗はひどい状況であったことが記憶にあった。
フルボディ、ネズミ、モーガン。
どれをとっても腐敗している状況の象徴であろうと思った。
つながりを持つ、かつ、海軍にはならないというルートを考えなくてはいけなかった。
そこで考えついたのが、武術の外部顧問の立ち位置だった。
ミンクとしての種族の強みを活用しようと考えた。

これはミンクとしての戦闘力がグランドラインの新世界種族であることや元々の戦闘力が非常に優秀な点、新世界の実力で訓練ができるメリットがある。
ミンクという種族を知っている人がいるのであれば、喉から手が出るほど欲しいのではないかと考えた。
それに現代武術の知識である。
これは、もちろんワンピースの世界で通用する場面も限られるが、身につけて損はない技術であると自負している。

海軍に売り込みに行った。
一番最初は、何度も訪問する予定で向かったわけだがすんなりと外部顧問へと就任が決まった。
案の定、考えていた通りイーストブルーでの実力を身につける機会の圧倒的少なさや、ミンクの資料を見たことがある人員が支部にいたこと、また実力を見せろと疑ってきた奴らを、千切っては投げた結果である。
もちろん交換条件は医学書物の閲覧や取り寄せを可能な範囲で頼んだこと。
救護室の使用である。
こちらが、無人島到着より1年目のことだった。
それからはもっぱら研究三昧である。
エレクトロの実験をし、武術の感覚を鈍らせないために兵士の訓練や模擬試合に従事したりと体を動かしながら、満月の日には無人島へ船を出した。
どうやって薬の問題の解決に至ったかというと、満月の度に自身の血の採取を行った。
スーロン化すると理性が案の定飛んでしまうため、完全にスーロン化する理性が残っているギリギリだったり、朝日が登る間際だったりに血液を抜き取り、血液の成分などの研究と、医学書物の文献などを読み漁り、5年という時間をかけて作った。

効力は、満月はずっとスーロンだが薬は1時間の制限付きだ。
そして服用数に限度はあり、1日一錠飲んだらその後は1日空けるのがオススメだ。
1日で2錠目は目眩と極度の吐き気。3錠目は失神した。
まぁ、無理に満月はない状況でのスーロン化している都合上仕方がないのだろう。
薬の用法は守って、楽しい薬生活をである。
月一での感覚でしか、スーロン化できない状況では理性の保ち方なんてほとんど練習できなかったものだが、毎日練習できるようになると、感覚が残っているため練習も捗り、1年を終える頃には理性を保つこともできるようになっていた。

その頃には、外部顧問だけではなく、町医者や海軍の臨時救護係として動くこともしばしばとあった。
また武術訓練も行なっているうちに、シェルズタウンの兵士間の練度がどんどんと高くなっていったことは内緒である。
てか、モーガンももう怖くないよな。
こちとら曲がりなりにも新世界産だぞ。
エレクトロも順調に力の開発は進んでいった
内部での電気信号の出力問題も、元々の電気耐性もあり、微弱な電気の操作や細かい電気の操作が安定してできるようになった頃にはできるようになっていた。
平時の身体能力と比べたときは、当社比2～5倍までの向上が見られた。
界王拳2倍だ状態である。
ただ向上率を上げすぎると、体に負荷がかかりすぎるため5倍の場合は10分少々が限度だった。
それ以上の時間は、まずは吐血より始まり痙攣などの症状よりほとんど動かなくなる。
まあ、仙豆をボリボリすれば治るのだが。
そして電気を体より遠くへ飛ばそうとすればするほど、威力は減衰

してしまうため要注意だ。
人の電気信号を感じ取るのは、体に触れていれば感じ取れるものの遠隔では無理だった。
ここは電気信号を強化すると、副産物で反射の作業や動体視力も向上し、見切り技術も一層強化されるため、もう見聞色の覇気といっても過言ではないのだろうかと思っている。
この８年間は、エレクトロの練習とスーロン化の安定。
副産物として、見切り技術の向上とシェルズタウンの兵士の強化だ。

身長はあまり伸びず、１４５相当だったのが１５５程度、まあ１０センチ伸びたかなぐらいである。
ワンピースといえば、女性のグラマラスなボディは定番だった。
もう見る人見る人、こんな田舎街でもグラマラス。
ボンキュッボンである。
そんな私は、なぜか世界線から省かれた。
きょうび、私の胸はスレンダーである。
神よ、ああ神よ、私になぜお胸をお与えにならなかったのか。
残酷である。
その所為でいまだに少年だと誤解してくる新兵もいるわけで。解せん。

そんなこんなで、８年の月日が流れていた。

「なあ、あんたもいい年だろう。ちょっとはいい男いないのかい、勿体無いねえ」
「余計なお世話。ベルこそ、彼氏いないじゃん」
「あたしより弱い男なんて勘弁さ。それにねえ、海賊もうじゃうじゃいるんじゃ、男なんて作ってる暇なんてないよ」

そういってタバコをふかすのは、例の女のベルメール本人である。
出会いは突然のことだった。

薬も作り終わった。
海兵も訓練し、モーガンに負けない軍にした。（ルフィが危ういかもしれない。勝てそうになかったら、助け舟を出してあげなきゃいけない）
ただ別にすることも、現在はしなきゃいけないこともまだ先の話だったため、いつも通り海軍の外部顧問兼医者として、軍に顔を出していた時だ。
「おはようございます！外部顧問官殿！本日付でシェルズ支部へと配属になりました、ベルメール少尉です！」
ズバッと敬礼と共に挨拶をしてくる女性海兵にあったのだ。
その際には目を丸くして驚いた。
「・・・・あ、あの外部顧問官殿、あたしの顔に何かついてますでしょうか、、」
「いえ、ごめんなさい、なんでもない。気にしないで。よろしくねベルメール少尉」
「はい！外部顧問官殿の扱きはイーストブルー1であると評判であります！この度の配属で、外部顧問官殿の扱きを体感できると、楽しみにして参りました！以後、よろしくお願い致します！」
後から配属されてくる新兵に聞いたのだが、現在のシェルズタウンの評判は「大の大人を千切ってはなげ、掴んでは振り回し、それで以って、恐怖に怯える顔を眺め悦に入る悪魔がいる」と評判だそうだ。
よくもそんな評判のところにきたもんだ。
逆にプリティフェンちゃんファンクラブなるものもあるらしいが、もうプリティの年でもないからやめてほしい。
配属されてきた当初に、ベルメール強化すればアーロンワンパンだ計画を思いつき、ベルメール強化月間を決行。
ベルメールブートキャンプを終える頃には、仲良くなっていたのだった。（原作アーロンに負けることはないだろうが、原作の修正な

どの恐れもあるため要観察）
　これが2年ほど前だ。
　軍でメキメキ頭角を表し、2年で海軍支部将校の地位も大出世していた。
　まぁ現在は大佐だそうだ。

「フェンも外部顧問官なんてやめて、海軍に入ればいいのにって何度も言ったけど結局入らなかったわね。今よりも実入りはいいし、あんたの実力なら海軍本部所属なんて夢じゃないでしょうに」
「イーストブルーでの海軍軍部での腐敗は感じてるでしょ。嫌だわ、めんどくさいもの」
　ふかしていたタバコが吸い終わったのか、タバコを灰皿に落としこちらを見て続ける。
　ちなみに現在は、知らぬ間にすでにベルメールはナミとノジコをすでに知っていた。
　原作ではオイコット王国に向かった際にはボロボロになっていたはずなのに、傷ひとつない状態で、本来ならココヤシ村に向かう予定だったものの、私のところに子供を連れてきた。
　その所為で現在、ちっさいナミとノジコを顔見知りである。
「めんどくさがりねえ。まぁ、そんなあんただからここまで仲良くなれたんだろうから、別にいうこともないけど」
「なら、いいじゃないの。言ったでしょ、私男に興味がそもそも持てないから」
　口調は無口キャラで貫いていくつもりだったのを、一緒に暮らしているジゲスママに矯正された。
「まあいいわ。仕事に戻るよ！さっさと仕事の引き継ぎ終えなきゃならないんだからあんたも手伝いな、どうせ暇してんだろ！」
　無言で嫌だと首を振るも、聞いてくれるはずもない。
　ベルメールがシェルズ支部に配属されてからというもの、元々不良少女の素行??評価のベルメールが書類仕事などまともに行うはずもなく、書類の半分くらいを持って必ず私のところへ持ってくるのだ。

「あんたなら心配ないでしょ、バレなきゃ別に構わないわよ」
毎回、手伝わされるこっちの身は考えてもくれない。
今や、別に知りたくもない海軍事情まで知っていることもある。
「引き継ぎ終えて、明後日にはココヤシ村に戻るってナミとノジコに言ってきちゃってさ。今はゲンさんに預けてきてるけど、あたしがいないと寂しそうな顔するから。早く帰って顔見せてあげたいのよ」
「わかってる。後任の大佐も明日には到着するんでしょ。あとは、私が事務処理の仕方とか教えてばいいんだっけ？」
「何言ってんの。あたしだけであのヤンチャなガキども育てられるわけないでしょ。あんたもいくのよ。ナミもノジコも楽しみにしてんだから」
えー。
何も言われてないんですけどー。
「あれ、言ってなかったっけ。でも決定だから。あ、明後日には出るから荷物纏めといてね」
「ベルは勝手すぎるって！わかったけど、今度から前もっていうこと！」
「はいはい。じゃあ、さっさと仕事終わらせましょ」

ここからが原作開始の時期に入っていく。
今でおおよそルフィ誕生ので、ゾロなんかはもう誕生している。
これから忙しくなるなあ。

出発!!

それから、2日の日にちが経ち
結局のところ、ちゃんとした挨拶もできずに出発することとなった。
ジゲスには
「そうか。拾った時はよ、可哀想な嬢ちゃんだったと思ったらあっという間に大きくなりやがって。元気でやってりゃあ、おれぁよ、それでいい。また帰ってこい」
と言われ、泣き
ロロさんには
「フェンちゃんがいないと寂しくなるわね。お母さんは大丈夫だから、元気にいっておいで。たまには顔見せに戻ってきてね!」
と言われ、大泣きし抱きしめられ
シジマのおばあちゃんには
「あんなに小さかったお嬢ちゃんが、もうこんなに大きくなったのかい。お婆も歳をとるわけだよ。お婆は大丈夫さ。孫も息子も近くにいるからね。こんなこともあるだろうって、フェンちゃんが好きだったお茶、袋に詰めといたから、足りなくなったらまたくるんだよ」
お婆ちゃんのお茶もらって泣いた。

ココヤシ村は、シェルズタウンと行き来できる距離にはあるため、また絶対帰ってくる。
私自身での私物はあまりなく、仙豆を生み出す巾着に、海軍より辞めると言った時にもらった薬を作る用のガラス瓶やガラス管などの製薬道具。そして冷蔵庫。こちらは辞めると言った時にないと困るだろうと、今日まで指導してきた海軍からの贈り物と渡してくれたものだ。
そして、私服が少々。
それらのものは移動用の船にすでにまとめて積み終わっていた。
「さっさと出港するよ、いいかい」

「うん、準備できてるからいいよ」
寂しくなるのは嫌だったから、今回の出港には来なくていいと釘を刺してある。
そしてココヤシ村までは船で半月も進めば到着する程度の距離であるため、会いに来ようと思えば来れる程度の距離であることもあり、また日をあまり開けずにくる予定だ。
「それじゃ、フェンは錨上げてきてくれる？私は帆を張ってくるから」
そう言ってベルは、甲板の上へと上がり、帆を止めている紐をほどきに行く。
私は私で船尾にある錨を上げに向かった
その時
「外部顧問官殿、ベルメール大佐殿、本日までご教授やご鞭撻いただき、誠にありがとうございました！」
「皆、シェルズタウンを島を立つ両名の今後の健闘を祈り敬礼!!!」
そこにいたのは、シェルズタウン海軍支部に配属している海兵たちが一堂に会して並んでいた。
海軍は、配属されては出向や出張も多くあり、私が鍛えた新兵も本部勤務に変わったり、かと思ったら本部から出向で配属されたりと出入りの激しい時期もしばしばあった。
そのため、入れ替わりも多いことから本部勤務となってからはあまり会わなくなった面々もたくさんいるし、現在の近況なんて全く知らない教え子も多くいた。
８年という月日は長く、連絡も頻繁に取れるわけでもないため仕方がないものと割り切っていた部分も正直多かった。
そんな中の面々が、どこで出発の日を知ったのかわからないが、面々の中に紛れ込んでいた。
「馬鹿だね、いっぱい扱いただけだよ？せっかくの休日なのに、私なんかの見送りに使っちゃって」
「あたしもだけどさ、みんなあんたに鍛えてもらって強くなって出世して。私なんて出向された時なんて少尉が知らぬ間に大佐までなってさ。みんな感謝してたよ」

「外部顧問官殿のおかげで、家族や友人に自慢ができるって。メキメキと実力がついているのがわかるから嬉しいって。楽しそうだったしね。ほら、ちゃんと返してやんな！」
ほんと馬鹿だよなあ。
こんなところにあつまる暇があるんだったら、ちゃんと休めよな。
「すでに外部顧問官としての立場ではないが、君らの指導を賜っていたものとして言っておくことがある！」
「さっさと戻って仕事をしなさい！馬鹿者！」
また涙が出るだろうが。
こちとら、身内での別れでだいぶ泣いてるんだ。勘弁してくれ。

あとは振り向かずに錨を上げて、帆を張った。
帆に風を受け、ベルと私を乗せた船はどんどんを進み見る見るうちに島との距離は離れていった。
「ほら、よしよし。存分に泣け泣け。存分に胸を貸したげる」
「だって！あんなの卑怯！」
もう島も米粒より小さいくらいになり、別れを済ましてからしばらく経っている。
ベルメールの豊かな胸を借りながら、まだぐずぐずしていた。
あんなのずるいよね。
みんな集まるなよ。
そんな感謝なんてされたら、泣くだろ。
見送られたら泣くだろ。
泣くだろうよ!!!
別れは別れで寂しいものの、ベルメールと一緒にいることは楽しいため別にココヤシ村生活は普通に楽しみである。
ナミは赤ん坊だから、育っていくのを見るのは普通に楽しみだし、ノジコはノジコで小さい子供は普通に可愛い。
もう島が見えなくなる頃には、すっかりと涙もおさまって、今後の内容の整理をしていた。
まずの懸念は、原作との乖離である。

ベルメールは簡単にアーロンに殺されないだろうし、モーガンに関してはシェルズ支部の面々で簡単に負けてしまうことはおそらくないだろう。
また、ルフィに関してもシェルズタウンで詰んでしまう可能性すらあるのではないのかと心配している。
まあ原作開始は１７年後であるため、ナミは海図に興味が湧くように
ルフィはシェルズタウンで負けないように。
モーガンから住民の安全が守られるように。
ベルメールは殺させないように。
対策を打っていく必要がある。
また赤髪と、ガープがイーストブルーに出入りしている話もチラホラと聞くためこことの距離感もどの位置につけておけばいいかも考えていかなくてはいけない。
ちなみにガープはすでに遭遇しているが。
こちらは本部勤務と栄転した知り合いの海兵が、たまたまガープの部隊に配属になり、イーストブルーの海兵にしてはしっかりと実力があることに疑問を抱かれたらしい。
これが今から1年前のこと。
その際に「メチャクチャな外部顧問がいて、毎日稽古だ実践だと毎日投げ飛ばされているうちに強くなった」と伝えたそうだ。
元々、東の海にそこそこ出入りしていたガープは興味を持ったらしく会いにきたのだ。
「おい、強い外部顧問がいるそうだな。興味がある、俺と死合いしようぜ」
いきなりの申し出と共に拳が飛んできたのだった。
私も全力も全力。
すでに英雄となったガープで原作とは違い全盛期である。
まさか秘中の秘であるスーロン化薬は使わなかったが、エレクトロでのバリバリ状態5倍マンで応戦した。
「お前、ミンクだったのか。その割に獣っぽくない気はするが」

私は頑張った。
現代武術は強いんだよ、だって相手の力を利用する中国武術だって私は使えるんだ。
例えば、発勁なんて相手の内部に、相手の力を利用した衝撃をそのまま与える技さ。
「生身だと痛えな」
「さすがミンクだ。イーストブルーにいるのがもったいないわ」
「速いじゃねえか。それにいい見切りだ」
コテンパンでした。
全く攻撃は効かないし、電気流しても平然としてるし、武装色対策で考えていた発勁も平然とした顔で受けやがったジジイ。
流石に武装色の覇気や見聞色の使用までは持っていったが、それ以上は歯が立たなかった。
「お前、見聞色の覇気は相当高いレベルだけど。攻撃が俺レベルになると弱いな。武装色は使えんのか」
そりゃあ、海軍の英雄と比べるな。
「お前、おもしれえな。外部顧問官なんてやめて、俺の部下になれよ。武装色使えるよう、鍛錬に付き合ってやる」
「バカは寝てから言ってくださいな、クソジジイ」
そこから1週間ぐらいは滞在しやがって、しこたま殴られた。
女を強いからっつう理由で殴り倒すか普通。
ちなみにベルメールも巻き添い食らっていた。
武装色は完全には身に付かなかったものの、武装色を使われても、発勁はある程度の有効打になることを掴めたのは大きい収穫だが。
またエレクトロも、ガープレベルの変態でない限りは通用するらしい（ガープ談）
また見聞色もどきも通常の見聞色に相当するレベルの動きだとお墨付きをもらった。
実力といっては、
新世界入門から中級編までは通用しそうだとの評価だ。

そんなこともあり、ガープは顔見知りである。
まあ何にも言わずに出向してやったがな。ボガードさん、ご愁傷様です。
いまだに会うたびに海軍に誘ってくるため良い迷惑である。

他にも、バギーなどの状況もシャンクスが動いていることから動き出していることは、間違い無いだろうし。
「フェーン！そんな面白い顔して、ずっと考え込んでるとシワも増えるよ。腹も減ったことだし、ご飯にしましょ」
「余計なお世話！ベルは何も考えなさすぎ！海王類だって出てくるかもしれないし、ガープだっていつ湧き出てくるか」
「それは流石に嫌ね。考えすぎよ。ほら、美味しいみかん酒でも飲んで初日はパーっとやりましょうよ」
まあ、今日のところはいっぱい泣かされて疲れたしな。
また後で考えよう。
「じゃ、早速料理の準備ね。ベルは何食べたいの？」
「今日は勝手に持ってきたステーキがあるから、焼いてお酒で豪勢に！」

閑話　とある新兵の日常

つい先日、海軍での配属されるにあたりの研修を終え、シェルズタウンの配属になった。
軍部での仕事で新兵に割り振られる仕事は主に、３つ。
新兵として、戦力になるために必要な体づくり。
また戦闘になった際のための武術や戦闘訓練。
そして、支部内での雑用。
主に新兵のうちは、３つの仕事を行い、武功や功績（海賊を捕まえる、将校などの上官に認められるなど）を残したものから、本部への栄転や支部内での昇格に繋がっていく。

オレも例に漏れず、雑務や筋トレなどの日常を繰り返していた。
そんな中、いつものように支部内部の掃除を終え、筋トレのメニューを消化していく。
（毎日筋トレばっか。別に掃除なんてしたって楽しいわけじゃねえし）
普通は配属後からすぐに戦闘訓練から行われていくのが、通常だ。
もちろん、ここ以外の配属になった同期は連絡を取るとすでに戦闘訓練をしていると話していた。ただ、ここでの戦闘訓練は体ができていないと危険を伴うといった理由から、支部配属後は主に筋トレと雑用から行なっていき、体が出来上がっていると判断されたものから戦闘訓練がメニューに追加されていく。
若くして海軍の門を叩いたために、必要な体ができておらず、こちらでも同じ時期に配属された他のもとは続々と戦闘訓練に移っていく中でも私は配属されてから半年は経っているものの、まだ戦闘訓練の声はかかっていなかった。
途中でもちろん焦って、担当の上官に話してみたこともある。ここでは担当上官からの訓練でさえ、許可制だからだ。
「そっか。戦闘訓練したいのかぁ。焦る気持ちもわかるけど、フェンさんがＯＫ出してくれないと僕にはその権限がないからなぁ。一応

掛け合ってみるけど期待しないでね」
そういって、外部顧問殿に掛け合ってくれたようだったが即刻却下されたそうだ。
（なんでオレだけずっと筋トレなんだよ。意味がわかんねえ！あぁー！イライラする！）
当初、シェルズタウン配属の連絡をもらった時は飛び上がって喜んだ。
イーストブルー界隈での海軍の噂なんて良い噂はなく、賄賂や腐敗の情報もしばしば漏れているようで新聞にもたびたび汚職事件として報じられていることもしばしば。
そんな中で海軍に入る希望としては自身の実力を鍛えたいからとか、今のイーストブルーの海軍の状況を変えたいとか、同期は話していた。
幼い頃から線が細く町のガキ大将にバカにされていたこともあり、オレも自身の実力を鍛えるために海軍の門を叩いたのだった。
シェルズタウン支部の話は噂程度ではあるが、チラホラと耳にすることがある。
『シェルズタウン所属の兵の練度がやばい』『あそこで訓練を行ったものは、ほとんどが海軍本部所属のエリートになるらしい』『外部顧問いるらしいが、人の皮を被った鬼らしい』とか様々だ。
ただ、シェルズタウン支部からは悪い噂がでないことと、非常に高い教練を受けられるとの話も聞いていた。

より高い戦闘能力を身につけたい私にとって、シェルズタウン勤務は吉報だったはずだった。
（それがこれだもんな。来る日も来る日も筋トレと雑用。シェルズタウンじゃないところの方がよかったんかねえ）
はあ、と一つため息も出てくるものだ。
今日こそは今日こそはと待ってはみたものの、待てど暮らせど声は一向にかけてもらえない。

（外部顧問官どのとか敬ってやがるけど、変な帽子被ったただの女じゃねえか。馬鹿らしい）
考えながら、雑務や筋トレを行なっているとふと見慣れた背中が目に入る。
かの有名な顧問官殿が目の前を通りかかった。
「なぁ、あんたが外部顧問官殿だろ！なんで俺だけ、ずっと雑用なんだよ！さっさと訓練に入れろよ！」
「おい、新兵！フェンさんになんてこと言うんだ！今ならまだ間に合うから、謝罪と業務に戻れ！」
「フェンさん！こいつには言い聞かせときますから、新兵の戯言と聞き流してやってもらえませんか！」
顔を真っ青にした担当上官が間に入って、外部顧問官殿に頭を下げていた。
（こんな女に頭下げて情けなねえな、こいつも！）
「外部顧問官殿なんて、こんなクソガキみてえな雑魚じゃねえかよ！くだらねえ、こんな教官についているお前らも全部雑魚なんだろうな！」
周りにも、同じく雑務をこなしている海兵の面々が沢山いた。
そのため、喧嘩っ早いものはすでにこちらに目を向け、みる限りでは血管も浮き出ており、今にも拳を振るってきそうな形相である。
またその他の海兵も不快そうな顔を向けていた。
「あなた、今年配属の新兵だったわよね。雑務と筋トレに飽きてきたってところかしらね。そんなに言うんだったら良いわよ。戦闘訓練してあげるわ。担当上官の君は、監督不行き届きでしばらく教練の量、３倍ね。」
「新兵くんも戦闘訓練に入れるから、今日の訓練メニューは模擬試合にしましょうか。担当くんは新兵の彼を訓練場に連れてきてね。じゃあね元気な新兵くん。また後で、訓練場でね」
話すだけ話して、離れていった。
「はあ、君も元気なのは良いけど勘弁してよ！なんで、こんな子の担当になったんだろ！もー！僕の訓練３倍で済んだから良いものの、これ

フェンさん以外にやってたら、君だけじゃなくて僕も一生下っ端とかあり得るんだからね！」
通常の訓練は、以前上官に聞いた際には組手や支部周囲のランニングでの周回（重りつき）だそうだ。
訓練3倍は重りの量3倍だったり、組み手時も付けなくてはいけないだったり、重りつけたまま組手で相手に勝たないと終了とさせてもらえなかったり、その時々によってバージョンがあるらしい。
上官には申し訳ないことをしたと思うところもあるけれども、内心ではホックホクだった。
念願の戦闘訓練である。
練度が高いと言われるシェルズタウンの戦闘訓練なんて配属当初から気になっていた。
外部顧問がクソでも、他に教官がいて高度な訓練を行なっているものと睨んでいた。
外部顧問官がいなくなってからは、確かに周囲からイライラしている雰囲気や、目線は感じるものの、通常業務へと戻っていった。
そして、今日の戦闘訓練は午後からの予定であったため、お昼を過ぎ戦闘訓練を行う訓練場へと向かう。
「今日のフェンさん、機嫌直ってたら良いなあ」
「あの新兵が余計なことするから！今日の訓練は憂鬱だわ、まじかぁ」
「担当上官も担当上官よね。ちゃんと躾けておいてほしいものだわ！」
様々な言葉が周囲から飛んでおり、上官は俯き、肩身を狭そうにしている。
流石にいっときの感情で振り回してしまったこともあり、声をかけようと近づくと
「・・・・後輩の手前、済んでよかったとか言ったけど、いつもの訓練でも死ぬのに・・3倍だって・・・今日死ぬのかな・・・」
ボソボソとずっと呟いている。
流石に気味が悪く、声をかけることはできなかった。
訓練場に到着してみると、すでに顧問官殿が立っていた。

「本日の戦闘訓練は、私ｖｓ支部選抜メンバーでの戦闘訓練を行う！また選抜されたものは途中リタイアは許されず、倒れたまま立ち上がれなかったものは上官や担当と共に、訓練３倍とする。嫌だったらすぐに立ち上がって向かってくること。例の新兵くんも、今回の選抜に加えるからそのつもりで」

メンバーは、この支部の中でも屈強な面々から選ばれていく。名前を呼ばれていくわけではなく、普段の支部内での実力から選抜されるらしい。

支部内の将校のメンバーも一通り選抜され、支部での精鋭２０人（支部内の総計は２００人程度）が前に出る。

その中に混じってオレも参加した。

「選抜されなかったメンバーは、まずは支部周りのランニング２０本と終わったものから見取り稽古よ！実力が高いもののスキルをしっかり盗むように！選抜されたメンバーは、戦闘時間は全体で１時間。今から５分後に開始とする。メンバー内での作戦を練りなさい。以上。５分後に開始とする！」

「今日は、５分しかない！さっさと作戦を練らないと、フェンさん気合い入ってんぞ！」

中でも一際真面目そうな海兵の一言で、作戦会議が始まった。

一応のこと、担当上官も戦闘技術は支部内ではある程度の位置に収まっているようで精鋭の中に選抜されていた。

「今日の訓練は問題がいくつかある。フェンさんの気合が違う時点でやばい。そして、いつもリタイア可なのにリタイア不可もやばい。さ

らにさらに、交代も通常の訓練とは違い失われたやばい」
　通常の訓練では、ランニングに向かったメンバーは交代要員で残され、戦闘不可になったものからチェンジされ、交代制で訓練は行われるらしい。そして自己判断で不可と思ったらリタイアありとのことだったが、今回どちらも不可というものは、非常に気合が入っている時のみらしい。
「内容から２０人全員で向かっていって体力を浪費し、全員が戦闘不能になることが一番まずい！フェンさんに勝つことは不可としても、フェンさんが満足しなければ、今後の訓練がどうなっていくのかも想像がつかない。よって、５人１組としての４つの組みを作り、入れ替わりでの戦闘が望ましいのではないかと提案する」
「待ってくれ、５人ではフェンさんに瞬殺されて終わりだ！手加減はしてくれるだろうが、体力回復の時間が取れないのではないか！」
「なら、１０人１組として２交代制ではいかがだろうか！」
「しょうがない、２交代制が妥当であるか。各自、今回ももちろん勝利を狙っていくが、可能である限りは最低交代まで５分程度は粘りたい！できる限りは各々で時間を稼いでいくことを念頭に置いてくれ！」
「「はい」」
「新兵くんは担当上官もメンバーにいただろう。彼と共に動くように」
　作戦が練り終わる頃には、５分と設けられた時間もあっという間に過ぎていた。
「作戦会議は終わったようね！じゃあ時間も経過したことだし、早速訓練に入りましょうか」

　行って、初めてわかるものは多すぎた。
　１時間なんて持つはずがなかった。
　後から聞いた話だが、ミンクという種族で猛者が跋扈するグランドラインでも新世界の種族だそうだ。
　本人は話さなかったそうだが、戦闘中に戦闘訓練（模擬試合）で帽子が落ち、本や資料などより種族を見たことがある海兵がいたためバ

レたそうな。

　ものの５分もかからずに、最初に挑んで行った１０人は伸され、焦って向かっていった残りのグループも同程度の時間で伸され、立ち上がる力も残らず、１時間の半分どころか１５分程度で完膚なきまでにやられた。

　かくゆうオレも、

「あれ、新兵くん。なんで倒れてるの、まだ動けるでしょ？」

　立ち上がっては顔面に拳を入れられ

「あんなにガキって馬鹿にしてたのに、もう動けなくなったの？ダサいねえ」

　立ち上がっては、ボディに蹴りを入れられ

「私って雑魚なんだよね、じゃあ新兵くんはナメクジかなんかなのかな」

　また立ち上がっては、何メートルかわからないぐらいの距離を吹き飛ばされる。

　あの幼女のような体からは考えられないほどの膂力から繰り出される打撃の数々は、心を折るには十分すぎるものだった。

（あぁ、馬鹿だったわ。勝てるはずねえわ、そりゃ）

　支部に在籍している屈強な男たちもコテンパンにされ、また名ばかりの外部顧問官ではなく、別の教官なんていうものは存在しなかった。

（種族がちげえ、才能がちげえ、運動能力もちげえ。勝てる要素が一つもなかったじゃねえか。情けねえのはおれの方だ。）

　担当上官は自分の進退もそうだが、自分の身を案じてくれた状況も浮かんでくる。

（これ、分かってたから言ってたんだよなぁ。ほんとに申し訳ないことしたわ。）

　流石に自分よりも体格も小さい女の子に負けると思っていなかった背景もあり、体も心もボロボロだった。

　体力も伸されてから指一本動かすことも上手くいかないぐらいだ。

（情けねえな、ちっさい頃からやられっぱなしで。母ちゃんには心配かけっぱなしだ。ようやく海軍に入って、少しは強くなれるって思ってたのに、こんだけ筋トレしてもこのザマだよ。）
（田舎に帰って、母ちゃんと畑耕して過ごすしかねえのかな。）
そう思った矢先に隣から声が聞こえてくる。
「・・・・おい、新兵さんよ・・・・」
隣から、声が聞こえる。
隣にいたのは、訓練所に移動する際に愚痴をこぼしていた海兵の中の一人だった。
「・・・さっきは愚痴聞こえてたろ。悪かったな。入ってきた当初はよ、ヒョロヒョロのガキが入ってきたと思ってた。それが、半年でいい体格になりやがって・・」
「・・・・今日、フェンさんに何回へばって倒されたよ」
「・・・・5回ぐらいすかね。・・・・」
そう返すと、隣の海兵は自分と同じくらいボロボロの身体を起こし、立ち上がる。
「おい、お前ら！聞いたかよ！今日初めての新兵がフェンさんの打撃食らってよ、5回も立ち上がってるらしいぞ！」
「そりゃあ、根性のある後輩がきたもんだなぁ、おい」
「将来有望な後輩だわ。今度嫁に貰ってもらおうかしら！」
今まで自分と一緒に寝ていた海兵たちが、次々とボロボロの体を起こして、1人、1人と立ち上がっていく。

「息の良い新兵が入ってきたもんだと、オレァ感心したからよ！ここらで先輩の意地、見せなきゃなんねえな」
誰1人として、寝たままになっている海兵はいなかった。
「生意気な後輩で、僕も絶賛苦労してますけど。自分の後輩の尻拭いもできない上官には、なりたくはないですからね」
「良い後輩もったじゃねえか。良い海兵になるぞ、そいつ」
「僕に対する嫌味ですか。今まで、雑務をこなしててくれたように。これからももう少し大人しくしててくれるとありがたいですがね」

あんだけの迷惑をかけたのに、上官もみんなと同じように立ち上がっていた。
そして、会議の時に一際目立っていた真面目そうな上官より全体に声がかかる。
「諸君！気合の入った後輩に、上官の意地を見せねばならん！」
「「「おう！」」」
「敵はまだまだ余裕そうな顔をしているな」
「「「おうっ!?」」」
「非常に腹立たしいが余裕そうに、こちらの状況を敵は見ている模様だ」
「ただ我々は新兵の見本となるべく、一矢報いなくてはならない」
「覚悟はいいか、諸君!!!」
「「「おうっ!!!」」」
「一斉に突撃!!!いくぞ!!」
「「「おぉーっ!!!!」」」

その後、見事にやられました。

フェンさんは強かった。
戦闘訓練はその後はランニング組が帰ってきて、今日のところは解散となった。
立てないメンバーはランニング組で体力あるものに担がれ、寮へと帰っていった。

運んでくれようと声をかけてくれた人もいたが、訓練場で考えたいことがあると断った。
オレはしばらく訓練場で体力が回復するまで寝ていた。
「やっぱり。こんなところだろうと思った」
フェンさんだった。
みんなが撤収した後、誰もいないことを確認していたのにいつ戻ってきたのだろうか。
「不思議そうな顔ね。あなた、訓練からずっと寝てたでしょ。担当上官が『新兵が帰ってきておりません、訓練後から誰も見ていない状況であります』って私のところまできたわ。」
「もう夜中よ、こんなところじゃなくて早く寮に戻ってゆっくり寝なさい。」
あたりを見渡してみると、昼の明るさはなくすっかりと暗くなっていた。
フェンさんの手にはランタンが握られており、それを渡される。
「私は人より夜目が効くから大丈夫だし、これもってさっさと帰って。担当上官も心配してたわ」
「はい。でも、いいんですか」
「何がよ。」
「オレ、フェンさんに生意気な口聞いたし、上官にも迷惑かけました。本来だったら解雇とか田舎に帰れって言われるもんだと」
「別に気にしてないわ。そんなこと言う暇あったら、担当上官に顔見せてしっかりと謝ってきなさい。あんたの上官、あの後も疲れているだろうに『今回の件は、私の監督不行き届きで監督責任であります！罰則は私で全部責任を負います故、減免措置をいただけないでしょうか！』とか言って、ずっと私に謝ってきたわよ。私は外部顧問で権限も何もないのに。」
少し微笑ましい内容を話すように、少し笑いながら話してくれた。
「あなた、いい上官持ったんだからしっかりと訓練に励みなさい。それに私の攻撃に5回も起き上がったのは新兵では初めてよ。海軍に向いてるわ」

「しょうがないわね。立てないなら担いで行くけど、悪く思わないでね」
そう言うと膝の裏に手を回され、もう片方は背中に回される。
(ちょっと待って、男でかつ知り合いの多い支部内の寮までこれで行くの!?)
「勘弁してください!・オレ、担がれて戻るつもりないですから!!ごめんなさい!では失礼します!!」
少し楽しそうなフェンさんを尻目に走って帰った。
担当上官にはこっぴどく叱られたが。
以後、フェンさんとは仲良くしている。
思っていた以上に、フェンさんは優しく万能だった。
戦闘がつよいのは、訓練でよく分かったが常日頃から医学書を読んでいることから、医学知識に精通し、時には重症の患者でも病気じゃない限りは次の瞬間には全快で帰ってくることもしばしばあった。
ミンクの力というのはそんなに万能なのだろうかと不思議に思うこともあったが、フェンさんだしなと納得した。
また能力もエレクトロとかいう電気バリバリの能力も見せてもらったが、あれは凄まじく、後日英雄ガープと試合をしているところに遭遇したが、手加減されていたことを改めて実感した。
(オレもいずれは、フェンさん超えて守ってやれるぐらいに強くなってやるからな)
そんなオレは、現在ガープ中将の船に乗っている。
フェンさんとの試合を眺めている時に呆然と突っ立っていたら
「この状況を見ても、怯えずに一歩も引かずに見ているとは将来有望だな、こいつ。もらっていってもいいかフェンよ」
「私の部下じゃないわよ。あんたが海軍のお偉いさんでしょうが、海軍で決めてよ」
「そうだった!・おい、オレと一緒に来るか!・すごい強くしてやるぞ!」
流れからガープ中将の船に乗ることになったのだった。
別れ際にフェンさんからは
「あのジジイ、手加減って言葉知らないから困ったらボガードさんを

頼りなさい」
とありがたい言葉をもらい
訓練問題当時の上官よりは
「上官として誇らしいよ！中将は、気分屋って有名だけど栄転おめでとう！」
（シェルズタウンでの配属になって、運が良かった。フェンさんより強くなってちゃんと恩返しするからな！）
当時、フェンはこれで私のことは忘れてさっさと帰れジジイと思っていたことを彼は知らない。

ココヤシ村へ着くまで。

出港から、半月の時間を経てココヤシ村へと到着した。
道中を無事に過ごしたとは言いづらい旅路であった。
女がいるぞと群がってくる海賊に襲われること、数回。
ヤソップの勧誘に来た、赤髪一行に遭遇すること一回。
どうして海賊というものは、女をみると獣の如く群がってくるのか。
別に街で襲えというわけではないが、自身の精力程度なんとかして欲しいものである。
定番の如く、
「女だ、上物だ。片方は子供みてえだが、暇つぶしにはなるだろ！」
これだ。
そろそろいい年である。
肉体年齢が具体的に幾つなのかは知らないが、こちらに来て最低８年。
当初の１４５程度の身長と幼い顔立ちより考えても、２０前後の年齢ではあるはずだ。
胸がないのが、そんなに幼く見えるのか。

かかってくる輩に手加減する気は一切なく、また片方は先日までは現役軍人で将校だったのだ。
負けるわけもなかったわけだが、わざわざ海軍支部に引き返すのも億劫ででんでん虫も設置していないため、返り討ちにしたらそのまま逃げていくのを追う気もなかった。
「もう軍人じゃないしね」
とのベルメール談である。
途中、赤髪一行に遭遇するのは予想外だった。
原作でも今ぐらいの時期から、ヤソップの噂は広まってきている状況だったことをすっかり忘れていた。
私も確かにシロップ村での銃の名手での噂は聞いたことがあった

のだが、あまり重要なイベントでもないと気にしなかった。

こちらはいつも通り、コンパスと地図を見ながらココヤシ村への航路を確認していたところだった。

「あと数日もあれば、ココヤシ村に着くわね。フェン食糧は間に合いそう？」

「うん、普通に食べてても問題ないかな。ただ、ベルが飲みすぎるから酒はもうないからね！」

「先に確認してたら、さっきの海賊の船から奪ってきてたのに。遅かったわ」

ちぇ、っと声を上げながらコンパスや海図と睨めっこを続けるベル。

食糧の確認も終わり、甲板に戻ると遠目に海賊船らしきものが目に入る。

「ベル、また海賊かも。どうする？私は流石に面倒臭くなってきたわね。」

はあと一つため息を落とす。

ため息をついても状況は変わらないわけだが、海賊に襲われたのは既に本日一回遭遇していることもあり、1日に何回も遭遇していたらため息もつきたくなる。

「フェン、酒よ酒。あなたならそこらの海賊にも負けないでしょ！それに、この船で逃げ切れると思えないし行ってきて！」

「もうめんどくさいって言ってるのに！もう少ししたら行ってくるわ。今日のご飯は、ベルが作ってよね！」

この船での分担は、航海術は全く知識がないため、航海術関連は全てベルに頼ってしまっていることもあり、料理や戦闘はこちらで請け負っている。

まあ船付近まで来れば、ベルも参戦してくれるものの私が多少の距離なら浮けることもあり、離れていても乗り込むことのできる私の方が都合が良かったということもある。

流石に本日2回目の戦闘という状況もわかっているため、料理はO

Kしてくれた。
「酒は忘れないでよ！あと、タバコも切れそう。あったら探してきて！」
うなづく事で了解の意を示し、甲板より飛び出す。

海賊船に近づいていくと、どこかで見たことがあるような緑と白の縞々と、いかつい長髪オールバックが目に入った。
「お頭、なんか女が飛んでくるんだが撃ち落とすか」
後ろからは、見覚えのある麦わら帽子で赤い髪まで出てきたもんだからびっくりした。
――――流石に戦うってなったらまずいよね。
現在はまだ、ルフィが誕生程度の時期のためそこまでの実力ではない可能性もあるものの、原作の強さから考えると人数差も考え、やられる可能性が大いに考えられる。
「物騒なことを言うな、ベックマン。飛んでくるなんて、昔船長と見たミンク族か悪魔の実じゃないと見れない芸当だ。面白いだろう！」
「それに、敵だったとしても倒せばいい話だ。よお！あんた、いい酒があるんだ！一緒に話しよう！」
逃げられない状況であると悟ったからには、近くまで来ていたものの、流石に酒に誘われるのは予想外だった。
みる限り、あぁ、まただよって頭を抱えている船員がチラッと目に入る。

仲間も苦労するよ、こんな奔放な船長だもんな。
船員の何人かは警戒しているものの船長自身は、人の良さような笑みを浮かべて声をかけてくる。
何が起きても対処ができる自信なのか、考えてもいないのか。
「戦わないって言うなら、こちらとしてもありがたいのだけれど。なんで、酒なのかしら。私、あなたと面識はないわよね？」
「いやぁ、飛んでくるなんておもしれぇモンが来たと思ったら、話聞い

て見てぇじゃねえか！話せなかったら倒せばいいしな」
　ガハハと笑う赤髪の顔を見ていると、戦闘する意欲は失せていく。
「話すのはいいわ。もう戦う意欲もないから、船員に武器を下ろすように伝えて欲しいのと、うちの仲間も連れてきていいかしら。いつまでも帰らないと心配させちゃうし。1人だけだし」
「おう、じゃあそれまでに準備しておく。野郎ぉ共！酒の準備だ！」
　伝えて、船内に戻っていく赤髪を見て、自身の船に戻るため引き返す。

「ベル、酒に誘われた」
「はあ!?ワケを説明しろ!!」

　状況を説明し、流石に自分でも無事で済むかなんとも言いかねてしまう実力であること。
　そして向こうから酒の誘いを受けたことを伝える。
「それで戻ってきたわけね。にしても、赤髪かぁ。難しい相手に遭遇したもんだ。」
「幸いまぁ相手も好意的なのと赤髪は悪い噂も聞かないものあるし、私ももう海軍じゃないしね。女は度胸だ、いっちょ行ってみるか」
　納得してくれたベルメールを連れ、もう一度赤髪の船に戻る。

「そいつが仲間か！俺はシャンクスって言うんだ、よろしくな！」
「あたしはベルメール、この子はフェンって言うんだ。酒に誘われたって聞いたから来たけど、この子はあんたにあげる気はないからね

！」
　ババンと効果音がつきそうなぐらい堂々とした宣言をするベルメールを見て、呆然とする。
　待て待て!!
　どこでそんな勘違いに繋がったのだ!!
「ベル！違うから!!」
「シャンクスは、私が飛んできたのを見て話して見たいって思ったそうなの！そこに、そんな意味はないわよ！」
「おっ？お前、フェンっていうのか。強くて面白いなら勧誘しようかとは思っていたがな！」
「フェン！あんたはノジコが待ってるんだから、私とくるのよ！」
「娘でもいるのか。なんだ、娘もうちの船に状況によっては乗っけてもいいぞ！」

「「勝手に話を進めるな!!!」」
　ベルの後ろからは、私が。
　シャンクスの後ろからはベックマンが、それぞれの頭にゲンコツを落とす。

「ベル!!私、酒に誘われた以外に何も言ってないよね！ノジコのところに行くのも嫌だったら、初めに断っているわよ！」
「お頭、仲間が増えるのは構わねえが勝手に話を進めんな！」
　説教をした後、落ち着いて話す。

「それで、今回はなんで酒の場に誘ったのかしら」
「その帽子といい、空飛んでくることといい、フェンはミンク族だろ？新世界以降、ミンク族なんて久々に見て珍しかったってものあるし、正直今の俺の実力がどの程度まで通用するのかの体感もしておきたかったっていうのが本心だ。」
「ミンクって生まれながらに戦闘種族だって船長が言ってたからな。それに、こんな田舎でミンクがいるなんてねえし、そこまで獣の特徴

がねえってのも面白いから、単純に話して見てぇと思ったものある」
いう通りだ。
普段は隠しているものの、空を飛べて耳付き帽子をかぶっていたらミンクだってバレても不思議ではない。
イーストブルーにミンクを見たこともなければ、この体はハーフをモチーフにした設定で送られている。
ミンク族のハーフなんているのだろうか。
見たことのないため、興味を惹かれるのも納得がいく。
「理由はわかったわ。別に戦うのはいいのだけれど、怪我はあまりしたくない。それと身の上話なんてほとんどできないけど、それでもいいならいいわよ。」
「よっしゃ！そうこないとな！」
「おい、お頭！勝手に決めるなんて卑怯だろォ！実力みるってんなら、オレがやってもいいよな！」
「ルウ！俺が先に取り付けたんだ！フェンちゃんも、俺の方が良いよなぁ？」
「シャンクスの方がいい」
現在の実力を見ておいて、損はないし、ラッキールウの実力なんて原作での記載はないため指標にならないことを考えるとシャンクスの方がいいだろうと考える。
「ほら見ろ！ベックマン！船員をちょっと下がらせて、危ないとこがあったらある程度カバーしてやってくれ」
「了解」
船員が後ろに下がっていく中で、ベルメールに声を掛ける。
「ベルも後ろに下がっててて。それと、これ預かっててて欲しいの」
腰につけている仙豆の巾着をベルに渡す。
仙豆巾着はパンパンだ。
これ、生み出すのはいいけれど許容量が巾着に入るだけ。
おおよそ４０粒ぐらいしか入らず、外に置いていると１週間ぐらいで腐ることが発覚している。
限界の４０粒をパンパンに詰めているため、袋もパンパンに膨れて

いる。
「この豆も不思議よね。お世話になってるけど、なんの豆なのよ」
「内緒よ。ほら、危ないからそれ持って離れてて！」
ベルには後ろに下がってもらい、シャンクスと向かい合う。
バレていることもあるため、帽子も外し、久しぶりに頭の上の耳も解放される。
シャンクスは剣を抜き準備を整え、自身も刀に斬られてはどうしようもないため、自身に電気を通し身体能力を引き上げる。

「いくぞ!!」
そういうと、間にあった数メートルの距離を一瞬で詰めてきて剣を振るってくる。
半身になってその剣をかわし、剣の間合いではなく、拳の間合いに詰めるべくさらに懐に入ろうとしてみる。
剣の使用や間合いに慣れていたのだろう。
すぐに後ろに下がろうとするものの、ここは身体能力を上げている私に分があることもあり、空いたボディにまずは一発で電気付きの拳を入れた。
「いってぇ！そのビリビリした拳はめちゃくちゃ痛え！」
「お頭、遊んでんならオレに変われよォ！」
「バカいうな！こんな実力者がこの辺にいることなんて滅多にねェんだ、変わらねえからな！」
そういうとシャンクスの表情が真剣な表情に変わる。
「悪い！少し舐めてた！こっからは真剣にやるから勘弁してくれ！」
「いいわよ別に。私が戦いたいわけじゃないもの。辞めてもいいぐらいだわ」
「そういうなって！じゃあ、いくぞ！」

なんてことがあったわけだ。
ちなみに、現在のシャンクスには勝ち越した。
まだ現在は仲間集めに奔走している状況らしく、ロジャー後の新世界にはまだ足を伸ばしてはいないそうだ。
どこまでの本気で戦ってくれたのか不明であるが、まだ見聞色らしきものが使えるくらいで武装色には至っていないとのこと。
ガープお墨付きであることを話すと、嫌な顔をされた。
それと、強ければ勧誘したいと話していたために勧誘を断る懸念を抱いていたのだが勧誘はされなかった。
自身より強い奴の私が乗ったら面目が立たなくなってしまうことが嫌だと言っていた。

「おもしれェ奴だとは思っていたが、ミンクとのハーフなんて聞いたこともない」
「な。ベックマン面白かっただろ！空飛んできた時にピンときたんだよ！」
「お頭はもう少し考えてから動いてくれ。こいつが面倒な奴だったら、最悪、ここで旅が終わっていた可能性だってあるんだぞ！」
とベックマンに調子に乗ったシャンクスは怒られていた。
あとは酒を酌み交わし、酒を飲んだベルメールがルウと騒いでいたのも印象的だ。

「あたしのフェンは、あんたらの船長になんてあげないよ！」
「誰があんな女の魅力もねえ、ちんちくりん欲しがるかよォ！」
「それならいいわ！でもフェンは魅力が満載よ！医術は詳しいし、料理はできるし、なんたって可愛いのよ！訂正しなさい！」
あの、私の魅力はどうだっていいから辞めてくれないかな
「うぁっ!?お前、医者までできんのかよ！やっぱりお頭、こいつ優秀だ。船に乗っけるか!?」
もう大騒ぎだった。

それにしても、そんなに魅力のない体だろうか。
胸はないけど、程よく柔らかい体やちょうどいい身長もいいと思うのだが

「ほら！あんたがそんな事言うから、見てフェンが落ち込んじゃったじゃない！」
その後ろから聞こえるのは、ガハハと大爆笑する陽気な海賊たちの声。
「今度、あったらまたヤロウぜ！今度はお前に負けねえ！」
「勘弁してよ。必要だったから鍛えたけど、それ以上でも以下でもないのよ。そこまで戦うのも好きじゃないし」
「おい！勝ち逃げは許さねえぞ、卑怯だな！」
「誰が卑怯よ！じゃあ、２度と会わないようにしてやるわ！」
「ひねくれのちんちくりん！ガキ！ちびっ子！」
「半分以上身長じゃないのよ！あんたなんて赤髪じゃない！年中仮装大会か何かかしら！」
お互いに、酒を飲んでいることもあり回らない頭をフル稼働だ。
べーっとして、舌を出し変顔で煽ってくる顔に腹が立ち、毛を逆立てながら威嚇する。
「「「ガキか、お前ら!!!!!」」」
たんまりの酒とベックマンよりタバコをもらい、自身の船に戻ったのだった。

村1日目

ココヤシ村での生活をここから始めていく訳なのだが。
現代日本での田舎生活を思い描いていただければ、想像通りの生活だろう。
到着当初は、まずは駐在でノジコたちを預かっていただいているゲンゾウことゲンさんに会いに行った。
「ゲンさーん！帰ったわよ！」
「やっと到着したか！ナミ、ノジコ！ベルメールが帰ってきたぞ！」
そう言って、家から出てきたのはコワモテの男性だった。
また駐在帽のつばの上からは、風車が付いている。
「ゲンさん！どうしたのそれ、・・・っはっはっは!!ねぇ、ゲンさんどうしたのよ、それ!!」
「笑うな!!しょうがないだろう！こうでもしないと、ナミが私の顔を見るだけで泣くんだから！」
ぃヒッヒ、腹が捩れるなど腹を抑えながらベルメールが地面を叩き、爆笑していた。
「ベルメールさんおかえり！」
そう言って出てきたのは、小さく特徴的な青髪の子だった。
これがノジコか。小さいのに、目元もぱっちりとしていて、将来の美人の面影が幼少期でも出ている。
またその手には、ナミらしき赤ん坊も抱えられていた。
ナミは短い手足をバタバタとばたつかせながら、ばうとか、ぅうーとか声を上げながら手をベルメールの方へと伸ばしていた。
「ただいま！ノジコ、ナミ！ゲンさんの言うこと聞いていい子で待ってた？」
「うん！今日から、ずっと一緒にいてもいいの？」
「ごめんね。寂しい思いさせたね。今日から一緒に暮らすんだ、ずっと一緒だよ」
ゲンさんの風車を見ると、現在もまだ吹き出しそうにしながらノジコを抱き上げていた。

「それでベルメールよ。こちらのお嬢さんはどなたかな」
「ゲンさんにあったことないっけ。今まで海軍でお世話になっててて、ナミとノジコの世話を手伝ってもらうフェンっていうの」
「そうかそうか！この街の駐在をしているゲンゾウと申します。この不良娘が世話になったようで。ご迷惑をかけしておりませんでしょうか。」

ゲンさん、絶賛かけられております。
ここにくるときもいきなり言われて、連れてこられました!!
ゲンさんの表情もベルメールの親のように、非常に柔らかい表情で本気で思っていることが窺われる中で、そんなことを言えるわけもなく
「こちらこそ、ベルの元気さには日々救われております。」
「そうでしたか！不良娘でも、元気はいっぱいですからな。それが救いになっているのであれば私も嬉しく思います」
「じゃあ、ゲンさん！あたしはナミとノジコ連れて家に帰ってるから、フェンの街の案内お願いしてもいい？」
「任せておきなさい！この頃は、街の平和で暇をしていたところだ。フェンさんもそれでいいかい？」
「はい、お願いします！」
こうして、ゲンさんの初会合も終わりそのまま街の案内をしてもらうこととなった。

街の状況を見る限りは、村々の人の顔は明るく、日々の生活を楽しみながら家族で暮らしている状況が見てとれた。
街に医者がいるワンピースでの世界では、珍しいかと思われるものの、しっかりと医者もおり、また近くのゴサの町との交易もしっかりと行っているとのこと。
農作物が主に特産とのことも話していた。
村での医者もしっかりとあるため、医者として動くことは基本はなさそうだ。

生活に必要な食品を取り扱っている八百屋や、娯楽の本まで取り扱っている状況もあることから村にしては非常に充実していると言えるだろう。
ただ、あくまで村としての機能で考えた時である。
今後の状況を考えたときに不安の残る状況もしばしばだ。
原作でナミとノジコを育てるとなった時に、ベルメール個人では家計が逼迫している状況の記載が見られる風景がいくつか存在する。
みかん料理がしばらく続く表記や、本の代金を払う際のやり取り。
また、ナミの服がお下がりばかりになってしまうこと。

ベルメールが海軍での仕事でいくら貯金しているかは、不明の部分も大きいし、私がいると言っても生活基盤や食糧問題は急務であるといえる。
一応は、私個人としても貯金はある程度してあるから、それを使ってみかん以外の食料を確保しておく必要があるだろう。
「ゲンゾウさん、村で作っているのは野菜とか果物がほとんど？」
「そうですな！農作物が主だったもので、肉や魚といったものは近くの村とのやり取りで確保している状況ですな」
考えれば、現在の状況とあればアーロンパークの建設前だし、放置されている土地があるのではないだろうか。
「この村で土地が欲しいときは、どちらで申請すればいいとかある？」
「いえいえ、別に申請などは必要はないですよ。開拓した土地などは、そのもので自由に使っております。揉めるようとあれば、このゲンゾウが仲裁に入りますので、ご安心くだされ！」
言質はとった。村々の土地の状況なんて、戸籍という走り書きはあるものの、近所付き合いと記憶で管理している内容で十分らしい。
これで、自身の住む家の建設と今後の計画も立てることができる。

もちろんナミとノジコを育てるのには協力するつもりではあるが、薬の製造もあるため、家は別にしたいこと（薬品やビーカーなどのガラス製品が危ない）と別にすることで実行したい計画があったのだ。

「これで大体案内は済みましたな！ベルメールは町外れに家がありまして、奥に見えます煙突から煙が上がっている家は見えますかな？」
ゲンさんに言われて、見てみると確かに村の奥の方から煙が上がっている家が見える。
「そろそろお昼の頃合いもありますので、ベルメールがご飯でも作っているのでしょう。あそこがベルメールの暮らしていた家です。案内しましょう。」
「あ、いえ！街の付近も探索しておきたいですし、ベルメールの家の位置は分かりましたのでここまでで大丈夫です。ありがとうございます！」
「そうでしたか！これは気づかずに失礼。では、私も家に戻りますため何かあったら声をかけてください！では！」
ゲンさんに案内してもらった街の状況も理解したため、早速、村より外の状況と空き地の捜索に入っていく。

今後の計画はまず家を建設したい。
しばらくは必要なものは船に乗せたまま、ベルメールの家にお世話になってもいいとはいっていたのだが、薬関係の道具やスーロン化薬の製造も定期的に行っておきたいため、さっさと作っておきたいところではある。
また、今回食料問題の解決で目をつけていたのが酪農である。
専門的な知識があるわけではもちろんないが、村と島ということもあり草はその辺に生えているのだ。

乳製品は健康にもいいし、利用方法や活用方法も幅広く使える。
肉や魚は交易での入手といっていたことから、近くで牛か付随する動物の育成があるのだろうと踏んでいるところも大きい。
広大な土地と、草があればあとは牛を育てれば良いのだ。
そして可能であれば夫婦で牛を買い、徐々に増やせれば尚の事ありがたい。
広い土地で村人でも足を伸ばせば行き来できるぐらいの距離にあ

る立地がいい。

街より離れ、少し歩くと建物も徐々に無くなり、少し舗装された獣道と、林に入っていく。

さらに歩き続けることものの数分で、建物も振り返れば見えるがずいぶん遠くに見えるくらいまで進んでいた。

林をそのまま進んでいくと、木は生えているものの、見晴らしのいい草原に出た。

距離として街から徒歩十数分といったところだろうか。

またベルメールの家も町外れであり、こちらの草原から数分も歩けば着くだろう。

広さも数頭の牛を放牧する程度であれば、できそうな広さもある。

まずは第一歩の土地決めはここにしよう。

木材の伐採はできるものの、建築はできないため村の大工さんへと依頼することとする。

日が暮れる前に、周囲の木々の伐採を済ませてしまうべくゲンさんへと話をつけに戻る。

「ゲンゾウさん、いらっしゃいますか？」

「先ほどぶりですな！如何されましたか？」

「ここを抜けて、数分のところにある見晴らしのいい草原があったのですが、そこに家を建てたいと考えておりまして。問題がないかの相談と大工への依頼を、相談したくて」

「左様でしたか。あそこは誰も使っていないため、大丈夫ですぞ！大工に関しては、私から声をかけて参りましょう。すぐに連れてきますから、少し待っててくださいますか」

大工を呼んできてくれるそうで、家から出ていった。

ベルメールには夜までには一度顔を出すといってあるため、家の相談とその後に、牛の話をゲンさんとする頃にはいい時間だろう。

「すぐそこにおりましたので、連れてきましたぞ！」

「ありがとうございます！」

街の大工さんを連れ、草原と家の設計と建設予定地の場所に移動する。
モチーフは、平家のログハウスのようなイメージで伝えていく。
また必要な木材はこの辺の木を伐採して、大工に渡すようにしたいといったら、不思議そうな顔をしていたが、ひとまず２０本前後の木々が必要という内容と、足りなかったらまた教えると説明があった。
後で切って持っていくとしよう。
工期はログハウスということや現在取り掛かっている家もないそうで、１月もあれば完成するとのことだ。
内容は追々詰めていこう。
またゲンさんに牛の輸入はできるかと聞いたところ、交易している町や村々で聞いてみていただけるとの返事もいただいており順調といえる滑り出しだ。

その後、さっさと伐採してしまおうと張り切って木々を倒し、伐採した木をその日のうちに大工さん宛に持っていったら、少し怯えた目で見られたのは内緒である。

「フェン遅い!!待ちくたびれたわ!」
「ごめん。色々準備してたら、遅くなっちゃった」
日が暮れた頃に、ベルメールの家にお邪魔するとノジコとナミ、ベルメールが迎えてくれた。
ちなみに、ノジコやベルメールには自身の体の状況はすでに伝えてある。
ノジコはミンクと言われてもピンとはきていないようだったが、二股の尻尾や耳は興味をそそられるらしく、興味津々でありナミに関しては私の尻尾はおもちゃ代わりである。
椅子に座りながら、耳に興味津々なノジコを背に、ナミは尻尾であ

しらいながらベルメールに家の位置を決めてきたことだとか今後の報告の話をする。
「そうね、乳製品があれば助かるわ！」
ナミちゃん、あの尻尾噛むのやめてくれないかな。
待ってカジカジしないの！
尻尾を取り上げると泣くので、手が届くか届かないかぐらいで遊んであげる。
「あたしは、この辺みかん畑にするつもりだからみかんと乳製品はこれでなんとかなりそうだわ！海軍での貯金はあるけど、大きくなるまでって考えたら不安だったのよ！さすがフェン！」
大好きといって抱きついてくるベルメールに続いて、真似するようにノジコやナミまでくっついてくる。
原作のナミの人懐っこさと、度胸はベルメール譲りなんだろう。
「抱きつかなくてもいいから、暑苦しいでしょ！」
「フェンさん、あったかい！耳もふかふかで身持ちいいね！」
「そうよ、ノジコ！フェンは抱き心地いいんだから！」
「こら！ベルも調子乗らないの！もうベルもお母さんになるんでしょ、ちゃんとしなさい！」

ぶー垂れるベルメールは放っておき、背にくっついているノジコもベルメールへと渡す。
「夕飯作っちゃうから、ノジコとナミ連れてゲンゾウさんからナミの離乳食もらってきてほしいんだけど。ベルいけそう？」
「だってさ！ノジコ、お母さんと一緒にゲンさんとこ行ってくれるかい？」
「うん！いく！ナミもいこ！」
ナミは元気そうにまだ尻尾と遊んでいるが、ノジコが声をかけると嬉しそうにノジコの元へと向かっていった。
そんなナミをベルメールが抱き上げ、ノジコと手を繋いで
「じゃあいってくるよ。何か必要なものはない？」
「大丈夫！気をつけていってきてね。」

ベルメールを見送り、ここからココヤシ村での生活が始まる。

村生活2日目

村での生活を送り始めてから、しばらくは生活基盤を整えるために時間を割いていた。

ココヤシ村での拠点作りは比較的順調に進み、お家自体はログハウスを作っていただき、部屋の間取りも2ＬＤＫと一人暮らしでの生活には十分な間取りも確保していただき、薬品関係を取り扱う部屋のみ、錠をかけてもらって子どもが侵入できない作りにしてもらった。

また酪農の話も進んでおり、交易を行なっている村（どこの村なのかは聞かなかった）より、交配出来る様にとオスとメスを各2頭ずつ計4匹の牛を購入した。

こちらでの牛も、特殊な形状や姿の牛のみが一般的かと思いきや、普通の白と黒での乳牛も存在しているようで、送られてきた牛も馴染み深い牛だった。

届いた時には、前世の思い出が蘇るようで少しうるうるしてしまったほどだ。

その時には、遊びに来ていたベルメールやノジコには心配されてしまったが。

放牧する土地も、しっかりと手刀で切った木材を力技で地面に突き刺すことを複数回と、大工さんより、少々丈夫なロープをいただいてきて、杭と杭の間を囲うようにロープを巻き付けた簡易的な柵も完成しており、牛乳や乳製品の目処もたった。

また村での生活では、恐れていた天竜人なんて見たこともないことや、別に尻尾や耳が生えていたぐらいで気にする奴はいないとベルメールに後押しされたこともあり、帽子も外し、ズボンには穴を開け、窮屈なく開放的な暮らしだった。

後で聞いた話だが、すでにノジコが私の耳が可愛いだの、しっぽがもふもふだの村で言い回っていたことを聞いて、隠して生活をしている状況を村の人たちが不思議そうに見ていたのは、記憶に新しい。

また乳製品の加工も順調に行えており、火をつけること自体はエレ

クトロを使って非常に簡単に行えるため、鍋を使って塩とレモン汁からカッテージチーズを作り出すことにも成功していた。
バターは生クリームの目処が経っていないため、ひとまず後回しにしている。
あとは村でジャガイモの栽培を行なっていたのは、嬉しい誤算であった。
もちろん種芋をいただく交渉をし、家の裏で軽くジャガイモの栽培も進めている。

ここまでの状況を整えるため、半年と時間をかけゆっくりと作業と状況を整えるように進めた。
ナミも1歳での半年というものは大きく、ハイハイで移動をしていたものがフラフラとはするものの立って歩くぐらいまでしっかりと成長しており、子どもの成長は早いことに関心する。
ノジコなんかは、1人でたまに遊びに来て、ベルメールに怒られる風景もよく見るようになった。

家の中では、流石に薬品関係の部屋に入れるわけにはいかないため、要注意である。

カッテージチーズは村での評判も良く、村の中ではこんな簡単にチーズが作れることもあり
「私も牛飼ってみようか。」
需要もちらほらといるようで、放牧の状況を見にきたり、子どもには牛は目新しく面白いらしく、牛の見学に来る子どももいた。

また、そこそこの頻度で村に来る海賊もいるため、海賊の討伐と討伐報酬で海賊の金品を巻き上げている風景を目撃されてからは、村の子供に「鬼」としばらく怖がられてしまったこともある。
今度からはバレないように気をつけなければ。

「うちよりよっぽど、フェンの家の方が今じゃしっかりしてるもんね。うちも立て直そうかしら。」
「ベルの家は私は好きだけどね！それに、私は薬品も扱わなきゃならないから広めに作ってもらっただけよ。」

暇な時間は、こうやってベルメールが家にノジコとナミを連れて遊びに来る。
ノジコからはフェンさんと呼ばれていたのだが、フェンさんではしっくりとこないところもあり、フェンと呼んで構わないことも伝えてある。
「フェン！今日もチーズ作る？私も作っていい？」
ノジコは、私がチーズを作っていたところを目撃してからはすっかりチーズの虜であり、自分でも作ると言って何度か一緒に作っている。
「じゃあ、一緒に作ろっか。ノジコ、牛さんの乳搾り一緒にいく？」
「うん、いく！牛さんすき！」
大人になると、あんなに大人しく余裕のある美人になるのに子どものうちは元気いっぱいである。
「ベルもいく？」
「今日はパスするわ。ナミの夜泣きもあって、昨日寝れなかったの。ナミも連れてってあげて。私は少し寝るから、ベット借りるわね」
ベルメールはお疲れの様子である。
ナミも歩けるようになったこともあり、元気いっぱいの子ども相手は体力勝負のところも多い。
いまだに私の尻尾を捕まえて、離さないのとガジガジと人の尻尾を噛むのはやめてほしい。

ナミとノジコの相手や乳を絞りながら、現状の状況を考えていく。
最近になってニュース・クーで新聞を取り始め、詳しい情勢の確認が取れるようになってきた。
そこで見たのは、世界貴族の動向である。

新聞の見出しで出ていたのはこうだ。
【絶世の美女!!世界貴族に購入される!!?】
内容は以下の通り。
シャボンディ諸島で開かれている奴隷のマーケットで、近年稀に見る絶世の美女が売りに出されるという情報が広まっていたこともあり、今回の奴隷市は非常に賑わうことが予想されていた。
また、この情報を聞きつけ楽しみや期待に胸を膨らませていた方も多かったようだ。
今回の目玉はそれだけではなく美女には姉妹も2人おり、セットで競売に出されることもあり多くのものが、我が物にと押し寄せた。
ただ、唯一の悲運はこの情報はシャボンディ全土だけでは留まらず、たちまち世界貴族の住まうマリージョアまで情報が届いてしまったことにある。
聞きつけた世界貴族なども、シャボンディ諸島に押しかけ、我先にと集まってきていたものは世界貴族に目をつけられてはたまらないと避難し、美女を目に収めることも叶わず、世界政府へ買われてしまった。
私個人としても、絶対目におさめておきたいと考えていたこともあり非常に遺恨に思う。
シャボンディ諸島でも、今後の情報の漏洩に気をつけたいと声明が発表されていることもあり、今後に期待だ。

という記事である。
物語から察すると、間違いなくハンコックの内容であろう。
ハンコックは好きなキャラクターであり、好ましいこともあったため、すぐに近くの海軍支部へと顔を出し、でんでん虫をガープへと繋いでもらうようにと、支部に勤めているかつての教え子に頼んだ。
「なんだ、フェンか!久しぶりだな!元気にしてたか!」
「そうね。今のところは私は元気よ。」
ガープの船のでんでん虫には、比較的にすぐ繋がり、最初に出たのはボガードさんだったがガープへと取り次いでくれた。

「それでなんだ。オレの船に乗る気になったか?・それとも、船に乗ってる教え子が心配になったか?」
後ろから「フェンさん!・僕は元気ですよ!・フェンさーん!」と元気そうな声が聞こえるため、元気なのだろうと伺えるがすぐに「うるさい!」と拳骨を食らっている音が入る。
ご愁傷様である。
「そんなわけないじゃない。船に乗るなんて微塵も思ってないのわかっているでしょ?」
「まあ、そうだろうな。で、なんの用だ?」
「今日の新聞はあるかしら?」
「新聞か、ちょっと待っとれ!・ボガード、今日の新聞あるか!?」
「はい、持っていきます」とボガードさんの声が聞こえ、持ってくる足音も聞こえる。
「で、新聞なんぞ見てなんのようだ。」
「奴隷市の記事が載っているところがあると思うのだけれど、その奴隷なんとかならないかしら。」
ふんっ!・といった鼻を鳴らす音が聞こえ、
「なんとかなるわけがないだろう。オレだって心底不快だが、オレはこれでも海軍の人間だぞ。」
心底不快そうな声色での返答が返ってきた。
そうだよなと思う。原作でも、仏のセンゴク（元帥）でも従うしかなかったのだから、立場上はそうするしかないだろう。
「下手な行動はやめておいた方がいいぞ。世界貴族というのはタチが悪い上に、下手な行動取るとオレも敵にならないといけなくなることもある。オレはお前は気に入っているし、殺したいとは思わん。」
自分が行ってマリージョアから奴隷奪還や、フィッシャータイガーへの支援などを行なった場合、確かに逃げ切れる程度の実力はあるだろうと思う。
大将が出てこない限り。
流石に黄猿の速さぐらいの奴らが出てきた場合や、ガープやセンゴク相手に逃げ切れる状況でもないため、こちらも現実的ではない。

例外や出てこれた人間がいないか、尋ねると意外な返答が返ってきた。
「帰ってきたものも存在している。世界貴族と言っても一枚岩ではないからな。ほとんどおらんが、まだ話が通じる貴族もいることはいてな、そいつの手から人として帰されたものを数人知っているぐらいだ。」
「今回のシャボンディ諸島訪問したのは、違う人なのね。」
「そうだな、ゴミの方の世界貴族だった。」
これでは、私が動くこと以外の解決方法は見えない。
ただ、自分で動くには一緒に戦ってくれる仲間もいないし、ツテもない。
グランドラインでの行動も限られることから現実的ではないことが多い。
「なんとかならないものかしら。あなたも世界貴族の思い通りに動くのは嫌でしょ？」
「嫌かどうかで話したら嫌だが。おい、ボガード。なんかいい案思い浮かぶか？」
「フェンさん！中将を唆さないでいただいてよろしいでしょうか！中将も、そんな方法がないことはご存知でしょう！どれだけ危険な話に突っ込む気ですか！」
そういう解答になるよなあ。
下手したら、てかどう考えても死ぬしかなくなるしなぁ。
「そういうことだ。一応、オレの知り合いとかまだ話せるやつに話を通しては見てやる。思い通りにいくのも癪だからな。だから変な気は起こすな。んで、支部からでんでん虫1匹持っていけ。オレが言ってたといえば貰えるだろ。」
「もう中将！無理ばっか言うんですから！」
「ボガード！お前も世界貴族は嫌いだろうが！オレはあんな奴らがニコニコするくらいなら、知り合いが笑っている方が十二分に嬉しいわ！それじゃあな、後で連絡するからフェンは期待せずに待っとけ」
ボガードの深いため息と共に連絡は切れた。

さて、できることとして連絡入れてみたものの、あとはガープからの連絡を待つのが最善であろう。
でんでん虫を支部からもらって、支部からココヤシ村へと戻る。
もらう際に「これで、先生と連絡が取れますから今度休暇にでも鍛えてください！ベルメール元大佐もいらっしゃるのであれば、是非ともお邪魔してもよろしいでしょうか！」と声をかけられたため、ＯＫをしておいた。
海軍との伝は色々と便利なことも多いことと、支部内での戦闘力はそこまで重視はしておらず、事務処理の能力が高いものばかり重宝されるらしい。流石、汚職のイーストブルーである。
後で、ガープに推薦でもしておいてやろう。

航海もできない、１人で旅は心細い。
アーロンは討伐したい。
ルフィのシェルズタウンでの捕獲は避ける。
なんだかんだ、助けられるものは助けたいとは考えてはいたものの、世界貴族はめんどくさいし、もうそろそろ記憶だけでは追いつかないことも出てきている。
いつかはグランドラインに入って、仲間と冒険もいいなぁとか夢は見るものの子育てもあるし、ぼちぼち進めていくことを考えよう。

朗報です!!

一旦、ココヤシ村へと戻りガープからの連絡を待ちながら、ココヤシ村での生活を充実させるための方法を模索していた。

でんでん虫と言うものは方々に連絡が取れたり、いろいろなところにいる海軍の各所の元教え子たちに頼み事ができたり、伝でヨーグルトの入手を頼んだりと、便利なものをもらったと当初は非常に喜んだものだった。

ヨーグルトは一度入手してしまえば、作ったヨーグルトを使ってまたヨーグルトの作成ができるため、一度入手してしまえば牛乳がある限り作れる。そのため1度目の入手というハードルをクリアしてしまえば、

・健康にもよし。

・美味しい

といい事づくめだ。

早速作成したヨーグルトを、ナミやノジコに振る舞ったところ大好評で、またベルメールのミカンとの相性も良いと言うこともあり、町では評判の様子だった。

わざわざゴサの街（隣町）よりも買い求めに来るぐらいの評判になった。

またカッテージチーズに関しても評判ではあったものの、牛が二頭では供給量も少なく、これ以上の牛を増やす予定もないため牛を飼って、酪農をしようとしている村の夫婦に、やってみたらとオススメしておいた。

「本当に美味しいわね、このヨーグルト！あんたも器用よね。こんなのも出来ちゃうんだから。」

「私が食べたかったから作っただけよ。じゃなかったら、わざわざ教え子にまで頼んだりしないわ。」

「ノジコなんて、ヨーグルトにみかん入れて食べるのにハマっちゃって『ヨーグルト食べたい！』って毎回せがんで来るぐらいよ」

「そこまで好評なのは普通に嬉しいけど、牛もこれ以上増やす気もないし、程々にしないとすぐ無くなっちゃうんだから。大切に食べるようにしなよ？」

最近の村での食料問題は、大幅に改善に向かっている。

肉や魚系統の栄養素は、私とベルが海に赴き上がってくる小さめの海王類の討伐をすれば小さめといえども、村での食糧としては十分な供給量を確保できたり、また海面から少し強めにエレクトロすれば、それだけで浅瀬付近の魚が大量に取れたりとタンパク質も魚類や海王類から確保できるようになってきた。

食料問題がひとまず解決する頃には、すでにやらなくてはいけないことも減ってきており、田舎でのスローライフを送っていた。

ただ、でんでん虫を借りていることもあり、海軍より依頼なども舞い込むようになった。

臨時の武術講師の依頼だったり、近隣の海賊の討伐依頼だったり、さまざまな依頼だ。

道理ででんでん虫の譲渡に寛容だったわけである。

海軍での備品の持ち出しにもかかわらず、持ってってくださいと言わんばかりに渡してきたのだ。

おかげで別に名前を売りたいわけではないのに、海賊に関して体のいい抑止力に使われているようで腑に落ちない。

教え子のためと思えばいいが、ガープもここまで考えてでんでん虫を持っていけと言っていたのであれば、策士である。

腹立たしいクソジジイめ。

そんな生活を送りながら、ガープの連絡を待っていたわけだが、連絡は突然だった。

「はい、こちらフェンですがどなた様でしょうか。」

「おれだ、ガープだ！今時間はいいか？」

「待ってたわよ！で、何か進捗はあった!?」

待ちに待ったガープからの連絡であった。

正直に言うと期待はあまりしていなかった。
原作での政府からの世界貴族の不干渉具合から見ると、奴隷も黙認で世界貴族には逆らえませんといった状況のみの記載だったためだ。
正義の文字を背中に背負っているくせに、海賊だけの取締機関なのかと呆れたぐらいである。
「正直に言うぞ。あの3人のみの回収であれば可能だ。現在、マリージョアへと進路は取っているがまだ到着していないことと、海軍政府でもアマゾンリリーとの火種を起こしたくないとの意見も出ていてな。3人ともすぐに海軍での籍を発行して、到着前に回収に向かえばまだ間に合うだろうとの判断のもと、センゴクと動いている。」
「本当なの！まだ間に合うのね！」
「まだ、確定ではない。あとは交換条件も出ていてな。センゴクからの伝言だ。『ガープをここまでこき使える人材には、是非とも会っておきたい。連れて来い』とのことだ。」
大丈夫じゃないな、これは。
ハンコックを回収できるのは、好きなキャラだったこともあってありがたいし嬉しい。
あんな世界貴族とかいうキモい奴らに好きなキャラが虐待されるのは虫唾ものだ。
だが、ここでのセンゴク顔合わせは、ガープの手綱を握っていろとか、海軍に所属しろとかの対面な気がする故にあんまり乗り気にはなれないのが正直な感想である。
「私、言った通り海軍に所属なんてする気はないのだけれど。それでもってことで受け取ればいいのかしら」
「オレは知らん。センゴクが何を考えているかなんて考えてもわからんしな。と言うことで、後で迎えにいくからな。あとは回収できたらだが、とりあえずしばらくは3人とも身を隠しておいた方がいいだろうから、お前のところでしばらく面倒を見てやれ。」
センゴクとの初顔合わせはグランドラインか。
初めてのグランドラインは、クソジジイととか夢がねえなぁ。
初めては仲間ととが良かった。

しょうがないか。
「わかったわ。期間としてはどの程度で考えとけばいいの？生活もあるし、程々にしてくれるとありがたいのだけど。」
「1～2ヶ月もあれば十分だろうと思うぞ。まあ、成功していればってところだ。後でまた追って連絡する。」
報告をすると、ガープは電話を切っていった。
こうやって考えると、わざわざ世界貴族に目をつけられてまで助けたかった人材が海軍側にはいなかったのだろうと思われる。
それか、ガープという英雄が動いたから今回の結果に行き着いたのか。
とりあえずは、助けることができる可能性があり何よりだが。
この点がこの後の物語にどの程度影響ができるのかも不安なところである。

目下での話は、センゴクとの会合をどう乗り切るかだなぁ。
別に海賊になる気もないけれど、海軍になる気もない。

ナミが海賊になって楽しそうだったから、海賊でも海軍よりは正直いいかもと思わなくもない。
世界貴族の護衛なんて嫌だし、鼻水垂れてるのキモいし。

ベルメールに報告すると
「世界貴族ね。イーストブルーに一回来たことがあった時に遠目で護衛船に乗ってたことあるけど、見るに堪えなかったわ。町の子供も蹴られるとか、町の女の子を攫ったりとか。」
「その時以上に、一番海軍に入って虚しく思ったことないもの。」
目の前で何もしていない、ただ跪いている家族を殺す、何もしていない子どもで銃の実験と行って怪我をさせる。
嫌がっている娘に手錠をかけ、引き摺り回す。
そんな風景が日常茶飯事だったそうだ。
「何のために海軍に入ったのかって。先輩と一緒にいて、先輩にはが

いじめにされていなかったらあたしも手を出して殺されていたでしょうね。だから、せめて手の届く範囲の子どもだけでも、幸せにしたいって思ったの」
「そう思って、海軍にいることも何のために頑張ってきたのかもわからなくなった時に、あの子たちに出会ったの。子どもでも、しっかりと妹を抱いて強い目で私に訴えかけてきたわ。生きるって、必死に生きたいって。」
「この子たちは助けなきゃって。だから、世界貴族がいたから今のあたしはいるから、ある意味人生を変えてもらったんだけど。」
「だから、フェンも助けてあげたんでしょ？自信もって、センゴク大将のところに行ってこい！」

と言われた。
世界貴族は、こんな辺境のイーストブルーでも嫌われているらしい。
ベルメールに話したのは、てっきり「フェンが行ったら、どうやってヨーグルト作ればいいのさ。行かないで！」とか止められるかと思ったのだが、背中を押される結果となった。

さて、状況を乗り切る方法を考えよう。
最悪、一回海軍に入って辞めるでもいい。
考えてもみれば、世界貴族を守らなきゃならないのと、上下関係以外にデメリットはないのだ。
時間は今が原作開始から１７年前ということもあり、しばらくの時間的猶予はある。
アーロンがイーストブルーに流れ着くまでは９年。
モーガンが来るまでは１２年。
原作が動くまでは１７年である。
時間的猶予は正直まだまだある。

ただ、海軍に入ることでのメリットがあまり無いということもあ

る。
ある程度の実力を持ったものは多くいるため実力を磨く環境はできるだろう。
ただ自身の戦闘技術やスキルと、海軍の秘伝の六式は相性が悪いのだ。

現在の私自身の戦闘スタイルは、ゲームでいうＡＧＩとＤＥＸに特化した紙装甲回避型と言えばわかりやすいだろうか。
見聞色もどきで相手の行動の裏を読み、持ち前の身体能力のスピードで相手を翻弄し、人体的急所（頭部や金的、関節）などを中心にクリティカルを狙うスタイルでの戦闘方法である。
また武装色がいまだに使えず（才能がないのでは？）、硬化で肉体を守ることができないため、自ずとタフさと言う点は捨てる必要があり、もはや回避特化である。
攻撃は、内部に衝撃を与えるべくの発勁であったり、ワンインチパンチなどを鍛え、できる限り頭部を狙い脳震盪を狙う悪質なスタイル。
できる限り、気づかれる前に攻撃を仕掛けるべく磨いた足音を極限まで減らすためのすり足と縮地。
真正面の戦闘なんてもってのほか、できるだけ気づかれる前に何とかしたいとか、真正面で戦いたくないスタイルである。
武装色なんて、もう無理だと諦めたこともあり、全身武装色なんて脳筋な相手じゃない限りは覆っていないところを狙えば何とかなるのではないかとも考えている。
あとは最後の頼みの綱のエレクトロとスーロン。

こんなスタイルの私が、六式なんてめちゃめちゃ音がする技術なんていらないのだ。
浮くスキルはミンクで持っているのにわざわざ高速で地面けって移動する必要はないし、鉄塊はスタイルに合わない。
欲しいとしたら嵐脚と指銃くらいである。

それに門外不出の技術であった気もするので、そんなに簡単に教えてくれるとも言い難い。
考えれば考えるほど、海軍に入ってもなぁとなる。

考えるだけ無駄か。
センゴクと会合してから考えよう。
だから、せめてガープよ大人しくしておいてくれ。
あなたのお目付役は少々私には荷が重いのだから。

呼び出し

海軍への旅路は長い

しっかりと家の管理や牛たちの面倒をゲンさんや遊びに来てくれる村の村の人たちにお願いし、ベルメールやノジコに挨拶を終えて、現在はガープの船の上からお送りしている。

結局、ノジコにはめちゃくちゃ泣かれた。

お姉ちゃんだって行きたくない気持ちは山々なのだが、「フェン、いつ帰ってくる？すぐ帰ってくる？」と聞いてくるノジコは、不謹慎ではあるとはわかっていたが、非常に可愛かった。

ごめんなぁ！お姉ちゃんだって仏頂面の髭ジジイと、拳で語るジジイよりノジコと一緒にいたいの！

でも、今回は迷惑かけちゃったから行かなきゃいけなくて！

「フェン！さっさと行きな！ノジコにはアタシから言っておくから！1～2ヶ月ぐらいだっけ？」

「うん。初めてのグランドラインだから、何とも言えないけど。私がいなくて大丈夫？ちゃんと掃除もご飯も作るんだよ？」

「アタシはあんたの子供じゃないわよ!!一人暮らしもしていたし、ゲンさんも村のみんなもいるし、安心して行っておいで！」

ベルメール個人としても、あれからも定期的に私との組手を続けており、現在のイーストブルーで動いている海賊ぐらいでは負けないぐらいには強くなっていると考えている。

また、近くの支部の海軍の子にはコノミ諸島での動向には気を配ってもらうように、お願いしていることもあるため安心はしても大丈夫だとは思ってるもののアーロンの時もあるため、もしもを考えてしまうと怖くもあった。

「何かあったら電伝虫での連絡頂戴ね！どんな状況でも引き返してくる！」

「何がそんなに心配なのよ！全く、仮にも元大佐よ。そこらの海賊に負けるつもりはないわ。もういいから早く行って、さっさと帰ってこ

い！」
　まだ心配そうな顔をしている私の背中を男らしくバンっ!!と叩くと、ベルはノジコやナミを抱いて家に戻っていった。
「準備は済んだか。用意ができたなら出港するぞ。さっさと乗り込め！」
「わかったわ！それじゃ、ボガードさんもしばらくの間よろしくね！」
「はっ！中将にも面倒を見るように仰せ使っておりますので、いつでもお声がけください。お荷物なんかは、後で部屋に持って行っておくので甲板に置いておいていただければ。」
　顔を合わせるのは、しばらくではあったが、定期的にでんでん虫でボガードさんの中将トーク（ほとんどが愚痴）とか、うちの教え子が知らないうちに本部勤務に配属されたこととか話していたこともあり、そこまで久しぶりな気持ちではないのだが。
　甲板に荷物をおいて、早速船の内部を案内してもらう。
　今回に限っては、私が客という扱いで呼ばれていることや女ということもあり、普段のガープの船ではなく大きめの客船に近い船をセンゴクが用意してくれたそうだ。
　そのため、通常はない客室がついており、その部屋を自由に使って構わないとのこと。
　見た限りは通常の海軍の常備している船よりは一回り大きいだろう。
「センゴク殿は何を考えているのかしらね。私なんて一回もあったことがないだけじゃなくて今回に関しては迷惑もかけているのに、この待遇でしょ？」
「私も多くは聞かされておりませんので、かの智将が何のためにフェンさんを呼び立てしているのか見当も付きません。中将は何か聞かされておりましたか？」
「いや、オレも詳しくは聞いとらん。」
　ガープに至っては見る限り、興味もなさそうである。
　欠伸しながら、ボリボリと煎餅を食っていた。
　私個人の功績なんて呼べるものは、海軍軍部で誇れることは何もし

ていないはずなのだ。
「センゴク殿に、私のこと何か話したりしたのかしら。」
「・・・・お、オレは何も知らんぞ。なぁ、ボガードよ。」
ボリボリと食っていた煎餅の咀嚼回数も一段と増え、目線もあらぬ方向へと向く。
さっきまでは出ていなかった汗まで掻いている始末だ。
めっちゃ嘘かよ。
「中将、顔に出過ぎです。経緯もわからないまま連れて行くなんて、流石にできませんよ。」
「・・・・オレは席を外す。」
「ダメよ?ガープさんもここにいてね?」
きいた話によると、この時の私の顔はにっこりと優しい笑みを浮かべていたのだが、背後からはただならぬオーラが出ており
「はっ!覇王色か!」「敵襲か!」「総員、敵襲に備えよ!」
などのやりとりがあったとか。

「この前の話を、中将だけではどうにも動けないところが多かったところもあってセンゴク大将に相談するべく本部に戻ってセンゴク大将に状況の説明をしたんです。その時は、状況説明の付き添いに、私もその場におりました。そうしたら
『ガープよ。お前が昔から世界貴族を嫌悪していることは知っている。それでも、現在まで自分と関係がない奴隷に関して見て見ぬふりをすると話し合ったはずだ。それを今になって、どうした。今度の奴隷は知り合いか何かか』
と問いかけがありまして。中将はこの通り嘘がつけないので
『知り合いに頼まれたんだ。この奴隷を助けたいとな。それでセンゴク、お前に知恵を借りたい』
『今になって、そこまで動くということが政府にどういった弊害が出るのか、わからぬほどお前も馬鹿ではあるまい。コング元帥からも説教で済めばいいが、今回動くとなるとそれだけで済むとは思えん』
『そうさな。動き方によっては、世界貴族や五老星と亀裂を産むこと

となりかねん。それが海軍の権威を下げることにもつながる。ただ、オレだけではないのも、センゴク。お前ならわかっているだろう』

中将の返答に、センゴク大将は眉間に皺を寄せながら

『確かに現在、我々が護衛してその中で世界貴族がわがままや勝手な行動を起こしていることが、海軍の品位や信頼を落としていることは反論のしようもない。権威などよりも民間の信頼で動いている以上、その点については俺も頭を悩ませていたのはそうだ』

『ただ、ここで助けることで政府から俺も目をつけられることになる。』

『ガープお前も俺が壁になってやることで、多少の自由な行動も許せていたが。今後は政府に借りができる故に、多少の行動制限がかかるかもしれん。それでも助けたいと考えるか』

その眼差しは、智将と呼ばれる評判に相応しい、真剣な眼差しでした。

『わかっておる。ただたまに楔を打ち込んでおかんと世界貴族の動向も最近は目に余る。それに世界貴族なんて嫌いだし。今回の奴隷なんて、子供だぞ、センゴクよ。子供の将来も守れんで、正義を掲げるなんてオレにはできんよ。』

『そうか。最後に聞こう。お前にそこまで行動をさせたのはどこのどいつだ。』

『フェンといってな！最近、イーストブルーでの海軍が強くなってきている噂を聞いたことがないか？』

センゴク大将は、何故か途端に楽しそうな顔をする中将の表情に怪訝な顔をしながら

『「大の大人を千切ってはなげ、掴んでは振り回し、それで以って、恐怖に怯える顔を眺め悦に入る悪魔がいる」とか、何かのファンクラブなるものがあるとは噂では聞いていたが、それのことか？うちに最近配属された海兵もなんか話していたが。』

『それよ！オレも気になって見に行ったんだがな！面白いやつでなぁ！』

中将は少しでも面白いって思ったやつには非常に楽しそうに話すんです。
あっ、いらないって。そうですか。
『ガープよ。最近、イーストブルーの仕事なんてお前に渡してはおらんかったと記憶しているが』
『あっ、やべっ『お前、また仕事サボって遊び呆けていたのか、この馬鹿もん!!!!!』
というやりとりもあったんですが、ここは置いておいて
『で、続きを聞かせろ。』
『実力もイーストブルーでの実力なんかじゃなくてよ。まさかイーストブルーで相手は武装色使ってないのに、オレは使わされるし攻撃はちゃんといてぇしよ。聞いて見たら武装色は使えない、相手の力を利用したり、覆ってないと所を狙っているだけだって言いやがる』
『まぁ、負けはせんかったがな。それにな、それだけじゃねえ。鍛えているシェルズタウンの海軍が軒並み鍛えられていてな、最近で骨のある新兵を見つけたと思ったら、大体シェルズタウンの勤務経歴ありだ。面白いだろう!』
『それは面白いな。よし、今回の話は付き合ってやる。品位と民意の回復のためだ。ただ今後のお前の行動は、しばらくの間は制限付きだ覚えておけ。それと、そいつを俺の元に一回連れてこい。それで手を打ってやる』
この流れで、私は「フェンさんに確認したほうがいいのでは?」とお声がけしたんですよ?
中将は聞いてくださらなかったので
『今度連れてくればいいんだな。わかった!』
と、すぐに返答してしまわれたので今の状況です。」

しょうがないかぁ。
これでハンコックと、姉妹が助かる可能性があるならそっちの方がいい。
「ガープさん。私が海軍に所属を考えていないことは伝えてあるんで

しょうね。」
伝えた時には、あからさまにギクッと肩を揺らしていたのが目に入った。
伝えていないんでしょうね、これ。
はぁと深いため息もでるよなぁ。
別に海軍に所属したくないんだもの。
スローライフ的な船旅とか、グランドラインでの原作聖地観光とか、ゆったりと暮らしたいし、死んでほしくないキャラや好きなキャラは助けたいと思うけど、それ以外に目的もない。
海軍に入ったらスローライフじゃなくなるでしょうが。
本格的に断りの文句を考えていかなくてはならないだろう。

「大丈夫ですよ。仁義を重んじてくれる大将で智将ですから。話もしっかりと聞いていただける方ですので。」
わかっていない、原作のセンゴクのままだったら腹黒成分込みである。
確かに正義漢なところもあるのだろう、ただ外堀から埋めてくるような、そんな腹黒さが絶対同居しているのだ。
こんだけ無理を言って、叶えてくれる可能性まで作ってくれたのだから強くは言えないが。
何とか断る方法を考えるしかない。
「グランドラインも大変ですからね。急に寒くなったり、暑くなったりとか。急に雨が降ったりとか雪が降ったりとかするので気をつけてください。」
「さて、部屋の案内も終わったことですからご飯でも食べましょう。さっさと食べてしまわないとカームベルトに入ったら、食べ物の匂いでで海王類呼んでしまいかねないですから。しっかり食べておいてください！」
こんな自由奔放な中将の部下はしっかりお母さんみたいじゃないとつとまらないよね。
「あと、今の船に連れてきている海兵。通常の中将の管轄範囲もある

ので少数ですが、ぜひフェンさんの技術や指導に興味があるそうなので鍛えてあげてください！」
「ずるい！オレも模擬戦したいだろう！フェン、オレともやってくれるよな！」
「やらないです!!技術指導は別にいいですけど、戦闘はそんなに好きじゃないんですから！」
「そんなことないだろう。オレと戦ったじゃん！」
「あれは、いきなりお前が攻撃してきたんだろうがクソジジイ!!!」
　そうだっけと、頭を悩ましているジジイを見ると怒っているもの馬鹿らしくなってくる。
「そういうことなので、技術指導やそのお話は行ってもいいですけど、このジジイとの戦闘は疲れるので勘弁してください。」
「承知しました。ただ、たまに気が向いた時でいいので相手もしてあげてはいただけないでしょうか。なかなか強い人って見つからないらしくて、年甲斐もなく中将楽しみにしていたみたいで。」
　孫に構ってもらえなくなって、娘もお年頃のお父さんか！
「本当にたまににしてくださいね。本気で言ってますからね！」
「良かったじゃないですか、中将。たまになら良いそうですよ！」
「そうかそうか！じゃあ、今からオレが直にシゴいてやろう！」
　そんなにニコニコしてよってくるな！
　たまにって言ったよね？聞こえてます？
　今じゃないんですけど!!!

到着

結果として、海軍本部に着くまでの間、毎日ガープとの模擬戦が恒例になっていた。

本人曰く

「オレとちゃんと戦ってくれるやつが少なくてな。本部では、ゼファーとかセンゴクぐらいだが両方忙しくてかなわん。余計に身が入ってしまった。お前がそこそこちゃんと戦えるのが悪い。

とのことだった。

まぁ、個人的にもありがたかった点は多かった。ありがたいなんて死んでも言わないけど。

イーストブルー間での習得できなかった武装色に関しての研究や取得に一歩近づくことができた件だ。

きっかけは、気という概念を見直したことと、しこたま殴られたことに限る。

気という概念自体は前世の状況でもあった。

外気功、内気功と言われる太極拳の概念である。

内気功は自身の身体能力や心拍数などの体内状況をコントロールし、時には身体能力の向上、時には回復能力の向上といった自身の体のあらゆる能力を集中や瞑想などの気を高める行為によって生み出すこと。

外気功は、自身の気を他者へ譲渡することで他者の体の回復能力の向上など、他者の身体に影響を及ぼす概念。

上記内容は、全部自身の生命エネルギーといわゆる管理する概念だろう。

武装色や、覇王色というものもいわゆるこの概念と通じるところがあるのではないかと見直し始めたところから、だんだんと武装色についても感じるようになってきたのだ。

いわゆる自身の生命力を、何かの方法で一部の身体部位に集中をすることで気を集中させ、集中した結果が黒くなるのだろう。

いまだに黒くなる意味は不明だが。

後のところは、ガープにひたすら殴られ続けたのも大きい。
ガープの強靭な生命力が表面化して、私を殴ってくるわけだから、殴られている状況でガープの拳より伝わる感覚を自分の中で探せば良いのだから。
結局、乗船期間は1ヶ月に満たないぐらいの期間だった。元々武装色を追い続けて8年といった月日もかかったが、やっと取っ掛かりを手に入れた。
強靭な生命力があれば、武装色に至れる可能性があるのであれば、昆虫などでも使えるやつがいるのだろうか。
黒い、ピカピカした、滑空してくるやつとか。
あれが武装色を纏って飛んでくるなんてことがあったら、地獄絵図だろう。
考えれば考えるだけ恐ろしさが増すため、考えるのはやめにした。
恐ろしい。

帰りもガープにタコ殴りされることは決定しているらしいのも、非常に気が重たい。
まぁ、武装色がないとロギア系に立ち向かえないので、やるしかない以上やるけれども。
現在の成果としては、指先のコンマ数ミリであれば黒くなるかな。ぐらいである。

そんな中で原作でも大きな意味を持っているマリンフォードについたのだった。

「やっと到着したわ！フェンよ、到着早々そんなに大きいため息をつくな。」
「誰のせいよ、誰の!!あなたがちゃんと入る気がないって伝えといてくれれば、気持ちももっと軽やかだったわよ！」

「中将もフェンさんも、こんなところで喧嘩しないでください！さっさと、到着の報告に伺わなきゃならないんですから。センゴク大将ももう待って頂いてると言っていたではありませんか！」
本来マリンフォードへは、前日に到着する予定だったのだ。
それをこのジジイ、途中で「煎餅なくなったから、買って行ってもいいか」だの「ここの島面白そうだな、寄っていこう」だの時間に余裕があるからといって、寄り道放題しやがったのだ。
挙句に、ボガードに時間がないですよ！って急かされて到着したのは、面会当日だった。
「わかっておるわ。行くぞ！」
いつまでも、不貞腐れていてもしょうがない。
真っ向から入りません宣言をしてこよう。
ガープも流石に申し訳ないから、海軍所属の件はできないと進言してくれるとのことだ。
マリンフォードは漫画や原作で見るよりもよっぽど壮観だった。
数千人なのか、数万なのかの兵士が見る限りところで模擬戦や鍛錬をしており、その顔は言うまでもなく真剣。
もう目の届く範囲では、全部が鍛錬をしている兵士で埋め尽くされているのだ。
また、もちろん鍛錬であるが故に気合の入った怒声や返事が飛び交っており、見ても聞いても、思っていた以上の迫力だった。
「驚かれますよね。私も最初に来た時は、こんなに海兵が一堂に集まることあるんだって驚きましたし、迫力からびっくりしすぎて空いた口も塞がらなかったです。」
「驚いている気持ちもわかりますけど、ごめんなさい。フェンさん、今は急いで行きましょう！」
ボガードから、自身の顔より感情を読まれて微笑ましい顔をされたことに恥ずかしさはあるが、ボガードの言葉で我に返る。
これ以上、センゴクを待たせて気分を害するリスクは流石に避けたい。
頷いて急ぎセンゴクの元へと向かった。

建物も相応に広く、迷子になりそうだったのでボガードとガープを見失わないようについていく。
ただ、到着と共に沈んでいくガープの表情を見ていると不安に駆られる。
「やめてほしいわね。あなたがそんな表情をすると、私も不安になるでしょう。」
「だってな、考えてもみろ。オレはセンゴクに絶対怒られるわけだ。あいつの説教は長いんだぞ。億劫にもなるわ。」
「あなたねぇ。これじゃあ、ボガードさんの気苦労が絶えないわね、かわいそうに。」
「わかってくれる方が1人でもいてくださるだけで感無量です!!」
話しながらも移動していることもあり、そろそろセンゴクの作業している部屋に到着するらしい。
「ここの部屋にセンゴク大将がいらっしゃいますので、行きましょう。」
「オーっス！センゴクついたぞ！」
「中将！まずは謝罪からって言ったじゃないですか！」
ガープが堂々とドアを開けて中に入っていくと、見ただけで感じ取れるぐらいに青筋を立てたセンゴクが部屋の奥にある机でこちらを睨んでいた。
「おい、ガープよ。お前は本来、もっと早くの到着予定だったはずだな。」
「そうだな。」
「今、何時か言ってみてくれるか。」
「予定より3時間遅れだな。」
「一応、上司にはじめに言わなきゃいけない言葉があるのではないか。」
「おう、すまん。」
「すまんで済むわけがないだろうっっっ!!!!!この馬鹿者が!!!!!」
思いっきり顔面を殴られて、部屋の隅に吹き飛ばされるガープを見

てひとまず落ち着いたのか、センゴクの目線がこちらに向けられた。
「ボガードよ。いつも世話をかけてすまんな。ガープの手綱を握れるのがお前だけなのだ。苦労をかけるがもうしばらく頼むぞ。」
「はっ！承知いたしました！」
ボガードに向けられる表情は非常に優しく、そこには苦労の滲む表情でもあった。
そんなにいつも自由奔放に行動してるのか、このジジイ。
「それで、こちらが例の子だな？」
「はい、かの有名な智将殿にお招きいただき光栄でございます。フェンと申します。」
「そんなに畏まらんでもいい。そこのガープと同じ感覚で話して構わん。」
「センゴク、お前結構な力で殴っただろ！」
「当たり前だ!!!ちっとは反省しておけ!!」
少し壁にめり込むぐらいの勢いで殴られたはずのガープもピンピンとしている。
頭部を打ったのか、頭をさすっているぐらいだ。
「センゴクは、別に立場なんぞ気にせん。普通に話して良いと思うぞ。」
話すガープを見るたびに、目頭を揉むような。
イライラを抑えるような仕草をするセンゴク。
イライラしているのを見るたびに、私の気持ちがどんどん重くなっていく。
「そう。なら、普通に話すのだけれど。今日はなんで呼ばれたのかしら。」
「そうだな。ガープへの説教ばかりでは話が進まん。早速本題へ入ろう。」
センゴクの口より語られた内容は嬉しい報告を含めいくつかの内容に分かれていた。
まずは嬉しい報告だが、奴隷で囚われていた三姉妹の回収には成功

していること。
これはもう現在完了しており追って今連れてきている最中だと言うこと。
明日には到着するとのことで、本日は私が泊まる客室が用意されているらしく、今日はゆっくり休み明日面会の予定だそうだ。
「この内容に関しては正直に言うとさほど難しくはなかった。『うちの海兵を奴隷として連れて行けるわけないでしょう。うちの海兵なんで返してもらっても良いですか』と話しただけだからな。」
とのことだった。
実際のところ、奴隷になるのは民間人や海賊連中で海兵に関しては世界貴族に関しても奴隷として持っていくことは出来ないのだそうだ。
ただこの内容を民衆にどう伝えるかの部分が難航していると話していた。
品位の回復は急務であるらしい。ただでさえ、ワガママ放題のゴミ相手に保護を謳って護衛までしているのだ。品位や民衆の信頼などその点においては地に落ちている。
世界貴族は天災か何かと一緒にされるぐらいである。
まだ海賊を狩って、回復を狙っているも目につくのは海賊を狩るよりも世界貴族の内容の方が目につきやすいだろうしな。
「これはただの愚痴だ。いずれにせよ、新聞にでもリークすれば良いだろう。たちまち世界に広がるしな。世界貴族連中は俗世の事情になんて興味はない。新聞なんて見ないだろうしな。」
「本題はここからだ。フェン殿、海軍へ入隊する気はないか」
ほらきた。案の定だよ。
海軍本部になんて呼ばれるんだもん、そりゃそうだよな。
「なぜ、私なのか聞かせてほしいわ。別に私なんぞ入隊しなくても、外で練兵している状況を見れば、兵の練度も高く、相当な実力の方々が数千人や数万人規模でいらっしゃった。その中で、わざわざ私を呼びつける意味を教えてほしいの。」
「確かに兵の練度はまずまず高い。また皆、向上心を持ち日々の研鑽

も力を抜くことなく努力をしているのは、俺も言うまでもなく毎日見ているからな。そこはわかっている。」
「俺が欲しているのは、フェン殿の使う技術や武術の部分だ」
語るセンゴクの目からは嘘や偽る気持ちはなく、真っ直ぐにこちらを見て話を続けていた。
「フェン殿の育てた兵たちの中には、ここ海軍本部での勤務をしている者たちも多い。無論、俺も新兵の教練に顔を出すこともあることに加え、ゼファーという俺たちの同期が面倒を見ることも多い。その中でゼファーも俺も、多々驚くことがある。戦闘スキルや技術もそうだが、その闘い方に驚かされた。」
「俺たちの使う体術はもちろんある。俺たちの使う技術というのは、ただ実践のみでほとんどが磨かれ、自身に合ったものを自分で実践や組手をもとに研鑽していくといったものがほとんどだ。また、悪魔の実で成り上がってくるものも多く、実際のところ武の研鑽としては中途半端になってしまうことも多い。」
「それぐらい、悪魔の実の力は凄まじく手っ取り早い。正直、武術や武を磨くのであれば悪魔の実の力を極めたほうが強い状況がほとんどだ。」
「フェン殿の技術の何に驚いたのかといえば、自身の体や身一つで戦う技術。その技術力の高さだ。動きの一つ一つは完成され、どの動きを取っても無駄は悉く削ぎ落とされている。」
「加えて、この技術は弱者が強者に勝つために作られた技術なのか、相手の力を利用する動きも多く、自身の力以外でも大きいダメージを与えることもできる。」
「さらに、驚いたのが武装色まで浸透する内部攻撃の数々。その技術は我々海軍では持っていない技術だ。」
そりゃあそうだろう。
別の世界の技術だし、この世界では悪魔の実こそ全てって感じだろう。
「己の身のみで戦うと言っても、ゼファーやガープの戦い方は教育で学べるものでもない。」

「その中で、教練と自己研鑽で弱者でも強者に勝てる知識の詰まった技術は目新しく、また自身の才に限界を感じている海軍連中には目から鱗だろう。」
「フェン殿が教えた海兵も、その技術で他の海兵より短い期間で階級を上げているものも多い。」
　それで、是非ともと考えて連れてきたということだった。
「センゴクよ。こいつは今はイーストブルーから離れる予定はないそうだ。」
「そうね。ここまで連れてきてもらったこととか、私のお願い聞いてくださったこと、ここまで私を評価してもらったのは嬉しいのだけれど。私はまだ今住んでいるところを離れるわけにはいかないの。」
　そういうと、私の目を見て歎息をした。
「諦めきれぬ話だがな。その目は言っても聞かない目をしている。無理を言うつもりもないからな。」
　また深いため息をつくセンゴクに、ここまでお願いしている身からしても申し訳ない気持ちもつのる。
「海軍には所属ないけれど、流石にここまで協力いただいて何もしないじゃ申し訳ないわ。私の技術でいいのだったら、ココヤシ村に近い海軍支部だったら定期的に教えにいってあげることはできると思うわ。」
「何！本当か！」
「うん。ただ、あなたやガープのような超人に勝てるような技術とは思えないのだけれど」
「俺らのようなものは俺らで受け持つ。悪魔の実以外での対人スキルも磨いておかねば、悪魔の実以外のものが来たときに戦えなくなってしまうからな。」
「それでは、定期的にフェン殿のスキルを身につけたいやつを支部に送るとしよう。」
「無論、オレも行っていいよな！」
「お前は言っても聞かんから諦めとるわ。今回はよくやった、ガープよ。」

書類で正式に依頼されるらしく、定期的に報酬も出るらしい。
書類をまとめて、明日またここに来いとのことだった。
「明日、例の奴隷もここへ連れてくる。また明日ここに来い。」
その後は、話しているうちに日が暮れてきたこともあり、部屋へと案内され、この日は就寝となった。

奴隷との会合

推しキャラに会う日を迎えることもあり、ほとんど眠れない夜を過ごした次の日。

「フェンさん、目の下のクマすごいですけど。どうかしたんですか？」

「心配かけてごめんなさい。大丈夫なのだけれど、緊張しちゃって眠れなかったのよ。でも、大丈夫だから。」

心配してくれるボガードさんと横で鼻をほじくっているガープを横目に、今後の内容を考える。

やめろ、鼻くそをこっちに飛ばしてくんなジジイ!!

と言っても考えなきゃならない事はあまり多くはない。

海軍での今後の指導内容と、帰宅後の動向である。

現代武術の技術は目新しく、センゴクの言う通りで直接内部へと攻撃を通せる技術や、真正面から叩くことをスタンダードと考えている世界での奇襲方面の技術などはまさに目から鱗の技術であろう。

ただ教え過ぎれば、今後に自分が戦わなくてはいけない状況になった時に自分の首を絞めることにも繋がってしまうことだってあり得るわけだ。

いまだにスーロン化の手札は切っておらず、エレクトロでの身体能力上昇値にも振れ幅があることも、奥の手にはなるだろう。

だが、それ以外でも手札は多く持っていた方が有利に働く内容や状況は多い。

それ故に、結果いい塩梅に気をつけなくてはいけない。

今までの通りで進めていくつもりではあるものの、発勁などの浸透系の武術を教えてしまったのは今考えれば痛手になるのかもしれない。

武装色の覇気をもらっている都合上トントンか。

海軍に伝手を持っていることは、状況の位置早い情報の入手とか、物の仕入れとかの面で非常にお世話になっていることも多いため。その点を考えるのであればプラスだろう。

あとは、帰宅後は定期的に海軍支部に顔を出すこと以外は普通の日常か。

考えているうちに、昨日の部屋へと到着していた。
「センゴク大将！中将と、フェン殿をお連れしました！」
「開いているから入ってくれ。」
「失礼します！」とボガードと共に室内へと入っていくのだが、すでに今回の主目的であった三姉妹はセンゴクの右側に控えていた。
「ほう。これは、流石に絶世と書かれるだけのことはある。」
感嘆の声をあげるガープを見て、センゴクに目線を移す。
「まずは昨日話していた海軍支部での教練の話であるが、これはこちらで事務的な処理は済ませておいたため、週に2度ほど可能であれば指導にあたってほしい。また定期的に本部での人材も派遣したいと考えている。これは可能か？」
「いいわ。週に2度ぐらいであれば可能でしょう。だけど、良く海軍本部で海軍に所属しないものから教えを乞うなんて、問題にならなかったわね。」
「そこは、反対派よりも賛成派の方が多かったと言うのが正直なところで反対されなかったわけではない。」
詳しく内容を聞くと、現在の海軍部で取り扱っている技術は剣術メインに考えた指導状況やほとんどが実践での個人スキルでの組み上げがほとんどだそうで、その内容からか伸び悩んでいるものも多かったとのこと。
そこで取り上げられた新しい技術に伸び悩んでいたものや、より貪欲なものはまさに目から鱗の技術が多かったとのことだ。
加えて大将としてのセンゴクの実績からの信頼もあり、今回の話はすんなり通ったとのこと。
反対派の意見としては、海軍内部に部外者を入れるリスクを考えろとの意見だった。
それは現在までシェルズタウンでの強化の実績もあるため、問題なしとの判断だったそうだ。

「海賊もロジャーのやつが、起こした状況もある。年々、面倒な海賊が増えてきていることや、これからさらに加熱していくことを考えれば、海軍としてもなりふり構っている場合ではないのだ。これからよろしく頼むぞ。」

現代武術として、体の構造で一番力を発揮できるようにと１００年単位で研鑽され続けた武術も現代武術としてあるため、期待される技術ではあるのだろうが、正直に重たい。重たすぎる期待だよ、センゴク!!

「前報酬と言ってはなんだが回収してきた奴隷はフェン殿に任せよう。元々、ガープもフェン殿に頼まれて動いていたと言っていたしな。そうだろう、ガープ。」

「そうだな。で、どうするんだ。」

控えている姉妹に目を向けると、戸惑っている表情が見て取れる。それはそうだろう。助かったと思ったら、見ず知らずの人間が助けるために行動したと言った話が飛び交っているわけで。

面識もあるわけもない。

なんで助かったのか、今後の状況も含めて意味がわからないだろう。

「ごめんなさい、私たちだけに少しの間させてもらうことは可能かしら。もしくはこの子たち連れて部屋に戻ってもいいのであれば、それでも構わないのだけれど。」

「ここで話していけ。ガープ、久々に帰ってきたのだ。俺の巡回に付き添え、ボガードも付き合ってくれるか。」

「はっ！」

「嫌だ。めんどくさい。」

センゴクの部屋の戸棚にあった煎餅をボリボリと齧っているガープの近くまで、近づくと思いっきり拳骨を落とし、白目を剥いたガープを引き摺りながらいい笑顔、ボガードに声をかける。

「いくぞ、ボガードよ。１時間前後の時間で帰ってくる。それまでは、ここの部屋は自由に使っていい。巡回しているとわかれば、誰もこの

部屋にくることはないだろうから、安心して話すといい。」
声をかけると、ガープの巨体を引きずり部屋を出ていった。
「怖がらなくていいわ。私はフェンっていうのだけれど、お名前を教えてくれないかしら」
声をかけるも姉の背に隠れてしまっている（仮定、サンダーソニアとマリーゴールドだろう）はこちらの言葉よりも、怯えてしまっていることもあり返答には期待できそうにない。
唯一話せそうなハンコックだろう人物に声をかける。
「妾の名前は、ボアハンコックじゃ。こっちはサンダーソニア、マリーゴールド。話を聞く限り、其方が我らの救出に力を貸してくれたのだろう。妹たちが怯えてしまって、挨拶がまともにできる状態でないことの非礼を詫びよう。」
その見た目は、１２歳にしてすでに多くを魅了してしまうような美しさと幼さやあどけなさの残る可愛さが同居しているかのような風貌であった。
また皇帝の教育を施されているのか、口調は原作で見ていた通りのそのまま。
自身も不安だろうに、気丈に振る舞っているのが時折垣間見える不安そうな表情から伺えた。
「いいの。別に気にしてないわ。それに知らない奴隷で捕まって、終わったと思ったら知らない大人たちに囲まれて。不安な気持ちも全部わかってはあげられないけど状況はわかっているもの。」
ずっと張り詰めていた心持だったものが少し解けてしまったのか、こちらが心配そうに見ているのを感じて少し安心したのか、隠れていた姉妹が泣き出してしまった。またハンコックもまだ幼い。
気丈に振る舞ってはいるものの、年としては１２歳である。
１２歳の頃なんて、前世で言うなれば小学生である。
小学生で奴隷にもなったのに、これだけ気丈に振る舞わないと妹を守れない状況で生きなきゃいけなかったのだろうか。
そう思うといかにこの世界が子供や力を持たないものに、恐ろしい

世界かと改めて前世との違いを実感する。
なんていうか、考えるだけで涙が出そうだ。
てか出ていた。
カオスである。泣いていないのは当事者の姉だけ。
それ以外は、妹たちはおかしいことはないのだがつられて私も泣き出す始末。
合計３人がビエンビエンと声を上げて泣いているのだから、ハンコックはひたすらにオロオロしていた。
「なぜお前まで泣くのだ!!泣きたいのは妾であろうが!!」

私個人としては現実の殺伐さと姉妹の境遇に関しての内容で、少々お見苦しいところを見せてしまったのだが、、センゴクが帰ってくる前になんとかしないといけない問題を片付けなくてはならないため、泣いているばかりではいられない。

「散々わけもわからぬ状況で泣きおって。泣きたいのは妾だ、全く!!」
「それで、なぜ妾たちを助けたのかを語ってくれぬか。状況も、見ず知らずのお主が妾を助けるに至ったのかも全くわからぬ。見当もつかないまま、お主を信用しろというのも無理がある。なぜ妾たちはここにいるのだ。」
ひとしきり泣き終わった後という状況もあって、姉妹も泣き止んでおり不安そうな目をこちらに向ける。
さて、別に理由もないわけだが。
まさか前世の話をするわけにもいかないだろうし。
それにさっさとこの話を終えて、奴隷紋があるのか否かの状況確認とかあるのであれば、治さなきゃとか、治すところはセンゴクやガープに見られちゃいけないとか。
やることは盛り沢山である。
完全な自己満であるのだが、奴隷紋があるせいで今後の推しの生活に支障が出るのは、せっかく助けたのに納得できない。
どうしよう。

考えれば、考えるほど全くもっていい理由がない。
あえて言うなれば、推し。
「あの方、ミンク族じゃないかしら。」
「そうよ、お姉様。あの方、本で見たことあるもの。ミンク族だわ！」
後ろの２人は目をキラキラとさせながら、こちらに目線を向ける。
「サンダーソニア、みんく？とはなんだ。」
「動物の見た目で、人にすごく寛容な種族だって書いてあったわ。」
「そうよ、お姉様！あの猫耳と尻尾触ってみたいのだけれど、怒られるかしら！」
尻尾を右に移すと、右に目線が。
左に尻尾を移すと左に目線がうつる。
「いいわよ。触っても。触ってみる？」
「お姉様！」と目線をハンコックに向ける姉妹に、ハンコックも負けたのかＧＯの許可が出ていた。
「ふかふかで気持ちいいのね、この尻尾!!」
「ほとんど人の見た目と変わらないのに、耳と尻尾だけあるの不思議ね!!」
なんだか真剣に悩んでいたのがバカみたいである。
元々、奴隷になる前は原作でもこうやって活発に楽しむことのできる女の子であったのだろう。
妹達と遊んでいると、気持ちハンコックも羨ましそうにみているのが目に入る。
「いいわよ。別に引っ張ったりしない限り触っても。興味がないのであればいいのだけれど。」
「美しい妾に触ってもらって箔をつけたいと。」
「別に興味がないならいいって。」
「是非触ってほしいと!?」
「あぁ、そうね。是非ともハンコックちゃんにも触ってほしいなぁ。」
「しょうがないなぁ。」と言いつつ、嬉しそうにするハンコック近くにくる。
ニヨニヨするなよ、顔に出てるぞ。

目的は理由はどうでもいいのだろうか。
近づいてきた時にチラッと背中が空いている服であるということもあり、みてしまうが奴隷紋はしっかりと刻まれていたのだった。
「ねえ、お姉ちゃんから一つお願いがあるの。聞いてくれるかしら。」
そう切り出すと、やはりかといった表情でこちらをみる3人。
締まらないから尻尾を握る手も離してもらっていいだろうか。
「難しいことじゃないの、この豆を食べてほしいのよ。毒も入っていないし、心配だったら先に私が食べて見せてもいいわ。私からはそれ以上何かお願いすることもないし、なんだったらあとは故郷まで送っていくのをさっきのおじさん達に進言もしてあげる。どうかな。」
「妾は構わぬ。ここまで連れてきてもらって、今更殺されるなど面倒な手配をする意味のない故な。ただ、妹たちが食すのは妾が食べて問題がなかったことを確認してからでもいいだろうか。それさえ許してくれるのであれば従う。」
それはそうよね。
会って、助かって、話したのも数分だもの。信用なんてしたくてもできる時間ではない。
「私が先に食べて毒味をしてもいいわよ?」
「それはいらぬ。解毒剤をすでに飲んでいる可能性も考慮するのであれば意味がない。その豆とやらを早くよこせ。」
腰に巻き付けておいた、ダサ可愛い巾着より仙豆を放る。
後遺症に関して、効く記述と効かない記述と両方がある仙豆だ。
昔試したことがあるのだが、何年も前の傷であると流石になんともならないこともある。ただ、わりと近々の傷だと治ってくれる可能性が高いことを既に実証している。
ボリボリと仙豆を口に含み、飲み込むや否や、奴隷として扱われた際に怪我をしたのか、あざだらけだった腕や足、加えて背中の焼き印でつけられている奴隷紋の綺麗さっぱりと消えていた。
ただ流石の満腹感でお腹をさすっていた。
背中の痛みや足、腕などの痛みが突如引いていく状況に理解が追い

ついていないのか呆然としているハンコックに、食べさせてもいいか尋ねる。
「これは、なんだ。こんな豆なんぞ聞いたこともない。痛みがみるみるうちに引いていく。妾に何を食わせたのか。」
「悩むのはいいけれど、ソニアちゃんとマリーちゃんにも食べさせていいかしら。できるだけ、おじさん達が戻ってくる前に済ませてしまいたいの。」
呆然としながらも、首を縦にふるハンコックを見て他2人にも仙豆を配る。
2人とも仙豆を噛み砕き、飲み込んだ後、傷のない腕や足に飛び跳ねて喜んでいた。
こっそりと背中を眺め、奴隷紋もしっかりと消えているのを確認して、ちゃんと消えていることに一安心した。
これでひとまずこの3人は大丈夫だろう。
「こんな豆なんて聞いたこともない。一粒で全身の怪我を治す豆なんぞ、よっぽど貴重なものだろうことは想像がつくのじゃ。なんでそんな貴重な豆を3粒も妾達に？」
ここで外から、帰ってきたセンゴク達の声が聞こえてくる。
「ガープよ!!お前は見込みのある兵士を見つけたら、とりあえず殴りかかるのをやめろとあれほど言っただろう!!まだその癖は治らんのか!!」
「すまんすまん！楽しくなってしまってな!!」
ガハハと笑うガープの声と、気苦労の絶えないセンゴクの声だ。
「さっきの解答は、別にお姉ちゃんは助けたかったから助けただけよ。別に深い意味はないの。可愛い女の子がゴミクズに良いようにされて、泣いているのがお姉ちゃんは許せなかっただけなのよ。可愛い女の子に傷なんて似合わないから、あれもあげただけ。全部お姉ちゃんのわがままなのよ。だから豆のことは内緒にしててね？おじさんに知られたら、お姉ちゃん怒られちゃうから。」
仙豆なんて、超常現象をあいつらに知られたら何があるかわからんからな。

仙豆だけは隠し通さないとなるまい。
「妾もそんな理由で助けられたとは思わなんだ。・・・・ふふっ。そうか、島の外にも温かいものはいるのだな。」
ボロボロになっていた体や髪までのツヤツヤになり、改めての仙豆の効果には驚かされる。
ただ少しおかしそうに、微笑むハンコックの笑みは柔らかく、見たものが見惚れるような笑みを浮かべていたのだった。

船旅

「おい、本当によかったのか。あの子らもお礼ぐらい言いたかっただろうに。」

結局のところ、あの子らとは世界貴族と今後は会わないように、ひとまずは女女ヶ島に帰って自分の身を自分で守れるくらいの実力をつけてから、島から出るようにしっかりと準備をするようにと。それまでは、島で実力を磨きなさいと約束をした。

現在としては、原作での補正なのか否かは不明だが、既に悪魔の実は食べてしまっている状況のようで、マリーゴールドとサンダーソニアも蛇へと変身すること、ハンコックに至ってはよくわからないビビットピンクのビームを打てるようだった。

しかしのところ、奴隷でいた期間中には練習できる環境なんてなかったところもあり、集中してやっとこさできる程度ではあったようだが。

そして、その後は朝早くにセンゴクにあの子達をしっかりと送り届けることと頼み、早々に出発してきたのだった。

何故朝早くに出てきたのかといえば、そこまで感謝されても非常に気まずいからである。

所詮、私としては助けられる位置にいたからアクションを起こしたし、断られればしょうがないと割り切ることも視野に入れての行動だった。

理由も推しキャラで過去に悲惨な目にあっていた事を知識として知っていたから。

挙げ句の果て、ほとんど行動したのはガープやセンゴクであって、私は連絡しただけ。

傷も治したと言っても一日一粒湧いてくる豆を食わせただけ。

そんな中で、めちゃくちゃ感謝されても愛想笑いをしながら「へへッ・・・よかったすね・・・」とか返して場が凍りつくのがオチで

ある。
無論センゴクにも不審そうな顔をされた。
ただ理由も深く効かずに、送ってくれることも了承してくれたセンゴクには感謝しかない。
その分は海兵の練度や戦闘力で返せとのことだったので、こちらは気合を入れねばなるまいて。

「あの子らの現在の実力としても、あの年齢にしては光るものもあった。お前も感じていたのだろう？」
「わかっているわよ。別にお礼言われたくて助けたわけじゃないの。それに私と一緒についてきても楽しくはないし、せっかくの強さも農業ばかりじゃ腐らせちゃうでしょ。良いのよ、これで。」
「もったいない。あの子らも海軍で貰ってしまうぞ？」
「それをあの子達が望むなら良いんじゃないかしら。ただ、くれぐれもその場合はガープさんの下じゃないように、センゴクさんに念を押しておいたから。手加減もなしに殴って、綺麗な顔に傷付いたらかわいそうだもの。手加減知らなそうだし。」
「手加減ぐらいできるわ!!余計なことをしてくれよって。帰りの模擬戦は少し強めにするから覚悟しておけ!!」
おい、待てクソジジイ！
あれ以上のタコ殴りに私の体が持つ訳があるまい!!
めちゃくちゃ不満そうな目で睨んでやったら、ガープの目線が巾着に向いていることに気づく。
「嬢ちゃん達の体がオレが出ていく時と帰ってきた時で怪我がなくなっていた。連れてきたやつにも確認したが、背にも奴隷の焼印がしっかりとされていたそうだが、帰ってきた時には綺麗さっぱりだ。無論センゴクも気づいている。」
「ミンク族には、回復能力があるなんて聞いたことがない訳だが。何か知っているか？」
それは気づくよね!!帰ってきた時のあの子達めっちゃ元気だったもんね!!

道理でセンゴクはこっちをみて意味深な顔をしていたわけだ。
ニヨニヨとしながらこちらに目線を移してくるな、ジジイ。
「オレは行きの道中で戦闘中にお前に向けて、海水をかけたこともあったが力が抜けるわけでもなければ我慢している表情も行動もない。はて、悪魔の実でもないようだったが。」
「加えて、始終巾着を腰に下げてるときた。回復できるのだろ？深くは聞かんが、オレも多少しっかり戦っても問題なさそうだからな、覚悟しておけ。帰るまでに武装色が多少使えるように扱いてやる！」
これは、センゴクもこのジジイも気づいているようだ。
でもあの場で食わせるしか、方法もなかったし仕方がないのだが。

気を使わせてしまったなぁと思う。
本来であれば、たちまち回復させる方法なんてどう考えても欲しい能力だろう。
粒の制限があることを知らないわけだから、兵士がどんな傷を負って帰ってきても次の瞬間には元通りだ。
戦闘でのアドバンテージとしてこれほど大きなものはないだろう。
私は仙豆のことを知っていることや、病気に本当に効かないだろうかとか試しているから知っているが、万病にも効くかもしれないと考えてもおかしくはない。
そんな中で、ガープは深くは聞かんといった。上司であるセンゴクも知っていたといった。
支部での戦力強化での名目から、私の機嫌をとっておこうと考えたのか、否かぐらいのところであろうが。
それだけでは釣り合わないことも知っている。
なんだかんだでセンゴクも、人の親であるガープも。
優しいジジイ達だよ、本当に。
「中将は優しいでしょう。自慢の上司ですよ」
ボガードも隣で微笑んでいるのを見て、ちょっと良いなぁと憧れる。
あんな手加減していてもボコボコにしてくるジジイが上司は願い

下げであるが。

こちらが出港して、毎日ガープの扱きを耐え続けること数日にして、やっと拳のみではあるものの武装色で覆うことができるようになった。

「ガープさん、できたよ！武装色、私にもできた!!」

「だから、お前ならできるっていっただろう。オレが見込んで指導までしてやったのに、信用してなかったのか。」

こと戦闘に関してはガープは天才らしく、その類い稀な強靭な生命力から放たれる武装色の覇気は感じ取るためには打ってつけだった。

だからと言って、殴られ続けるのは一生勘弁したいが。

ガープ曰く一番早い方法らしい。

行きでの練習で1ヶ月程度、現在と過去を合わせると8年と2ヶ月である。

武装色を身につけるまで長かったが、これでロギア系がきたとて一方的に負けることはないだろう。

「せっかく身に付けたのに、お前から感じる覇気はしょぼいなぁ。」

しみじみとガープが言ってくる。

本来武装色を身につけてしまえば、自身の生命力の高さに準じて総量が決まってくるらしく、総量が多いやつはすぐに腕全体を覆ったりできるようになるのが普通らしい。まれに体全体を覆うこともできるやつも出てくるそうだ。

確かに武装色の扱いは練習して、無駄のない利用を身につければ持続時間は増えるらしいものの覆える総量が変化すると言ったことではないらしいのだ。

言ってしまうと、私はどんなに頑張っても拳を覆える程度の武装色ほどしか使えない可能性が高いとのことだ。

おのれ、神よ。

身体的貧困だけならず、生命力までも乏しいと。

女性の生命力は胸に詰まっているとでもいうのか。

「覇気がつかえるだけすごいと思いますよ!!使えない人だっているんですから胸を張ってください!!」
ボガードよ、お前はガープと拳でバトルしていた時は腕全体を覆っていたのを見ていたぞ。
別に私の長所はそこじゃないしね!速さと、回避力が売りだしね!!
急所特化型の怖さだしね!!
強者というのは、みんな生命力が強いらしく、か弱い私には向いていなかったようだ。

帰りは帰りで結局のところ、ガープの寄り道を止めることができず、行きと同じく寄り道しながら帰路についていたため通算で3ヶ月程度帰宅までかかってしまった。
定期的にベルメールへは連絡を入れており
「ガープ中将の自由奔放なところは、海軍だったらみんな聞いたことはあるわ。アタシもこのぐらいはかかるだろうなって考えてたもの。」
「それと、お土産ちゃんと買ってくるのよ!!ナミの服とか、離乳食とか。ノジコの服も大きくなってもきれるぐらいのサイズのやつ。とにかくいっぱい買ってきてちょうだい!」
と返されたのも記憶に新しい。
私の心配はどうしたと返したら
「あんたの心配なんてするだけ損でしょ。私より強いし、それにガープ中将の船でしょ?心配する必要なんてないじゃない。そこが危険だったら、私の村の方がよっぽど危険よ。」
とのことだった。
正論すぎて、言い返す言葉もなかった。
ガープの寄り道もお土産を大量に確保しなくてはならない身からしてもありがたかった。
両手で抱えきれないほどのお土産を購入してる私を見て、ボガードさんも引いていたが気にしない。
私個人で嬉しかったものが調理器具とブレスダイアル、ヒートダイ

アル、ウォーターダイアルのダイアルの入手である。
ダイアルに関しては、本部にいた時に入手できる方法がないかと聞いたところ、売っている街を教えてもらったのだ。
街の名前は忘れてしまったが、ガープに帰る道々寄ってもらい、入手へと成功した。

ココヤシ村では電気系統での生活といった状況ではなく、火での生活を行っている。
もちろん風呂は火を起こせば、なんとかすることもできるが、結局めんどくさくなり、水洗いが日課になっていた。
そろそろ風呂も恋しくなり、どうにかもっと簡単にすることができないか模索した結果がダイアルだった。
このダイアルは何を動力にしているのかは不明だが、ウォーターダイアルで水を確保し、ヒートダイアルで温めればあっという間に風呂の完成である。
風呂は木材で風呂桶と大工さんに頼んだらいいし、ホクホクである。
ブレスダイアルは髪を乾かす用だ。
これで村での生活ももっと充実するだろう。
それに、甘味もヨーグルトだけでは飽きていたところだ。
調理器具もそろったことだし、生クリームの製造に移れることもウッキウキである。
武装色の練習や、買い物、寄り道と充実した帰り道であった。

忙しい船旅は瞬く間にすぎていき、長旅を終えココヤシ村へと帰還した。
「フェン、遅い!!ノジコいっぱい待ったの!!」
到着の日程をベルメールと連絡をとっていたこともあり、到着をゲンさんとベルメール家一同、村の中のいい人たちが迎えにきてくれていた。
ノジコのタックルを身に受けながら、抱き止めてやる。

「ごめんなさいね。待たせちゃったわよね。」
　べそべそと泣くノジコを抱き留めながら、ベルメールに目を向ける。
「ノジコ、フェンがいないって毎日家と海岸を散歩するの。相当寂しがってたからね。しばらくはくっついていてあげて。」
　むしろ私も寂しかったよ、ノジコ！
　子供の癒し成分が日常にあるか否かは相当大切で、おじさんばかりの船では癒しが足りなかった。
　ノジコを抱きながら、トテトテと寄ってくるナミも抱き上げる。
「ゲンゾウさんも久しぶり！ナミやノジコを代わりに見ててもらってありがとうね！」
「なに。子供といるだけで日々の活力を私の方がもらっていたよ。」
　ゲンゾウさんとの挨拶もほどほどにし、出航の準備を終えた船に声をかける。
「ガープさん、ボガードさんありがとうね!!今度こっちに来たら美味しいご飯でも作っていげるわ！支部にいらした時はご飯でも食べましょ!!」
「はい！その時は楽しみにしています！ほら、中将も!!」
「なんだ、ボガード。フェンも武装色の鍛錬やっとけよ。じゃあ、ほれボガード。さっさと出航するぞ。煎餅が切れる。」
　大きく手を振って見送ると、後ろ姿ながらに手を振りかえしてくれるガープが目に入った。
　なんだかんだでいいジジイだよなぁ。原作でも今も。
「「「出航!!!!」」」
　号令と共に、船は出航していった。
　さて、私もやることはいっぱいだ。
　迎えに来てくれていた街の大工へと風呂桶の詳細を書いた図を渡し、急ピッチで作ってもらう依頼をするのも忘れずに依頼し、久しぶりの家に帰るとする。
　自主鍛錬やスイーツ作りに、風呂の常設。
　しばらくはスローライフでゆっくりとしよう。

日常

ココヤシ村に戻って、しばらくはスローライフを満喫していた。
昨今で特別なことがあったといえば、アラバスタ王国での王女誕生の記事を新聞で拝見したことぐらいであろう。
あとは最近になって遭遇したシャンクスが、原作ではお馴染みの目のところに3本線の傷が入っていたことだ。
本人はあまり語りたがらなかったために深く突っ込んでは聞いていないが、原作通りであれば白髭や黒髭と一悶着あったのだろうと考えている。
元気そうにやってはいたので、ベックマンに仙豆を渡しておいた。
もし傷を消したいとか言ったら食わせてやれ。そうでなければ、腐るのがオチなので機会がなかったら捨てろと言っておいた。
結果のところで言うと、戒めにする。
今後は油断しないようになって言っていたとのことだ。

他には特段特別なイベントがなかったため、生クリームの製造とチーズケーキがめちゃくちゃ食べたくなったこともあり、基本的には買って帰ってきた調理器具を使ってのスイーツ作りに勤しんでいた。
ナミやノジコも、私の行動する時や調理道具を触っているときは美味しいものが出てくるとわかっているのか、調理をしている時には「何作ってるの!?美味しい?」と足の周りをうろうろとするか、ノジコは興味が出てきたのか「わたしもするーっ!!」と元気一杯で手伝ってくれたりするようになった。
ココヤシ村での生活がそろそろ一年になるため、ノジコは4歳、ナミは2歳としっかりと成長しておりめちゃくちゃ可愛い時期である。
日々癒しをもらってます。

お風呂に関しては、風呂桶が依頼してから1週間程度で完成したとの報告をいただいたために受け取りと設置をしてもらった。
最近は風呂の味を覚えたのか、就寝前や夜になると風呂に入りにべ

ルメールや子供たちが遊びにくるようになった。
ベルメールとお風呂に入るわけなのだが、もうこの体になって８年も経つと女性の体に興奮することもなくなったが、あの大きいバストを目の前で披露してきて、ニヤリとコチラを見てくるベルメールにはイラッとしたためしばらくおやつ抜きにしてやった。
貧乳はこの世界では、唯一無二の個性かもしれないだろ。
街の普通の住人ですらナイスバディだぞ。
大きいアドバンテージだと信じていくからな!!
そんなこんなでクリームチーズや、チーズケーキの製作に関しては、何度かの挑戦は繰り返したものの、割としっかりとしたものを作れるようになっていた。
お店で見たあのクオリティは、いずれ出てくるゼフやサンジくんに任せるしかないようだったが。
村での状況は、ちょっとしたお菓子屋さんのような立ち位置を確立しており、村やゴサの街での評判はいい。
たまに子供が列を作って買いに来るのも、微笑ましくニヨニヨしながら眺めているとベルメールがやってきて「また気持ち悪い顔してる。やめた方がいいよ、その顔。」と冷静に突っ込まれるのが日課だ。

また海軍支部での進捗も順調である。
週に２度ほど近くの海軍支部へとお邪魔し、模擬戦や鍛錬の成果を確認し、また練習メニューを渡して撤収すると繰り返している。
コチラの内容で、わたしが意図していなかった内容で海軍内部での動きがあった。

海軍での汚職や賄賂などで活躍の幅や地位を確保していた奴らが、軒並み淘汰されていった。
なんせ本部から海兵が定期的に派遣されてくるからだ。

これはセンゴクが言っていた通り、本部で鍛えて実力を順当に伸ばしていける人材はそのまま本部で鍛えればいい。

伸び悩んでいる人材や、剣術が自分には合わないと考えているものなど様々な理由で、体術の技術に重きを置いてとり入れて行きたいと言った需要が、立候補制で選抜されてやってくるらしい。
中には「フェンさんに会えるって聞いて!!」とか「僕のフェンさんに触れるな!!」とか、たまに頭のおかしい奴が紛れてくるため、きちんとまともなやつを選別して欲しいと思う。
もっとまともな人材に好かれたい。
結婚とかは勘弁だが。
男とか好きになれんし。
最近は男性に興味がなさすぎるところもあり、ベルメールには同性愛の心配をされた。
ベルメールには男らしく
「アタシは、男と結婚して幸せに生きるよりもこの子たちを育てたいって思うし。フェンはずっと一緒にいるから、もう家族みたいなもんさ。それに偏見もないしね。いつでもおいで！」
と言われた。
女性として好きになるって感情もあまりこの体になってから湧いてこないため、性の欲求がないのかもしれん。
何も言わなかったのが、恥ずかしいとでも勘違いされたのか
「可愛い奴だよ、ほんとに!!」
と抱きしめられたのだが、マスコットか何かと勘違いされていないだろうか。
不安である。

本部より派遣された海兵が不正や、書類改竄などの状況を確認したり、定期的に訪問してくるために動きが制限されたりといった状況。
今回の内容での起こった副産物である。
全ての不正や状況や改竄が是正されたわけではないのだろうが、風通しもよくなり、海軍内部での状況や空気もきれいになったように感じる。実際、評判の悪かった海兵や上司は本部へと一度召集されたり、降格されたものなどもいたらしいと噂だ。

今後のネズミ事件や、モーガン事件はより起こりづらくなったことは間違い無いだろう。
ココヤシ村でも、いざという時に備えて定期的にベルメールと組手をするわけなのだが、それを見たノジコも「やる!!」と言い出し、型の真似をしている風景に和まされた。

本部から派遣された人材の強さに、元々いた海兵たちも最初は圧倒されていたものだが、徐々に慣れ始めた頃には一緒に揉まれながらもっと強くなるための目標や、指標になっていた。
１５５センチ程度の非常に可愛い見た目の子を指差して、化け物だなんだと言ってくるやつも多いため、そんな奴には私との組手の耐久レースを組んで、盛り上がったり、時折支部内でのランキングをつけてモチベーションを上げたり、一種のお祭りのようでコチラはコチラで非常に楽しくやっている。

ちなみに、ガープもよく登場しエキシビジョンマッチとして私が戦わされて、ボコボコにされてこの前はガープの評価は上がり、私も化け物ではなくようやく人間として扱われるようになったもの付け加えておく。
流石の英雄である。長らく相手をさせられるがまだ1勝も出来ず仕舞いである。
いつかはジジイをボコボコにしたいが、原作開始時点でも砲丸投げるパワーは健在だった。
少しは老いぼれればいいのに。
ちなみにちびっ子ルフィ（赤ん坊）だと思われる子供をガープが連れてきたこともあった。
「俺の孫だぞ！めっちゃ可愛いだろ！」
「は？うちのナミとノジコの方が可愛いだろ！」
と我が子自慢で周りに呆れられ、結果ベルメールを呼ばれて拳骨を食らった。

ちびっ子がいるってことは、あと5年もすればフーシャ村での物語開始であると思われる。
「お前育てるか？」とのことだったが、丁重にお断りしておいた。
その時に言っていたのだが、あの後、三姉妹を送っていく際にセンゴクは非常に苦労したらしい。
私が知らない間に勝手に帰っていたから、三姉妹もせめて礼ぐらいはしたかったと私のことをできれば追いたいとマリーゴールドが。もう会えないかもしれないとサンダーソニアが泣いてしまったそうだ。
相当にこの猫耳と、ふわふわのしっぽが気に入ったと見える。
最近は尻尾は手入れをしないとすぐゴワゴワになってしまうので、念入りに洗っているし。
頭の上に耳があると耳から水が入りやすいため、頭の上に耳の細心の注意を払いながら洗っているため、自分で触っていても気持ちがいいぐらいである。
お姉ちゃんは流石に泣きはしていなかったそうだが、ぐぬぬっとしていたそうだ。
「妾に借りも返させないどころか、黙っていなくなるなんて考えもつかんかったわ。妹たちもこんなに悲しんでおると言うのに。万死に値する。」
とのお言葉が漏れていたらしい。
今度会うときは敵になっているかもしれない。
機嫌とりながら、女ヶ島に行き着くまでにハンコックに惚れ込む海兵も出てくるわ。次期皇帝だから機嫌は取らなきゃいけないわ。と愚痴をこぼしていた。
そんなにまでしてくれた理由はあると言っていたが、詳しくはセンゴク本人に今度会ったとき聞けと言われた。

最近の日常はそんなところであろう。
だが、ここ最近での一番のビックニュースがある。
それは、ナミがついに言葉を話すようになってきたのだ。
「ママって言ってみな??ママ??」
とか、ベルメールが言っていたり
「フェン、フェンだよ??」
って声をかけてみたりもしたのだが、結局は呼ばれたのはゲンゾウで。
「けん!!けんしゃっ!!」
とゲンゾウを指差して笑った日には、ベルメールと私は1週間前後ゲンさんと口を聴かなかった。
私も風車さしておけばよかった。

しばらくの間は、何事もなくスローライフを満喫するのであった。

島は突然やってくる

聞いていただけると嬉しいことがある。
天空に浮かぶ島って知っているかな。
バルスではないよ、人がゴミでもないの。
私は、今、天空に浮かぶ島で暮らすことになりました。
知り合いも1人もいなくなってしまった。
齢、もう肉体年齢も２０代も半ばに差し掛かっていることだろう。
こんな状況じゃなければ、天空に浮かぶ島も空を飛んでいることも非常に喜んでウキウキ気分だったかもしれない。
はぁ、どうしてこうなった。

海軍での一件を終え、ココヤシ村に戻ってからの日常はあれから数年間はいつも通りの日常を平和に過ごしていた。
ナミやノジコはスクスクと育ち、ノジコの年齢は7歳、ナミは４歳としっかりと育っていた。
ノジコはお姉さんらしく、ナミの面倒を見ながら本を読んだり、料理を教えてくれとせがまれたりでしっかりとしたお姉ちゃん感が出始め、ナミは当時のノジコを思い出すような活発さと甘えん坊に育っ

ていた。
ナミに関しては、航海術を持たないままに育ってしまうことで原作での状況や、才能を埋もれさせてしまうことも勿体無いため、海図や縮図のような地図関係の書物をベルメールの家に置いてきた。
「うちに海図なんて置いてどうするのさ。ノジコは面白がって見るから、置いていくのはいいけどさ。」
と心底不思議そうな目で見られたために、いろいろな本があった方がいいでしょと押し切った。

ベルメールも継続して日々の鍛錬は続けているため、もはやアーロンに負けることは心配していない。
むしろ、前半の海ぐらいであればいい勝負をするぐらいまで実力はついていると考えている。
目下の当初の目的であった、モーガンとアーロンの事件に関してはもう問題はないだろうと考えている。
加えて、海軍とのつながりも継続しており海軍内部での腐敗状況も、ほとんどが解消され、海軍に助けを求めたらしっかりと頼りになる人材を派遣してもらえるだろうといった側面からも、手を打てる状況にも変わっており安心していた。

また個人戦力としても、定期的にガープに鍛えて（ボコボコにされる）もらっていることもあり実力も安定して鍛えられる状況もあり、勝てはしないものの、へたな中将クラスや下手したら大将でもいい勝負ができるだろうといったお墨付きをいただけるぐらいには強くなったとのお言葉を頂くほどにはなった。

もちろん、自身としてもこの海賊が闊歩している時代で不測の事態が起きないと考えるはずもなく実力や海軍とのつながりの維持とか、不測の事態への対応策は考えていた。
ただ、今回の出来事は私の想像での状況を超えていた。

なんせ村の上から島が降りてくるのだから、そんなの想像つくわけもないだろう。
私もまさか島が降りてくるなんて思っても見なかった。
もちろん怪奇現象かとか、海王類の力かとかいろんなことが頭の中をよぎった。
私や村の人間は揃って、唖然とした表情で村の海岸に島が不時着するのを眺めていた。
私はそこまで過ぎてから、頭の中によぎるものがあった。
原作はいまだに比較的覚えている自信があった。
ただ現行でロジャーは死に、こいつもインペルダウンにとらえたと新聞で読んでいたために忘れていた。
ここで一番自身を呪った。
なぜ脱獄するという事象を忘れていたのか。
なぜイーストブルーに恨みがあることを考えなかったのかと。
前作開始までの役２０年と、原作ではおとなしくしていた記載もあったため考えてもいなかったのだ。
実力がついた、鍛えたと安心してしまったことがここまでの状況を生むとは思っても見なかった。

「ベル!!ナミとノジコを連れて隠れて!!」
「ゲンさんは村の人とすぐに逃げて!!」
「フェン。あれは一体なんだっていうの。島が降りてきたように見えたんだけど。」
呆然と現実の状況の理解が追いついていないこともあり、内容を整理をするように話すベルメールに檄を飛ばす。
「ベルメール!!早くしなさい!!」
ココヤシ村に来て、私は非常に温厚だったと思う。
街の子供たちは可愛いし、ゲンさんやベルとだって喧嘩はすれど

も、本気で怒ったことはない。
大切な友人であり、家族と考えていたほどだ。
そんな私がここまで鬼気迫る表情で話していることに、いかにまずい状況なのかと言うことをようやく理解したのか、ゲンさんとベルメールが慌ただしく動き出す。
「フェンはどうするの!!あんたがそんな表情ってことは相当まずいんでしょ!!」
「私しか止められる奴がいないじゃない!!大丈夫、とっておきが在るもの。いいから行きなさい!!」
「ベルメール!!いくぞ、フェンちゃんの言う通りだ!!私たちがここにいたところで足手まといになるだけだ!!できることは、フェンちゃんが戦う際に周囲を気にしなくていい状況を作ってやることだ!!」
どんなにまずい状況にあるのか、表情から察したのかこちらに向かってこようとするベルメールを抑え、諭してくれるゲンさんに感謝しつつ「いけ!!!!」と声を張り上げる。
「アタシも一緒に戦うわ!!そのために一緒に訓練してきたじゃない!!」
「バカいうな!!ココヤシ村に来たのだって、海軍をやめたのだって。子どもを育てるためだったんでしょうが!!ナミやノジコだって、お母さんがいなくなるってことは一番しちゃいけないんだよ!!」
ここまでの剣幕で怒ったことは、こちらに来てからなかったかもしれない。
ベルの足元でナミもノジコも怯えてしまっている。
ごめんな、こわいお姉ちゃんで。
「もう揉めている暇はないかも。ゲンさん、ベルのこと頼んでいい?」
「任せておけ。私らが力になってやれんことが悔しい。フェンよ、私は家族を失う悲しみを味わいたくはないぞ。ちゃんと帰ってきなさい。」
ゲンさんにベルメールを任せ、正面にある島に目線を向ける。
「ベイビーちゃん。話は終わったか?」

髪もしっかりと生え揃っており風格や佇まいだけ見てもガープやそれに並ぶオーラが見て取れる。
両足が切断は折れている状況は原作通りで、まだ通常の足ではないことで実力が落ちているのであれば嬉しいのだが、そこまでのことは望めないだろうと言った状況である。
「大海賊のシキさんよね。こんな辺鄙な村に何の用かしら。」
「ジハハ！歓迎されてねえなぁ、おい！まぁいいんだが。」
葉巻を加えた大男が近寄ってくる。
口の中に溜めた煙吐き出しながら、徐々にこちらへと近づいてきて、手の届く距離まで寄ってくる。
「フェンってやつはお前だな。」
言葉と共に、顔に手を伸ばしてくる。
流石にジジイに顔を触られて喜ぶ趣味も思考も持ち合わせていないため、伸ばしてくる手をはたき落とす。
「やめてくれるかしら。初対面の人に触らせる程、安くはないつもりだから。それで私の名前を知っているのは分かったのだけれど、私に何の用かしら。」
原作でルフィとバトルをした際に負けた理由は長期間のブランクと頭の舵輪などの数々の傷のせいだと言った理由だと記憶している。
現在のシキ相手にどこまで自信が通用するのかは未知。
下手したら、普通に負けてしまうことも考えられる。
私の負け。それは、ベルメールや村のものの死に繋がる恐れもある。
避けなくてはなるまい。
ベルが海軍に連絡を入れてくれればいいが。
「気の強いねえちゃんだ！嫌いじゃねえが、時と場合を考えた方がいい。さっきのベルっつったか。大切なんだろ？」
「で、何の用よ。わざわざ私の名前までリサーチして、大海賊のあなたが来た意味がわからないわ。」
そういうと、もう一度手を伸ばしてくる。
下手に刺激をするわけにもいかず、手を退けることができなくなっ

た。
顎を掴まれ、そのまま自分の顔と目線を合わせるように上を向くように顔の向きを変えてくる。
「最近は定期的にイーストブルーに足を伸ばすようにしていてな。ちょくちょくイーストブルーでの海軍の動向とか状況の偵察に来ているんだが。そこで噂を聞いていてな。」
「海軍の強化、訓練。腐敗していて低迷していたイーストブルーはどんどんと実力を伸ばしている。厄介なことに、めんどくせえ、ガープもイーストブルーに度々足を伸ばしていると。ロジャーが死んだ街があるってだけで鬱陶しいことに加えて、どんどんと不快なことばかり増えていく。」
「話をいろんなところで聞いてきたが、その話題の中心にいるのがフェン。お前だ。海軍を鍛えているのもお前。ガープがここにくるのもお前。俺はイーストブルーを潰してぇんだが、お前の行動は俺を心底苛立たせるわけだ。」
「ただよ、優秀な人材は俺もただ殺すのは勿体無いと思って、迎えにきたわけだ。」
何言ってんだ、このジジイ。
「迎えってなんのことよ。」
「俺の船に乗れ。そして、俺の兵士を育てろよフェン。海軍を強化した手腕を俺の元で動かせ。」
「バカなの?・そんなのできるわけないじゃない。私はどちらかというと海軍側の人間よ。できると思う?・」
「できるできないじゃねえ。やるんだよ、フェン。じゃなきゃ、俺はお前の大切なものを壊さなきゃならねえ。将来の仲間の大切なものを俺は壊したくねえからよ。」
そう言うことだとは思っていたよ、全く。
自分の危機管理能力のなさに嫌気がさす。
ガープのお墨付きだ、海軍との伝だ。
安心していた気持ちがこの状況を生んだのだ。
自分にできることなんて限りがあることなんてわかっていた。

自分1人じゃできないことの方が多いことも気づいていた。
ならもっと打てる対策を考えなきゃいけなかったのに。
安心していたら、この様だ。
もちろん、戦うことはできる。
逃げるぐらいであれば、私1人だったらおそらく出来るのではないかとは思っている。
守りきるのは、無理だろう。
「フェンを連れていくな!!」
後ろからノジコが叫ぶ声が聞こえる。
「ベル!!ノジコを連れて帰って!!」
「フェン!!行っちゃダメよ!!アタシと一緒に、ナミとノジコ育てるって言ったじゃない!!」
「アタシ、あんたも家族だって!フェンがいなきゃ楽しくないんだよ!!フェンがいて、ナミがいて、ノジコがいて!!そうじゃなきゃ笑って幸せって言えないの!!」
ごめんね、ベル。
ノジコもちっちゃい頃に、寂しい思いさせてこんな思いさせないよって言ったのにね。
ゲンさんも街の人たちのことだけで大変なのに、ベルまで任せちゃってごめんね。
「ベルもノジコも、ゲンさんも。街のみんなも。みんなみんな大っ嫌い!!家族なんて柄じゃないわ!!いなくなった方が清清して良いわ!!」
「私は、この大海賊のシキと一緒に自分の生きたいように生きて私の強さを証明するの!!いいわ、シキ仲間になってあげる。さっさと行きましょ。」
「いい判断だ、嬢ちゃん!ジハハハッ!!気持ちがいいねぇ!!」
あぁ
夢のスローライフも終わりのようである。
振り返れば、きっとベルもゲンさんも怒っているのだろうか。
泣いているのだろうか。
私も振り返ることはできないけれど、一緒に入れなくなったのは。

家族を危険に晒したのは、私の怠慢であるのだから何も言えない。
シキに連れられ、シキが出てきた島へと歩みを進める。

「フェン!!あんたがなんて考えても、家族だって!!絶対助けてみせるから、待ってな!!!絶対だから!!」
ばかだね、ベルも。
島に移るとシキの力で島も浮かび始め、瞬く間にココヤシ村から離れていく。
ベルと笑って、ナミの成長を見守って。ノジコとご飯作って。
そんな生活がもう帰ってこないと考えると、大切だったことをより深く今になって実感するよ、全く。

しばらくして自分の家は島にあったものを割り振られ、医者としてのスキルを認められ、立ち位置としては教官と船医として動くことを命令された。

メルヴィユにて

浮島から、シキの本島のメルヴィユへと到着してからのことを話そうと思う。

まずのところ状況は最悪だった。

ココヤシ村へと戻るための方法を一通り考えた。

まずはシキから単純に逃げる方法。

無論、力ずくで逃げても逃げるだけなら通常の身体能力が高く、スーロン化やエレクトロでさらに飛躍的に元々高い身体能力にブーストをかけられる私に分があるだろう。

この方法をとるなら、ココヤシ村での住人を当初から無視して取っていた。

みんなを人質に取られている以上はこの方法は取れない。

次に考えつくのは、海軍での助力を乞うこと。

メルヴィユに着いてしまった今、原作でもこの島は秘境の島とされており、シキによって島自体を浮かされているため海軍での発見は無理だと考えている。

見つけたとしても、空を飛ぶ船なんて登場したのはシキの島とエネルの方舟くらいのものだろう。

月歩で飛んでくるにしても、団体でくることは考えられず、単体戦力で勝利の可能性があると考えられるのはそれこそ大将などの突起戦力だけであろう。

連絡を取る手段もなく、この方法も建設的ではないだろう。

後のところは、シキが油断したところで倒し切るか。

そんなところであろう。

いつ頃になって頭に舵輪が刺さるのかは知らないが、現状のほぼ全盛期シキにどこまで通用するのか。

現状は勝てる見込みは薄いと感じているのが正直なところだ。

こいつを捕まえる時もガープとセンゴクが2人がかりでインペルダウンに放り込んだのに、私個人で倒し切れるなんて夢のような話はないと思っていいだろう。

私個人に関しての扱いもシキより話があった。
1、歯向かうな。村人を1人ずつ殺す。
2、メルヴィユ島内での医者とシキの手下を鍛えろ。
3、怪しい行動をしても村人を殺す。
4、逃げるな。逃げようとしたら村人を殺す。
とのことだ。
私自身の怠慢や慢心が招いたことは理解している。
わかっていたら、もっと対策を講じなくてはいけなかったことも理解しているが、この状況は正直に辛かった。
この世界に来てからの自分は非常に恵まれていて、人の温かさや、周りの人に非常に救われていたことはわかっていた。
世界に1人で、血のつながった人も1人もいない状況でここまで生きれてきたのは、周りの温かさに恵まれてきたことで寂しい思いも癒されながら生きてくることができていた。
それが、全部なくなったのだ。
ベルメールやナミやノジコ、ゲンさんも、シェルズのみんなも、仲の良かった海兵や鍛えてくれたガープもみんないなくなったのだ。
私個人の動きで、みんなを守れることは良かったと思っている。
私が頑張ればみんなが幸せに生きられることは嬉しく思っている。
それでも、もう会えないんだって思うと不安と寂しさと、虚無感と。
押し潰されそうだった。
シキの前で睨んでやるぐらいが、今の私にできる精一杯だった。
唯一の救いだったのは、この体が貧相だったことで女としての扱いを受けなかったことだろうか。
浮島での時もメルヴィユの時も両脇にはグラマラスな体型の女性を侍らせており、私もそこに入るのかと絶望していた時に「ベイビーちゃんにはそっちは期待してねえよ。子ども体型には興味もねえ。」とのことだった。
違う意味で腹が立ったわけだが、怒る元気もなかった。
メルヴィユ到着すると、島内にはシキの住まう邸宅のほかに周辺に村が存在していた。

私に与えられたのは、邸宅内にある埃を被った掘っ建て小屋であった。
中も掃除もされておらず、壁も朽ち始め、カビも繁殖している。
どうやらシキが支配する前に、この地にも村がありその名残だと言っていた。
私に勝手な行動をされると困るため、邸宅より監視しやすい距離。邸宅内で信用できない人物を飼うわけにも行かないため、こちらの土地であるらしい。
唖然とした表情を浮かべる私の表情を見て「嬉しいだろ？ジハハハッ!!」と高笑いしてやがったあいつの顔は一生忘れることはないだろう。
監視も日替わりで着くとのことも報告を受けた。
ここまでされたらお手上げである。
私にできることは、シキの命令に従いながら何年かかるかわからないシキが衰退していくのを待つほかなかった。
ここまでが、到着してすぐのところまでだ。

メルヴィユでの日常も非常に不快であった。
私個人に振られる仕事は大まかには、医者としての立ち回りと教官としての立ち回りはもちろん強要された。
鍛えたくない海賊に自分の知識を引き継がなくてはならず、怪我をした人材がいれば昼夜問わず叩き起こされ、処置を強いられる。
これはまだいい。元々、船医に近い状況にはいたこともあるし、海軍ももちろん鍛えてきた経験もあったために仕事としてはされている部分が多いため、多少の辛さはあるものの想定していた。
私の仕事は、当初はそれだけのものだけだろうと考えていたのだが甘かった。
このシキの実質支配下にある島では、村村から若い人々と人質に取り、労働を強いることで反乱の芽を定期的に摘むことで島内での治安

を維持している。
私は若い人々を村から搾取してくる役回りを命じられた。
頻度としてはそこまでの頻度で赴くわけではない。
一緒に育ってきた子どもであろう、大切に育ててきた家族だろう。
可愛い我が子だろう。恋人だっているかもしれない。
そんな子たちを村から無慈悲に連れていかなくてはならないのだ。
「あなたも家族はいるのだろう!!大切だった気持ちも知っているだろう!!なぜ、ワシらから大切な家族を奪っていくのですか!!」と叫ばれたこともある。
「いや!!連れていかないで!!私の命よりも大切なのよ!!」
と涙ながらに、腰に組み付いてきた母もいた。
「俺の息子を返せよ!!!」
と、農具を振りかぶり勇敢に立ち向かってきた父もいた。
連れていかねば、私の家族の命が失われる恐怖と村人の悲痛な表情や怒りからの眼差し。板挟みにされる状況で私は心身共に疲弊していった。確かに、庇って嘘ついて連れていかなかったこともある。
その際には、Ｄｒ．インディゴの実験室まで連れていかれ村の人間での人体実験をしている現場に立ち会わされた。
村の人間もこうなるぞと脅しだったのだろう。

体も自分で見る限りでもわかっていたのだが、食は細り、ガープと鍛えた身体の筋肉も落ち、自慢だった身体能力も維持することも困難だった。
仙豆を食えばいいと考えたこともある。
ただ、こんなおかしい豆を持っているとバレることは避けなくてはならず、飯も吐き、摂取をできていない私の状況も監視のものが見ているのに元気一杯なんて姿を晒すことはできないのだ。
飯も喉を通らず、見る見るうちに憔悴していった。
最近は作った簡易的な点滴で栄養を補給し、生命を維持している始末である。

これがシキの島に来て一年間の私だ。
原作が開始されるまで、あと１５年と言ったところだろうか。
外界での近況は新聞での状況確認も、でんでん虫での外界との交流も遮断されているため全く情報は入ってこない。
これではシキを倒すどころか、それ以前の問題だろう。
ただ、驚いたことが一つだけあった。
生命の危機に体が瀕したからなのか否かは見当もつかないが、周りの生命力は敏感に感じ取れるようになった。
周りの生命力から動きや、状況を予想することも少しずつわかってくるようにもなった。
今思えば、これが見聞色なのだろう。
私の見切りやエレクトロでの擬似見聞色ではなく、本来の見聞色が初めて理解できるようになった。
見聞色がわかってくると、ガープにボコボコにされてなんとなく感じていた自身の生命力もより深く感じ取れるようになったりと少ないながらプラスに働いたことが、唯一の救いと言ってもいいだろう。
今になって思うのは、ナミは一番可愛い時期だったなとか、ノジコはベルメールのいうことちゃんと聞いているかなとか幸せだった頃の記憶とココヤシ村に戻りたいと言った願望だけだった。
あぁ、貧乳も育ってくれると思ったのにこのざまだよ。

こんな状況でもシキは何も言ってはこなかった。
もう一年といった期間で、私個人で教練していた海賊もそこそこの実力をつけ、また技術を教えることもできるようになってきていたからだと思う。
こういった現代武術は日々修練と言われる通り、一年やそこらで完成する技術ではないのだが海賊なんて生活をしているものに、忍耐力や真面目に取り組むなんて気持ちもあるわけがなく、極めた気持ちでいっぱいなのかもしれない。

ここ一年は日常を過ごすので一杯一杯だった。

ただここまでが私の計画だった。

まともに戦ってシキを倒せるわけもない。

ただまともな状況で私がいなくなったら、逃げたと思われて村人を殺すとか言い始めるだろう。

あれは私がいる居ないに関わらず「見せしめだ!!」とかなんとか言って殺すのは確実にやる。

そんな中考えついたのは、まともじゃないと思われればいいのだと閃いた。

これはこちらにきてから半年ぐらいの時だ。

憔悴していたのは本当、しんどかったのも本当。ご飯が喉を通らなかったのも本当。

これを利用しようと考えた。

監視の目を盗んでの作業は簡単だった。

こんだけの状況であるからして、監視の目も緩みつつあったからだ。

しんどい体で掘っ建て小屋の地下を必死に掘った。

人1人が最小限暮らせるぐらいの範囲は必要だった。

人1人が暮らせる範囲を掘り終わったら、そこに明かりや生活で必要なものを監視の目を盗んで最低限搬入した。

食料問題は、腰の巾着で生まれてくる豆で最悪どうにかなることを考えると気は少し楽だった。

監視には、点滴や憔悴している様をまざまざと見せつけ、反抗する気力や体力はもうないことをアピールし、たまに奇声を上げて狂乱している状況なども印象付けた。

最後の仕上げとして、薬の実験をすると監視に言いつけ、島から捕まえてきたとカゴに囚われた猿をインディゴの保管しているものから持ってきてもらった。

一年の時をかけて、ついに計画を実行に移した。
長かった。
本当に長かった。
監視には、ダフトグリーンの研究をインディゴより仰せ使っている。
毒薬を扱うため、外に出ていることを推奨すると言ったら自分の身も大事なのだろう。外で待っているから、終わったら声をかけるようにと外に出ていった。
私は地下に自分で掘った穴を隠している床板を外し、もらってきていた猿のうち、自分の身長に近い猿を部屋に解き放つ。
そして、今できる中での最大限のエレクトロを部屋に放った。
木製の掘っ建て小屋である我が家は、エレクトロでの電熱で盛大に燃え上がっていく。
外から「おい!!何をしている!!」と流石に火の手が上がっている家に入る気はないのか、遠巻きに声が聞こえる。
「もう私はここで生きたくないの!!!あなたも死にたくなかったら離れることね。ダフトグリーンも広がっていくわよ。」
声をかけると、ヒィイ!!と怯えながら離れていく監視の足音を聞き、私は地下へと潜った。
火の手は、小屋を焼き尽くす程度には上がっていたことも確認し、猿は逃げられないように足を縛っておいてある。

上が燃えている以上、穴の中に飛び火しても怖いため、穴の入り口を一時的に塞いだ。
酸素の兼ね合いもあるため、燃え終える頃にはもう一度穴を開ける予定である。

ここで重要なのが、表面上は燃えている小屋と人型の死骸で私だと考えるか否かであるが、結局半年を超えてから憔悴している私を確認するためにわざわざシキや幹部が出向いてくることはなく、海賊の兵士ごときが医術の知識なんて持っているはずもない。

大丈夫だろうと踏んでいた。

入口付近で外の音に耳をしばらく澄ませていると、外からの音が聞こえるようになってくる。

小屋も燃え終わり、監視やその他の兵士たちの会話が聞こえた。

「おい、あいつは本当に死んだのかよ。」

「だろうよ。触りたくねえけどそこに死骸があるだろう。半年ぐらい、飯も食わねえし気味の悪い顔しながら、わけわかんねえこと叫んでたし。死んでくれて助かったわ。」

言い残すと、さして確認することもなく足音は遠ざかっていく。

そこで一旦、外の空気を取り込むために入口をもう一度開けた。

これで一旦だが、私は死んだことになってくれると思う。

むしろそうなってくれと願いを込め、穴の中に戻る。

現在で遠くに逃げて仕舞えばどれだけよかったのだろうかと思うが、今の貧弱な体じゃさして遠くまで行けずに息切れや下手したら気絶してもおかしくない。

ここで失敗すれば一生買い殺されてしまいだろう。

また村人の恨みも相当買っている故に、村人に遭遇することも望ましくない。

計画の当初としては、穴の中で筋力や能力をできる限り戻すことを目標にしていた。

どんなに体をいじめ抜いても、仙豆を食えば治る。

仙豆半分でもある程度の回復は見込める。

1日に1個生まれる。

仙豆は2週間程度で腐ってしまうようで、14個のストックまでだがストックもある。

これで急ピッチで肉体改造に励むこととしていた。

心配なのがスーロン化薬はこっそり作る以上、2個が限界だったこと。

２回までしか変身できないことだ。
満月であれば限りではないが。

ここからの日常は、筋トレと足音がしたら静かに過ごす、穴を埋めるとの工程の繰り返しだった。
考えていた通り、頭のおかしい死にかけのやつを確認するぐらい暇ではないらしく、幹部一向が現れることはなかったことや小屋の廃材もそのまま片付けられることもなかった。

地下での暮らしがほとんどで、穴からこぼれる光を頼りに日数を数える限りは1ヶ月程度は繰り返していただろうか。
急ピッチで進めた肉体改造は以前の状況までとはいかないものの、ある程度まで戻すことに成功した。
やはり絶望した日常や自由に動けない日常ではなく、目標が見えてくると人間動くことのできる動物だと実感した。
急ピッチで進めたため、ストックの仙豆は食べきってしまって満腹感は抜けないものの、体は軽くなった。
日が暮れるのを確認し、穴から島の森へと全速力で移動した。
またエレクトロなんて目立つものは使えないが、邸宅の端に位置していることもあり、別に障害になるものもあるわけでもなく、ミンクの本来の身体能力や浮遊能力を持つ私としては、柵も障害になり得ず、悠々と森へと行き着いたのであった。

計画の第二段階としては、他の島に移ることである。
この島の浮遊の状況は、シキが就寝する時は流石に能力を発動し続けるのは難しいのか、海へと下が着水するのだ。
海軍対策なのか、着水する位置は毎度違う風景であったが、近くに島があることも多々ある。
これは根気強く待つ必要があった。
ただでさえグランドラインとかいうよくわからない海で、遭難して

死ぬなんて状況は避けたかった。
ただ数日の間、森の獣を追い払いながら待っているとようやく近くに島の見えるところに、着水をする日が訪れた。
島の方角や距離を確認し、さっさと島の海岸まで移動し、浮遊で島を脱出した。
一年という助けも来ず、希望の薄いメルヴィユから、やっとの思いで脱出したのである。

間話　日常

フェンがいなくなって1週間。
ベルメールは、いつもの日常を過ごしていた。
朝は庭のみかん畑に赴き、枝葉の剪定を行い、実になって熟しているものをカゴに積んでいく。
軽く水を撒き、収穫したみかんを持って帰る。
終わったら、少し離れてるフェンの家へと行き牛の餌やりと、家の裏でのじゃがいもの収穫。
終わる頃にはお昼も過ぎる頃の時間になるため、家に帰ってナミやノジコのご飯を作り海軍で学んできた勉強をできる限りナミとノジコへ教えていく。
文字の練習や、ナミは航海術に興味を持ってきているため一緒に海図を作ったり。
ノジコは医術に興味を持っているため、本を読んで学んだり。

航海術に関しては、理由は知らないがフェンが山ほど家に航海術の教本を置いて行ったために買わなくても充実しているし、医術関連の本はフェンの家に置いてあるため、軽く拝借してきたものである。
「ナミ。ノジコ!!ご飯にするよ!!」
「はーい!!」
いつもの通り、みんなでご飯を食べ。
終わったら、気持ちのいい天気であれば散歩や乳搾りに向かったり天気が悪ければ家で勉強である。
ベルメールの日常は、あれからの日常も変わることなく過ごしていた。

「・・・・・ぅぉぇ!!」
最近はご飯が喉を通過してくれない。胃が受け付けなくなってるなぁ。
こんな姿、ナミやノジコに見せられるわけがないから外に出てきて

おいてよかった。
日課のタバコを吸ってくると、子どもたちにはご飯を食べてなさいと言って家から出てきていた。
ノジコなんか、医術書を読んでいるからか人の顔色で「大丈夫？」と心配してくるようになってきているから、化粧も少し厚塗りしないといけない。

ゲンさんなんてアタシがいくら美人だっていったって、ずっと見てくるのは流石に気持ち悪いから
「アタシに惚れたの？まぁ、アタシぐらいの美人はそうそういないもの。けど、見過ぎは気持ち悪いからやめといた方が良いわよ！」
と言ってやったら、「そんなわけあるか!!」と怒られた。
フェンがいつ帰ってきても良いように、フェンの家の中の掃除も欠かせないし。
ナミやノジコも綺麗好きだから、夜になったらフェンの家のお風呂を使ってみんなで風呂に入って綺麗にして寝る。
アタシの1日のスケジュールだ。
あとは空いた時間で簡単な自己鍛錬をするぐらいか。
1週間も経つと慣れてくるわけで、フェンがいない日常も大変忙しい。
「なに沈んだ顔してるのよ。ベルに暗い顔は似合わないわよ？」
フェンがいたら、きっとそう言われるだろうなぁ。
アタシはどっちかというと後先考えないで行動しちゃうから、フェンに師事していたときも、仲良く話すようになってからもフェンには頼りっきりだったような気がする。
何歩か後ろに下がって、私が取りこぼしそうなものとか失敗しそうな事とかをカバーしてくれるのがフェンはずっと上手かった。
それに面倒見も良くて、すっかりアタシはフェンに甘えてしまうことが多かったと思う。
それでも、嫌な顔や「面倒くさい」とかっていうけど、やってくれてたのよね。

アタシがナミやノジコを引き取ってきて、衰弱しているナミを見せたときだって誰よりも真剣にナミの看病につきっきりで見ていてくれて。
育てるって言ったときだって、ゲンさんには「不良娘が子育てなんてできるわけがあるか!!」って反対されたのに、フェンだけは「ベルなら大丈夫だよ。私ならベルみたいなお母さんいたら嬉しいし、自慢よ!」って考えるでもなく、返答が返ってきた時は、私がお母さんになるっていうのをわかっているみたいだったわ。
あの子はたまに、未来のことなのに知ってる風に話してくるところがあるし、当たるから怖いのよね。

ご飯が喉を通らない時には、じゃがいもとかみかんをすり潰して、飲むか牛乳をいっぱい飲むかで栄養を補給するようにしている。
「ご飯は食べなさい!!ベルには強くなってもらわなきゃダメなの。私がいなくてもある程度戦えるようにするからね!」
フェンには食べることの重要さとか、健康に悪いからタバコは控えろとか口うるさく言われたっけ。
タバコがないと落ち着かないし、イライラすることもあるけど。
ナミやノジコも大きくなってきたし、真似されると子供の健康に良くないって怒られたから、タバコもやめ時か。
寂しくなるね。

「・・・・・こんなところで寝るな。ちゃんとうちに返って寝なさい、ベルメール。」
疲れていたのだろうか。
気づくと、フェンの家の椅子に腰掛け、テーブルに突っ伏す様な体制で寝ていた様だった。
声の方向に目を向けると、辺りは暗く日は落ち、ゲンゾウがランプを持って佇んでいた。
「・・・ノジコがナミを寝かせた後に、お前が帰ってこないと私のとこ

ろに来てな。ノジコも心配しておったぞ。」
「ノジコも最近、アタシのこと心配するようになっちゃって。子どもに親の心配は早いって怒ったのよ。」
暗闇でゲンさんの顔も陰ってしまっているけど、ゲンさんにも心配かけちゃってるかな。
声色はいつもより落ち着いて、言葉を選んで話している感じがする。
「ちゃんと寝れているのか。」
「今だって寝てたじゃない。それに、アタシの肌はツヤツヤよ？こんなに綺麗な母親はアタシぐらいのもんよ！」
アタシは元気だってば。
普段の通りに生活しているだけだし、どこが気になるっていうの。
「・茶化すな、ベルメール。お前のことを小さい時から知ってる私に、目の下のクマも気づかんと思うか。体重も落ちてきているのだって、目に見えてわかるぐらいになってきているな。」
「やだ、ゲンさん!!そんなにアタシのことが好きだって??」
「ふざけるな、ベルメール!!私は真剣に話しているんだぞ!!!」
話すゲンさんの顔が見えると、その表情は心配しているような、悲しんでいるような。
いろいろな気持ちが混ざり合ったような複雑な表情をしていた。
なんでゲンさんが辛そうな顔してんのよ。
柄じゃないでしょう、ゲンさんだったら「子どもに心配かけるなんて親失格だ!!私が育てる!!」でしょ？
「・・ベルメール。私は村のみんなを、仲間であって家族であると考えているよ。」
「無論、お前も小さい頃から知っているしお転婆なじゃじゃ馬だった頃も知っている。私の顔を見て、小さいお前は、赤子の時のナミの様に泣きべそを掻いている頃も知っている。」
「何よ、いきなり。」
私が小さい頃から、ゲンさんは今のまま若くしたような見た目でめちゃくちゃ怖かった気もするわ。

若い時と、今だと別の怖さもある気がするけど。
「お前がどれだけ慕っていたのかは、どれだけ家族のように思っていたか。見ていれば分かる。」
「・・・私では頼りにならないか。お前が辛い時に泣かせてあげることもできないぐらい、私は頼りないかベルメール。」

やめてよ。
泣きたくないの。
「私には、きっとわかってやれないところもあるのかもしれん。全部理解してやることもできないだろう。ただ、お前は村のみんなで育てて来た私の子どもみたいなもんだった。」
私は幸せなの。
フェンが守ってくれたナミとノジコを目一杯可愛がってあげられる日常がしあわせでいっぱいだから。
「なぜ言わん。お前を私たちの娘だと思っているのは、私らだけか？」
そんなわけないじゃん。
ゲンさんだって、いっつもアタシの無理を聞いてくれる父親みたいだって思ってる。
「・・・・だって!!フェンは、アタシたちのためにいなくなったの!!」
「アタシだってわかってた。ここにきたあいつには、フェン以外じゃ相手にならないのだって。もしかしたらフェン1人だったら、逃れたのかもしれないことだって!!!」
「けど、フェンは大人しくついていったの。そんな中でフェンが守ってくれた日常で!!しあわせじゃないなんて、言えるわけないじゃない!!」
我慢していたつもりはなかったのに。
目からはボロボロと、こぼれ落ちてくる。
「私はナミとノジコを任されたの!!それに、ゲンさんも聞いていたでしょ!!海軍に連絡した時に、あの男は神出鬼没で探し出すのは至難の業だって。海軍総出で探しても、見つかるか否か不明だって!!」
泣きたくなかったの。

ナミやノジコに泣いた後なんて見られたら、心配かけちゃうじゃない。
フェンにせっかく守ってもらった幸せが、幸せじゃなくなっちゃうじゃない。
「どうしろっていうのよ!!絶対失いたくない家族だったの。いっぱい教えてもらって、いっぱい助けてもらって。恩返しだって、何も出来てないの。大切な家族なのよ。」
「あの子が辛い目にあっているよねって。耐えているよねって、思うだけで何も出来ないのよ!!自分が情けなくて、不甲斐なくて。」
「・・・・・・・・・フェンに会いたい。また笑ってみんなでご飯食べたいの。なんでよ、なんで置いていったのよ!!」
悔しくて、辛くて。
拳を握りしめすぎたのか、爪がつい込んだ掌からは血が滲み出していた。
そんな中、ふわりと頭ごとゲンさんの腕に包まれる。
「私らがもっと戦えたらと。こんなに後悔したことはない。お前にこんなに背負わせてすまんな。」
「今日はまず家に戻ろう。明日から、またフェンちゃんを探す方法を考えよう。」

海軍には捜索の依頼はかけている。
海軍内部でも、フェンが海兵たちを鍛え始めてより１０年もこえる期間ともなると相当な数の教え子がいると話していた。
その教え子の子たちは、転属や配置換えなどもあり、イーストブルーだけではなく各地にその輪は広まっているらしい。
いろいろな場所でのシキ捜索の伝は回っており、中には辞職願まで持参して捜索活動に乗り出そうとしている方もいるとココヤシ村によっていったガープ中将が言っていた。
またシェルズタウン支部や、海軍１６支部はさらにひどく、将校階

級の者達が総出で説得に当たっているとも言っていた。
暴動を抑えるといった意味合いもあり、ここにくる前はシェルズタウンにも寄って来たそうである。
「インペルダウンからの脱獄はオレらの落ち度だ。オレの教え子までも!!腸が煮え繰り返っておるわ!!」
ガープ中将も報告当日に、こっちに向かってくれようとしたとボガードさんから聞いた。
ただガープ中将が動くとシキに勘付かれて先に逃られてしまえばどうしようもなくなってしまうとセンゴク大将に止められたらしい。
また私もフェン捜索に加わりたいと話したところ、船旅の時にどれだけ子供のことを大切に思っていたかや、アタシのことを信頼しているか山のように聞かされたと言っており、海軍で責任を持って捜索するからフェンが帰ってくる場所を守ってほしいと説明を受けた。

村のみんなも、ゲンさんも。
海軍の人たちだって、こんなに大切に思ってくれてるんだよ。
絶対帰ってこないと許さないからね。

脱出!!!

トスっ・・・・

やっとの思いで隣の島へと降り立ち、新たな地面の感触を踏み締める。

「・・・・いよっしゃあああああああ!!!!!やっと逃げ延びたわよ!!!!!あんのクソみたいな島でのたれ死んでたまるかってのの!!!!!!!!!!」

不眠不休で島の外を監視して、数日。

寝てる間に島が見えようもんなら、後悔が残ると寝ずの番を続けていたもんだから、いくら体調をある程度まで整えたといっても足はふらつくし目の下なんて深い堀のようなクマだってできて居ることだろう。

だが、そんなことよりも喜びの気持ちで今はいっぱいだった。

ひとしきり喜びを噛み締めたあと不時着した海岸から島の風景が目に入るも、そこから見えるのは深い森と遠方に小さく城のような風貌の建物。

遠くに小さく見えるだけではあるものの、朽ち果てて居るような箇所もなく、手入れされている建物のように見える。

ちょっと、流石に疲れたわね。

精神的な緊張やストレス。

不眠で数日過ごしていたこともあり、身体もボロボロ。

綺麗に整えてきた尻尾や耳の毛並みもひどくバサバサである。

この状態じゃ、そこらの野良犬にだって負けそうよ。

自分の状態を確認し、自嘲するかのように息を吐くと意識を切り替える。

今この場で倒れようものなら、遭遇する人によってはいい奴隷にされて飼い慣らされるのが関の山。
そうじゃなくとも、海軍に通報されようものなら私の存在が知れ渡りココヤシ村の危機に陥る可能性もある。

どっちにしろ、ここでへばって倒れて居る場合ではない状況だ。
少しでも気を抜けば、倒れてしまいそうな体に鞭を打ち今後の内容を考える。

食料問題は、正直なところ1日に一粒仙豆が沸いてくるのだからなんとでもなる。
問題は身体を休める場所の確保と、可能であれば自身のトレーニングも行っていきたい。
以前はガープがいたために、望んではいなかったものの訓練の相手には苦労しなかった。
無論、その技術やアドバイスも的確なこともあって順調に成長できていたと思う。

だが今後はそういうわけにも行かない。
私自身がシキを圧倒できるようにならないと、ココヤシ村の危機は結局変わらないし、それまで海軍に頼るわけにも知られるわけにも行かない。
よって海軍には頼ることは難しい。

そうなるとグランドラインで海賊の相手が濃厚よね。
幸いではあるが、見聞色にエレクトロの能力、持ち前の身体能力。
武術に、拳一個分の武装色。
拳一個分は生命の危機に瀕しても変わらないものね。
これだけ揃って、ガープにも新世界でもやっていける的な発言も

あったことから考えれば、ある程度戦ってはいけるだろう。
問題は、どうやって顔を隠すのかも課題になってくるのだが大まかな今後の計画はこんなところか。

・・・・・・・っのへんか・・・・
考えに耽っていると、前方に見える森から声が聞こえてくる。
見られてたかな、私が降りてくるの。今の状況で戦うのは勘弁してほしいのだけれど。
頼みの仙豆はここ数日の強行軍で使い切ってストックもなし。
自身の身体はボロボロ。
そんな中での戦闘は御免被りたいところである。

海岸から離れ、森の入り口付近にある茂みに身を隠して声のする方向から距離を取る。
しばらく息を潜めて待つと、数人の女の子が茂みから姿を現した。
「この辺に誰か降ってきたと思ったんだけどなぁ。」
「カームベルトの真ん中にあるこの島に人が降ってくるわけがないだろう。言ったとおりじゃないか。」

出てきたのは、胸と下半身を腰巻き、背にはマントのような厚地の布を巻いた女の子3人組だった。
1人は黄色っぽい髪のボブヘアーの女の子。
1人はさっきの服装に、ヘルメットのような帽子を被り明らかに背丈が私の2倍くらいはありそうな長身の女の子。
そして丸顔の子の3人組である。
揃ってマントの裏には、長弓の弓や剣などの武器を背負っていた。

見た目からは戦士よりも狩人の方が合いそうな見た目である。
野性の獣を相手にして居るからなのか、戦士なのか佇まいにはあまり隙がなく現場から動けばきっと気づかれてしまうだろうことが予想できる。
「訓練サボったと思われるわね、きっと。」
「そうなったら、あなたのせい。私たちはついてきただけだしな。」
「そんなぁ!!確かにこの辺に誰か見えたと思ったんだけど。」
長身の彼女が、私をいち早く見つけたらしいがどうやら他の島民にはバレていない可能性が高いようである。
「さっさと戻らないと訓練の量が増やされちゃうもの。早くキキョウ様に報告しましょ。こいつの嘘でしたって。」
わちゃわちゃとしながら、森深くへと戻っていく少女たちにほっとひと息をつきながら、見聞色の覇気の範囲を広げ少女たちの動向から帰っていく方向や方角を見定めていくと、この森から数キロ先に複数の生命反応が確認できた。

数キロとはいえ、私のように意識的に見聞色を使われたらバレる。
安心して居る場合じゃないわ。
島から逃亡してきて、また隠遁かと思うと泣きそうになる。
だがひとまず体と精神を休めないことには始まらないし、戦うことすらままならない。
せめて仙豆ができるまで、翌日まではバレずに過ごしたい。

人の気配が離れたことを確認し、海岸より森伝いに距離を取る。
見聞色を使いながらなんて精神を酷使しながらの移動。
今の体力を考えると気が遠くなりそうではあるが、そんなことも言ってられないので気合いを入れ直す。

しばらく歩き不時着した場所からも距離を取り、周りに人がいないことも確認取る頃には当たりはしっかりと暗くなっていた。
島に来た頃が昼頃であったことから、随分と歩いてきたのだろう。
ほっと息を吐き出し、近くの切り株へと腰を下ろす。
風化からか、ただ枯れたのか。事前に幹が折れていた木を手刀で切りそろえた切り株で座り心地も悪くはない。

やっと落ち着いて体を癒せそうね。
流石にクタクタよ。もう足もガタガタだし、ここ1ヶ月身体も洗ってないから匂いも気になるし最悪だわ。
近くには川も流れており、体を清める場所や飲み水にも困らない立地である。
ここまで必死に逃げてきて、また隠遁を強いられる状況やココヤシ村のことを考え、溢れそうになる涙に自身を叱咤する。
「ここまで逃げてきたんだから!!!今までのことや辛さを考えたらあと少しの辛抱よ、フェン!!」
両手で自身の頬に平手を打ち、落ち込みそうな気持ちを立て直す。
仙豆の影響もあり、お腹の空腹感もなく体を休めることに専念できる状況ではあった。
服と体を清めてからスッキリして眠りたいわ。
近くの川へと足を運び、衣服を脱ぎ捨て川へと体をひたす。

その肌は、元々の白い肌は身を潜め、土の色が映ったかの如く茶色の肌に。
バシャバシャと髪を浸しただけで抜け落ちていく髪に。
自身がどれだけ不潔であったのか、思い知らされる。
体を流すためのタオルなんてあるわけもないので、せめてもと着ていた衣服の袖を引きちぎりタオルがわりにと持ってきていた布で肌を擦る。
真っ黒である。

そんな状況に、元々の現代人の記憶が吐き気を催しそうになるが以前の状況が続くよりはよっぽどマシである。
袖のなくなったTシャツと、尻尾の穴の空いたズボンに足を通し、切り株の上へと横になる。
明日はきっと、いい日になるわよ。きっと。

ふと目を覚ます頃には、日もしっかりと登っており眩しさと共に目を覚ましたのだった。

昨日の記憶を辿り、ひとまずはシキの手からは逃げ出せたことを思い出す。
朝になって巾着を確認すると仙豆は一粒生まれていた。
加えて、スーロン化薬も現在は2錠を同じく巾着に入れている。
お腹は一杯のため、今回は仙豆はストックに回していく。
昨日のへたりこんでしまうような、体の疲労感は治り、睡眠を取れたからなのか、この体の回復力なのか前回とはいえないものの普通に快調程度までしっかりと回復していた。

思い返せば、ガープとの訓練の際も割と早い段階で復活していた記憶もあるため、元々の回復能力も身体能力同様に高いのかもしれない。
昨日の擬似タオルを持って、しっかりと体や服を水で洗い、リフレッシュした頭で状況を整理する。
まずは島民と接触。

接触後に、交友関係を作らなくては隠遁生活継続になるのでどうにか交友関係を構築したいところ。
自身の実績は訓練相手か、戦士の育成か。
前回同様武術顧問か。はたまた医師としての売り込みか。
武器を持っていた風貌から、需要はあるのではないかと考えるので、この方法が濃厚。
グランドライン前半であれば、武力行使でと言った考えも浮かぶが、頭から除外する。
そんなことをしてはシキと一緒である。

とりあえず人と接触してから考えましょうか。
これ以上は考えてもしょうがないので、先日の海岸へと戻っていく。
通ってきた道を戻るだけなので、スイスイと戻っていくのだがきた時とは違い疲れが抜けたためかおおよそ半分程度の時間で海岸まで到着した。
到着とともに、森に入り見聞色の覇気を広げ人の気配の多い場所へと歩く。
森とは言いつつも人の通る場所なのであろう、しっかりと草や木を掻き分けてある道があり別段苦労することもなく、集落らしき建物の場所まで辿り着けた。

集落の前では、子供達が元気に駆け回っており、その周りには母親らと思わしき女性たちが見守るように談笑して居るのが目に入る。
ただ不可解なのが、子供達も親も全てが女の子や女性のみで男での姿が一切見えないこと。
加えて、見る限りの人がそれぞれ弓や剣などの武器を常備して居ること。

ここまでくるとあからさまにそうなのだろう。
予想はしていたものの、運がいいとはこのことだろう。
カームベルトにある島で海王類に守られている島。
蛇のついた船か、海王石の船でしか来れない島。
女性のみの島となれば、アマゾンリリーに私は居るのだろう。
となれば、渡りに船である。

海軍で一度あったっきりとはいえ、印象深い会合であったことは言うまでもない。
それに加えて、比較的珍しいミンク族の耳や尻尾のある人間という覚えやすい特徴。
全く記憶にないということはないだろう。
サンダーソニアか、マリーゴールド、ハンコックに連絡さえ取れればこの島にひとまずおいてくれるかもしれない。

そうとなれば、話や希望も見えてくる。
もちろん今の性別は男ではないし、島全土の島民がみな戦士であるこの島であれば訓練相手にも困らない。
それに武術やさらに強くなるための術にも、興味があるのではないかと思う。
これだけ条件が揃って居ることもなかなかないだろう。

となれば、どうやって皇女と渡をつけるかになっていくわけだが。

原作ルフィに関しては、投獄され、処刑での見せ物として闘技場に案内される。
闘技場で弱みを隠してあげることで懐の深さを示し懐柔する。と言った流れだったはず。
であれば、島民に直接会えないかの相談を持ちかけ話が通るようであればよし。通らずに投獄であれば処刑までの闘技場待ちで進むのが、手段として濃厚だろう。

ガバガバなところの多い作戦のような気もするんだけど。これ以上は思いつかないし。
女は度胸よ。ここで引いても、後がないんだから!!

「誰だ??!!」
集落の方に歩いていくと、子どもたちを見守っていた集落の1人が気づき間に手を添える。

よくみると、昨日の海岸に来たボブの女の子だった。
周囲の先ほどまで談笑していた母親と思われる女性たちや集落の人たちも、弓を構えたり、斧をこちらに向けたりと警戒されて居るなぁと観察しながら話しかける。
「驚かせてしまい申し訳ありません。私はフェン。こちらの島にハンコックや、サンダーソニアがいると聞き訪ねて来たのですが、どなたかお分かりになる方はいらっしゃいますでしょうか。」
「皇女殿下のお知り合いというのか、貴様。そのような見窄らしい格好の貴様が皇女殿下の知り合いなわけがなかろう。加えて、貴様のようなものが呼び捨てにして良い方々ではない!!!!」
おいおい、待て待て。
本当の知り合いだったら、どうするつもりなのこの子。
まぁ本当の知り合いなんですけど。
「この格好につきましては、不快な思いをさせてしまったようで。何分、こちらの島へと漂流したものでして。」
「カームベルトを漂流なんて冗談みたいなことがあるか。漂流している間に海王類どもに食われてしまうわ!!」
「まぁ、待て。本当の知り合いだったらどうする。戦士たるもの、冷静にと教えただろう。」

少女の後ろから、別の女性が現れる。

首に蛇を巻きつけた他の女の子と比べても明らかに隙のない女性。戦士長が来たぞとか聞こえるから戦士長さんなんだろう。黄色ボブの女の子を止めに入ってくれた。
「私がグロリオーサ様にお伺い立ててみる。このものの処分や対応はそれからになるだろう。貴様もそれで良いか。」
「はい、ありがとうございます。それまでは如何すればよろしいでしょうか。」
キキョウと呼ばれた女性は顎に手を添え、しばし考えると
「お前たちがこいつを見張れ。少しでも不審な動きをするようなら切ってもかまわん。その場合の責任は私が持つ。良いな。」
「加えて、貴様の処遇は今すぐに状況の判断はできん。よって、しばらくは牢にて拘束させてもらう。夕方までには、戻ってこれるだろうからそれまでは大人しくしておけ。」
そう話すと、キキョウと呼ばれた女性は海岸からも見えた中でも大きな城の方へと走っていった。

「さて、あなたが賊かそうでないかの判断がつかないと適当にあしらうわけにもいかないし。とりあえず牢にいくから大人しく着いて来てくれるかしら。」
ランと呼ばれた女性に連れられて、集落の端にある牢の中へと案内された。
とりあえずは牢屋にいてくれとの話は聞いていたために、大人しく牢屋に入る。
牢屋と言っても、そこまで物々しいものではなく、動物の檻のような牢屋で部屋ではないため中には何もない。
だが武装色や持ち前の身体能力の前ではあんまり意味をなさないような気はするので、本当にいざという時は脱出すること訳ないだろう。
「夕方には戻ると言っていたから、それまでは大人しくしていてね。みる限り、悪い人でもなさそうだし。私たちも変に戦いたくないのよ。」

「そうよ。でもその尻尾と耳柔らかそう。ちょっと触ってもいいかな。」
「別に私はいつでも触ってもらって構わないわよ。それも疑いが晴れてからにはなりそうだけれど。」
瞬間にキラキラとした目に戻る長身の女の子。
そんな姿を見ていると、2年前のサンダーソニアやマリーゴールド。ナミやノジコもこの尻尾で気持ちよさそうにしてた記憶が蘇り、ナーバスになりそうになる。

ナミやノジコ、ベルは無事に暮らして居るかな。
思い返せば何か泣くようなことがあったり、寝れなかったりするたびに尻尾でナミもノジコもあやしてきた。
寝れてるかな。
ベルも家事1人でできてるかな。1人じゃちゃんとしたご飯作れなさそうね、ベル。
ゲンさんも居るから大丈夫よね、きっと。

考えればキリがないことも、会いたくなることもこの1年で痛いほど知っている。
泣きたくなることや、今にも会いにいきたい気持ちを押し込め、改めて尻尾を見る。
川で体を洗ってから少しはまともになった物の、ブラッシングも手櫛のみ。
体を洗うものも無しでは、毛は抜けるはバッサバサだわでひどい手触りである。
これでは、ナミもノジコも認めてはくれないだろう。

仙豆が食べれるようになったら、ここも少し綺麗になるため満腹感の治る10日程度の我慢である。
最近は豆ばっかりの生活で飽きて来たところもあり、まともな食事も取れるようにしていきたい。

ともあれ、牢に放り込まれ警戒心バリバリの女の子が見張って居る以上、下手な動きを見せるわけにもいかないし牢屋には別段変わったものがあるわけでもない。
あるとすれば、天井からぶら下がっている腕の拘束具ぐらい。
今回は一旦の投獄といった状況からか腕の拘束はされず、投獄されるだけで過ごしている。
ここでハンコックや姉妹との連絡がうまくいかなかった場合の状況などを検討しながら、時間が過ぎていくのを待った。

見張は交代制なのか、持ち回りで人が交代していく。
その中では、「あんたみたいなのが皇女様と関わりがあるわけなんて、おかしいわよね。」なんて嘲笑まじりに話してくる監視役もいたが、返答もないのに失礼に当たる可能性を考慮しないのだろうかと心配になる。
その度に好奇心旺盛な子もいるみたいで、尻尾や耳を興味深そうにみる人もいるのだが、牢屋中まではいるわけにもいかないのであろう。残念そうに交代していくのだった。
何人目かの交代を見送り、まだかと戦士長を待っていると牢の前に長身の女の子がやってきた。

「あなたは何でこの島にやってきたの？奴隷を捕まえになんてたまに来る人はいるけど、そんな感じにも見えないし。」
尻尾を触りたいといったり、牢の中の私に話しかけたりとこの子は警戒心が薄いのか。
それとも興味があるだけなのか。何にせよ、少しでも会話で不安が紛れるのは有り難かった。
いくら非加盟国であるとはいえ、海軍に連絡なんてつけられては困るため海軍での話は避けてココヤシ村での生活や、シキという海賊に

拉致されたこと。
　そこから逃げて来たことを語った。
「そうだったのね。昨日、大きな島がここのすぐ近くに現れたなんて話が仲間内でも出ていたの。そんなことあるわけないってみんなで笑っていたんだけど。きっとその時よね？」
「私は飛んで移動できる能力を持って居るから、その時に島から逃げてきたわ。それでたどり着いたのがこの島だったのよ。」
　話終わる頃には、すっかり周囲の日も落ち始め戦士長が戻ってきた。

「フェン殿、大変な失礼をいたしましたことお許しください。みな、よく聞け!!!こちらのフェン殿は、確かにハンコック皇女殿下と面識があると回答があった!!!」
　みんなの表情は驚愕である。
　まさかこんな見窄らしい格好の女の子が、といった心境が表情に現れている。
　まぁ昨日よりマシになったとはいえ、髪も体もボロボロの見た目ではしょうがない気持ちもある。
　それでも決めつけられるのにはいい気持ちはしないが。
「このまま可能であれば、宮殿に来て欲しいとの言伝もいただいている。フェン殿、いかがだろうか。」
「いきましょう。私もハンコック様に会いたいもの。」
　ただこの格好で会えたものだろうか。心持、服も私自身も匂うような気はするし、服もボロボロ。
　少なからず皇女に謁見する格好ではない。
　何よりも過去あった時から、私が変わり過ぎて恥ずかしいまである。
「ちゃんと湯浴みの用意や、フェン殿にあう服は用意するように準備してありますのでご安心を。」
　自身の匂いを嗅ぎ不安そうにして居るのが、見てとれたのだろう。

戦士長さんから、ふふっと笑う声と共に説明してくれた。

「では、いきましょう。マリーゴールド様やサンダーソニア様もお待ちです。あまり待たせると、私が怒られてしまいますから。」

お会いするまで

宮殿なのか、城なのか。
戦士長さんに案内されるまま、建物の中に入ってきたものの宮殿作法みたいなものは全くわからないのだが大丈夫なのだろうか。
「そんなに不安な顔をされなくても大丈夫ですよ。」
ふふっと可愛らしいものを見る目で、微笑まれる。
この人は私のことをいくつだと思って居るのだろう。
確かに身長や胸の成長は幼少期より止まっているが、年齢の判定は胸の成長具合なのだろうか。

「グロリオーサ様より、ハンコック様が連れてくるようにと話していたと聞いております。私個人としてもあなたの話はハンコック様やサンダーソニア様、皆様より伺っております故に丁粗雑な扱いをしたとあっては怒られてしまいますからな。」
快活に笑う戦士長に拳骨ジジイが煎餅を食いながら、笑っている様と重なる。
戦士や戦うものって感じで、気持ちいい豪快な笑い方である。宝塚だろうか。
イケメンは何をしていても様になるとはこのことだろう。
ここアマゾンリリーでの女性の美しさは、この世界でも屈指の美しさであると考えている。
見てきた女性は、男装の麗人のような美しさや、筋肉美、また可愛らしい風貌な女の子。
「それでは、今後の予定を先にお伝えを。まずは、流石に漂流された後のそのままでお会いするのではお互い落ち着かなくなってしまいますから、湯浴みと洋服のご用意を済ませておりますのでそちらから案内いたします。その後に、現皇帝様やハンコック様にお会いできるようにグロリオーサ様が取り計らってくださいましたので、整いましたら近くに給仕を待機させておきますのでお声がけください。」

「わかりました。戦士長さんはどちらかに行かれるのかしら？」
「私は警備の長ですから。現場を多少離れたところで問題はないように訓練はしておりますが、現場に戻ろうと思います。フェン様と剣を交えたいと思っていたのに、このまま戻ってしまいますこと非常に残念でなりませんが。」
　戦士長の顔には、獲物を逃したかのように残念な表情が浮かんでいる。
「お強いのでしょう？私の部下では相手にならないような武人でいらっしゃるとお見受けしておりました。私も最近は訓練の相手に困って起きておりましてな。誠に残念。まぁ、島にいる以上、またお会いすることもあるでしょうから楽しみにしておきます。」
　最初に話した時の眉間に皺のよった警戒するような怖い表情とは打って変わり、終始、笑って居る戦士長を見てほっとする。
　きっとグロリオーサ様なのか、ハンコックなのか。
　きっと悪い話ではなく、いい方向で話が通って居るのだろうと対応を見て察することができる。
「私なんてそんなに強くないですよ。世の中には、もっと恐くて強い人なんていっぱい居るのですから。」
　記憶に蘇るは、ジハハと笑う強者特有のオーラに狡猾そうな顔。
　あいつを倒さない限り、私の不安も平穏な日常も戻ってこないのだから今世も糞食らえである。
「では、後の対応や湯浴みの場所などは給仕に任せております。スイレン、あとは任せるぞ。しっかりな。」
　戦士長の脇に、いつの間にか控えていた女性に気づく。
　年は２０に満たないぐらいであろう若い女の子である。
　髪は深い青みがかった髪。
　ロイアルブルーや群青色といった綺麗な青。
　合わせるように、瞳にも青色の瞳。
　またこの島で見てきた女の子たちは、健康的な肉体美で戦士といった風貌の子たちばっかりだったものの、この女の子は色も白く線も細い。

髪の長さは肩にかかるくらいといったところだろうか
「はい、承りました。今後の身の回りのお世話を賜っておりますので、何なりとお申し付けください。」
「では私はここで一旦失礼させていただきます。フェン共もまた。」
声をかけると戦士長は来た道を戻って行った。
こんな綺麗な給仕さんと2人きりで、私、別に話すのが上手いわけでもないのにどうしようかしら。
「私、ここに来たばかりで何もわからない状況なの。作法とか含めてご迷惑おかけするかもしれないのだけど、大丈夫かしら。」
「その点はご安心ください。アマゾンリリーでの作法も特段特殊なものはございません。加えて、ハンコック様や高貴な方々よりも、フェン様にはお世話になった。失礼のないようにと言われておりますので、お気になさらず自由にしていただければと思います。」
ほっと安心のひと息をつき、自分の体を改めて確認する。
昨日、川で身を清めたとはいえ、防空壕か洞窟ばりの洞穴で長期間過ごした身であるから、いまだに落としきれない汚れもあるし、自身の嗅覚が人間の頃と比べて敏感になっており、多少匂うことにも不快感がある。
戦士長やスイレンと呼ばれた少女が気にしている様もないため、この国では別段気にすることもない程度なのか、匂わないのかはわからないが、さっさと湯浴みをして綺麗になりたいところである。
「湯浴みの準備はできております。もしよろしければこのままご案内いたしますが、如何いたしますか？」
「じゃあ、お願いしてもいいかしら。」
宮殿の内部は非常に広く浴室まで行くまでもずいぶん歩くことになるらしい。
浴室や身を清めるといった方法や内容は、ずいぶん前に外海より仕入れていたとのこと。
このアマゾンや部族みたいな風貌でも女の子。
浴室や浴槽は一般的であるといっていた。
浴室まで向かって居る道のりも、もちろん案内してもらったのだ

が、何を話しても何の会話をしてもスイレンの表情。
流石に初対面の人と話しても楽しくなんてないわよね、と少し申し訳なさを抱きながら、会話を続けていると
「私の表情が変わらないのは、お気になさらずいただければ。フェン様、そろそろ浴場に着きます。外海には自身の身体を自身で清める風潮があると聞いておりましたが、お供は如何いたしますでしょうか。」
「私も浴場までのお供は流石にいらないわ。終わったらどなたかに声をかければいいのかしら？」
「フェン様が終わりますまで、こちらで待っておりますのでご安心ください。ごゆっくりお寛ぎくださいませ。」
浴場に入ると、浴場の広さは流石に宮殿というところだろうか。
現代の温泉の大浴場よりもさらに広く、こんな広い風呂場で一体何人一緒に入ることを想定して居るのだろうかと疑問の残るレベルでの広さだ。
また湯口には合成な装飾も施されており、ここが知り合いの家ではなく皇帝の家であるということを改めて認識させられる。
原作を知ってて、覚えてて。
かわいいお気に入りのキャラとかいう適当な理由で助けたのに。なんかごめんね。
石鹸や洗髪剤なども事前にスイレンより受け取っており、湯船に浸かる前にギシギシの髪や毛並み、汚れた身体を丁寧に洗っていく。
流石に一年分の汚れが一度に落ちるとも、一回で綺麗に潤うとも思わないがやはり気持ちのいいものだ。
ただ、身体を洗った後の水は茶色く、どれほど汚れていたのかが現れていた。
汚れも落とし終わり、そろそろ湯船に浸かりゆっくりするかと、ふと湯船の方向に目を向けると、小さい人影らしきものが目に入る。
入った時には、浴槽に人影なんていなかったような???
気づかなかっただけなのかもしれないわね。
確かに身体を綺麗にしたいの一心で入ってきたために、他に目を配る余裕はなかったかもしれない。

考えれば、ここの浴場に入浴して居る以上、高貴な方かはたまたここで働いている人間か。
「あれ、余以外に入ってくるなんて珍しい。誰かわからないけど、一緒に入ろう!!」
目に入ってくるのは、真紅の赤色の髪にこの世界特有のグラマラスで豊満な身体。
身長も私の１５５を優に超える身長。
通常のサイズ感の男性よりもさらに大きく、並べたとすれば私の頭がおおよそバストぐらいの高身長女子であった。
またその体には多くの傷跡があり、一体どんな戦場や戦いをしてきて居るのかを体で物語って居るようだった。
「あまりジロジロ見ないで。恥ずかしいじゃないか。」
湯けむりから近くに寄ってくると、その身長だけではなく、明らかな武人特有のオーラに少し気圧されそうになる。
「ここでは初めて見る顔だね。余を暗殺にでもきたっていうなら、自分も裸になんてなる必要がないし、なっていたとしたらただのバカ。それに、その尻尾といい耳といいミンクの子なんて珍しい子を暗殺に使うとも思えない。」
ジロジロと裸で周りを回りながら、考察をしてくる美女なんてどういう状況なのだろうか。
「黒い耳に黒い尻尾。子供みたいな身長と。聞いていた通りではある。其方がフェンであってる？」
「ええ、確かに私はフェンと申します。」
ニコッと口角を上げると、嬉しそうにバンっバンっと背中を叩いてくる。
めっちゃ痛い、痛いってば!!!
「おお!!よくきたね!!こんなに急遽追うことになるなんて思っても見なかったから、風呂に入っていたんだけど!!」
よっぽど豪快な性格なのか、それともこれが日常なのか。
バシバシと叩かれる背中を叩く手を避けるようにシフトする。
「ごめんごめん、痛かったよね。余は現皇帝、名はサクラ。我が娘のハ

ンコックを助けてもらったこと、本当にありがとう!!!後一歩遅ければきっと、取り返しのつかないことになっていたと娘たちから聞いているよ。間一髪だったって。助けてもらったことや、話は聞いていたんだけど、公にしたくなさそうだって聞いてモヤモヤしていたんだ!!!」

背中をさすりながら、話を反芻する。

めっちゃ叩いてくるから、背中真っ赤になって居るじゃないもう!!!

ハンコックが娘って言ったわよね。娘????

娘だって。サンダーソニアも、マリーゴールドも??

現皇帝って言ってたよね。

少しずつ冷えてくる背筋に、青ざめていく顔。

血の気が引くとはこのことかもしれない。

ただ、今更裸であってしまって居るのだから、どうしようもないと開き直るしかないと言い聞かせて気持ちを落ち着かせる。

「驚かせるつもりはなかったんだ。其方がここにくると聞いて、いてもたってもいられなくて浴場で待っていた。本当にありがとうだけはしっかりと伝えたくて。」

精神的には開き直ったからか、話を聞く余裕も周りの状況も理解できるようになってきた。

耳からは外で皇帝様がいなくなったぞ、探せ!!などの喧騒が耳に入る。

「こっそりと抜け出したんだけど。やっぱりバレるよね。娘の将来を救ってくれたこと、1人の親として心からの感謝を。また、この後しっかりと面会の時間は確保してあるから、その時また会おうね!!!」

女性は、皇帝とは思えないほどしっかりと親として、頭を下げて去っていった。

皇帝っていうか、気のいいママ友みたいな感じの人だなぁなんて、緊張していたとは思えない感想を抱きながら改めて湯船に浸かる。

現皇帝が公の場で頭を下げることなんてできないから、きっと浴場にいたんだろうな。

そう思うと裸で会うなんて強行に踏み切れる豪胆さと、踏み切る要

因や一端になって居るだろう、自分の実力への自信。
そりゃあ、オーラも出るよなぁ。
久々に浸る湯船に、しばらく我を忘れるような気持ちよさを感じながらここの底からあの時の選択をしてよかったと安心した。
あれだけ安心した親の顔と、過去のハンコックたちの安堵した顔。
それだけでも助かってよかったと思える。
言っても、私は告げ口をした程度でそこまで大それたことはしていないために、後で訂正しておこうと思う。
そういえば、あの時にセンゴクさんが協力してくれたのは、ガープからの強い推薦があったからだと話していた。
海軍での人望も熱く、また勤務経験やその人柄ゆえの顔も広い。
自由な性格から、行動に歯止めが効かないのは玉に瑕だが、経歴も大きな意味を持つものも多い。
そんな煎餅ジジイが太鼓判を押す人材で、海軍内部での密かな人望や実績を残し始めている私を取り込みたかったそうだ。
それは世界貴族との関係と天秤にかけても、自分自身で動かせるコマとなると、のちのことを考えた時に取り込んでおいて損はないと考えていたとのこと。
まぁ、断ってしまったので気分は悪いがそれでも過去鍛えてきた人材は、シキの船にいても時折聞こえてきており、教え子たちもしっかりとやって居るらしい。

長風呂をしてしまったと火照る体に気づき、風呂から出て、脱衣所でしっとりと濡れてしまった耳や髪、尻尾の水分を拭き取る。
アマゾンリリーでの気候や温度が非常に高いために、ある程度水分を拭き取っておけば、後ほどしっかり乾いていくのは昨日の川で確認済みである。

「スイレンさん、お待たせしたわ。服はあったものに袖を通したのだけれどよかったのかしら。」
「はい、フェン様用にご用意した衣服ですので。流石にミンク用の服

のご用意はございませんでしたので、即席でのご用意でしたが違和感はございませんでしょうか。」
用意されていた服は、戦士たちの着ているビキニ型の衣服ではなく、和服の羽織のような服装であった。
おそらく尻尾のことを考えた時に合う衣服がこれしかなかったのだろう。
こちらの衣服であれば多少の違和感はあれど、服の中に尻尾を仕舞い込むことはできる。
「違和感もなくサイズもピッタリ。怖いくらいだわ。」
「ハンコック様の御了承の上、衣服をお借りして参りました。それではこの後、湯上がりのままではいけませんので私どもでフェン様の身を整えさせていただいた後、現皇帝様とハンコック様がいらっしゃる広間に案内いたします。よろしいでしょうか。」
ハンコックとおんなじ身なりだって。背丈も同じだって、暗にバカにしていたり??
相変わらず全く変わることのない表情に、少し怖さを覚えながら了承する。
了承をすると、どこからともなく給仕が出現し、椅子とテーブルを用意されブレスダイアル式のドライヤーで髪を乾かされ、今までの環境で整えられなかった爪や髪などの身なりを整えられていく。
髪は今までの生活から、腰丈まで伸びていた髪もこれを機にバッサリとショートボブぐらいまで切ってもらった。
尻尾や耳の毛までペットトリマーの方なのだろうか、綺麗に切りそろいて貰い、あっという間に野生味はなくなりこ綺麗な女の子ぐらいまで進化したぐらいである。
恐るべし、給仕。
終わったら終わったで煙のように消えていくのだから前世は忍者か何かだろうか。
見聞色でも感知できない謎スキル、さらに恐るべしである。
「広間には、先先代様のグロリオーサ様、現皇帝のサクラ様、皇女でい

らっしゃるハンコック様、そして姉妹方がお待ちでいらっしゃいます。ご案内いたしますので、前を歩いてもよろしいでしょうか？」
「よろしくお願いするわ。」
流石の宮殿。島国とはいえ、その規模も大きく案内なしに進んで行った時にはいつ着くかわからない。
ましてや迷子になってもおかしくないぐらいである。
「それではご案内いたします。」
先ほど、少し対面したもののほぼ初対面の皇帝に、謎の先先代様。
そしてハンコックと。
スイレンさんは表情から味方とは思えないし、心細いのだけれど。
当面の予定もここで決まるのだから、気合い入れていきましょうかね!!!!!

宮殿にて

「こちらでお待ちでいらっしゃいます。」
ドアについているドアノックを、トントンっと４度ほど鳴らすと先ほど浴場で遭遇した現皇帝様の声で「入って良いよ！」と声が響く。
絢爛な装飾を施されている扉を開くと、ハンコックら姉妹に、背丈が小さな妙齢の女性。
加えて現皇帝様が映画でしか見たことのないような、どっしりと大きい椅子に腰をかけ待っていた。
「よくきたね。待っていたよ。」
さっき会いましたよね、、とか言ったら気まずい場所になるんだろうなぁ。
先ほどお忍びでこっそり会いにきたとか話していたし、現在も目の奥で気まずいような焦って居るような雰囲気も感じて居るため、流石にこの場は話を合わせておこうと思う。
「この度はいきなりの訪問に、急ぎの対応をしていただき誠に感謝いたします。私の方も事前に連絡でもできればよかったのですが、意図せず今回の訪問となってしまったところがあり、このような形での訪問になってしまいました。」
「良い良い、余も娘たちの命の恩人にそこまでの礼儀を求めようとは思っていないからね。お婆様もそうだろう??」
隣でうなづき同意する妙齢の女性。
現実で見ると、なんか本当に豆みたいに小さいわね。
主人公がマメって言っていた理由がわかるわ。
ちょっと漂うコメディやギャグ臭に先先代の皇帝が、この方で大丈夫だったのだろうかと明後日の思考にシフトしてしまいそうな脳を慌てて現実に引き戻す。
「そうじゃニョ。気にしてはおらん。そニョ方には一度ちゃんと会っておきたいと思っていたのじゃ！」
「そういうことで、私もにょん婆も気にしていないよ。むしろハン

コックたちは嬉しそうに待っていたぐらいさ。今は、ハンコックは怒って居るようだけど。理由はわかるかい？」
目線を現皇帝様からはずし、そばにいるハンコックに目線向けると不機嫌そうな表情を隠そうともせずにこちらを睨みつけている。
私、あの時なんかしたんだっけ。
思い返すも仙豆で奴隷紋を消し、センゴクさんに後処理をぶん投げこっそり帰ってきたぐらいである。
「いいえ、何か怒られるようなことをした覚えは全くないわ。ハンコック様と呼んだら良いかしら、何かあなたにしたのだったら謝るのだけれど、何かしてしまったのかしら。」
「あの時!!!其方は何も言わずに出航しておった!!!皇女たる妾の了承もなく、勝手に!!!挨拶もなく出て行きおった!!!それのどこが何もしてないと申すのだ!!!」
ふしゃあ!!!と威嚇する猫を思い出すように雰囲気や表情も含めて、全力で私怒っています状態のハンコック。

そりゃあ勝手に助けて勝手にいなくなったのは私だけど、そこまで怒ることなのかしら。
「まだわからんと言った顔をしておるな!!説明してやる。海軍本部なんて娯楽や楽しいものなんてあるはずもなく、訓練の様子を眺めて帰る日を待ち侘びておった。その時に、妾が美しいからいけないのだが、見学をしている妾たちを発見した海兵より勧誘を受けた。海兵にならないかと。だが妾たちは誘拐されて解放されたばかりだ。それは心細かったものよ。」
「無論、センゴクたちやガープらの後ろ盾があったから、そこまで過激なものではなかったがそれでも相当な数の海兵から勧誘をされたことを今でも覚えて居るぐらいだ。」
「そんな中、唯一同性で信じることのできる人間で思い浮かぶのは、其方だった。皇女として礼も言わなければならないこと、ソニアやマリーも其方に会うのを楽しみにしていたから、ひとまず待ったものよ。まさか挨拶もなしに、それも早朝に出ていくなんて思わん故にな

!!!!!
「!!!!!」
「礼も言わせず、感謝もさせず。もう会えないと泣くソニアとマリーのお守りも押し付け出ていった其方のどこに覚えがないと抜かすのだ、馬鹿者!!!!」
話すハンコックの息はかれ、ゼイゼイと息を漏らす姿にまあまあと宥める現皇帝。
マリーとソニアも後ろにはいるが、こちらの耳と尻尾を見てキラキラさせて居る姿は時間が経って居るにも関わらず初対面の頃を思い出す。
相変わらず、子供は好奇心の塊だ。
これは世界に関わらず共通することなんだろう。
「そういうことらしいよ?で、会うつもりもないもんだと思って余も慰めていたんだけど。それで、どうして今更になってくる気になったのか。どんな理由でとか、詳しい話を聞いても良いかな。流石に何の理由もなしに、わざわざこのくるのも出るのも、危険な島に来たなんてこともないと思うんだ。」

さて、ここからが大変だよ全く。
どこまでの内容を話したら良いのか、隠すべきところの良し悪しとか。
話し合いでの駆け引きなんてやったことがないのだけれど。
「一応話しておくけど、余は嘘を言ったらわかるし娘の恩人を疑うなんて礼を欠くことなんてしたくないんだ。できるだけ正直に話してくれることを希望するよ。悪いようにはしないから、素直に話してくれるかな。」
釘を刺されましたっと。
他に頼れるところは、現在の状況では存在していないからここで敵と排除されてしまうことや、見放されてしまうことは打算的に考えても危機に他ならない。
それにただ推しに嫌われる状況も避けたい気持ちもあり、包み隠さず状況の説明をする。

金獅子のところから、決死の思いで逃げ出したこと。
死んだことになって居ると思われること。
ココヤシ村が人質になっており、生きて居ることが知られればココヤシ村に残してきた家族にどのような行為を行うのか考えもつかないこと。
できれば、死んだままの状況でシキを打倒できる力を身につけていきたいこと。
よって海軍には頼れないこと。
「なるほど。かの有名な金獅子から逃げてきたってことだ。そりゃあ、余も警戒するぐらいの力量を持っていても不思議じゃないか。お世話になってから、親交のあるガープさんとかセンゴクさんから死んだかもって聞いていたんだけど。」
「センゴクさんやガープさんはなんと？」
「余から礼を言いたいから、面会の話を通してくれないかなってしばらく連絡入れていたんだ。その最中に、海賊に攫われたって言われて。有名な海賊で神出鬼没だから、探すってなっても難しいって聞いていたぐらいかな。」
ギョッとした表情で皇帝の顔を見るハンコック姉妹。
「母上!!!何故、そんな大事な話を妾に言わずに処理していたのだ、今会えて居るから良いものの黙認して良い話ではない!!!」
「それはじゃな、お主らのことを考えていたのじゃニョ。奴隷から帰ってきて、やっと立ち直ったお主らに話すなんて人の親だったら出来ないことじゃ。わかっておやり。」
怒りの表情のまま、胸ぐらを掴まんとする勢いで現皇帝に近づいていくハンコックにすかさず先先代のフォローが入る。
「ごめんよ。また憔悴した娘の顔なんて見たくなかったから余もいうに言えなかったんだ。」
話す現皇帝の顔と雰囲気から、自分を本当に心配しての行動だったのがわかったのか、我に返り落ち着くハンコック。
「話を中断してごめんね。ここに流れ着いたのはわかった。それで、君は今後どうしていきたいって考えているの？」

「はい、もし可能であればしばらくここアマゾンリリーでお世話になりたいと考えています。現在でもともと私が持っていたほとんどの人脈での連絡や、連絡手段が絶たれていますし、頼れる人材も多くない。申し上げたとおり、生きて居ることが明るみに出ることも望ましくないからという理由もございます。」

人を見透かすような目線で話を聞いている皇帝。

先ほどのママ友のような会話や雰囲気とは、想像もつかない。

「確かにこの島であれば、他国との国交も最小限で肝心の海軍は非加盟国で立ち寄ることもほとんどない。君の望む条件にはピッタリだね。だけど、君を国に匿うのであれば金獅子がもし偽装に気付いた時にここにくる可能性があるわけだ。違うかい？」

「確かに仰る通りです。ただ私は可能性は低いと考えております。」

「その理由は？」

人の上に立つ人というのは、自由奔放で天真爛漫な場合が多いとよく聞く。

ただ、時には人を切り捨てられる非常さも必要だって話だ。

ここで切り捨てられたら、次の島への渡航だっていつになるかの予想もできない。

踏ん張りどころだ。

「私が脱出の計画を企ててから、シキ自ら私の様子を見にくることがありませんでした。それは、私の訓練方法や心構えなどが海賊の強化という一点において致命的に合わなかったことがあると思われます。私の持つ武術は、勤勉にかつ継続的な稽古を長い期間をかけて練磨していくことで実っていく技術です。だが、海賊の多くは手間は少なく得るものは大きい方がいいと言った思考のものが多い。」

「確かに練磨できれば強くはなるのでしょうが。怠慢を働くものの方が多かったシキの管轄の海賊では、当初考えていた成果はあげられなかったと思っております。次点で求められたのが、医学的技術や知識。こちらは書物を読めば身につけることができることから、重要度は高くありません。」

「最後に、戦闘員としての私も魅力に感じていたように感じておりま

したが痩せ細った、狂気する私を報告で聞いていたのであれば到底戦えるなんて考えもないでしょうと考えております。」
　表情を変えずに、こちらを見据えてくる目線に了承が得られるのか否かが不安になる。
「その内容だったら、確かに話して居る通りかもしれないね。たとえば、金獅子の情報や機密を知っていて口封じでなんてこともないかな。」
「全くないとは言い切れません。」
　ううむと口に手を添え考え始める現皇帝。
「サクラよ。恩人には申し訳ないが、反対じゃぞ。こんな爆弾みたいな人間をここに置いておくなど島のもニョたちニョ危険にも繋がってくる。」
　まあ、当たり前に反対されるよなぁ。
　私でもこんな爆弾みたいなやつ置いておきたくはないもの。
「うーん。隠していてもしょうがないかな。婆様もハンコックも重要な話をする。おーい、スイレン！戦士長を隣の部屋に呼んであるから呼んできて!!」
　叫ぶ皇帝に。周りにいるものも怪訝な表情で皇帝を見ている。
　先先代様もハンコックも姉妹も。
　スイレンさんは、相変わらず無表情なのでわからないけれど、すぐに先ほどの戦士長を呼んで戻ってきた。
「連れて参りました。私は外に出ていた方がよろしいでしょうか。」
「いや、スイレンにも関係のある話だからここにいて欲しいんだ。」
　集まったねとハンコックと先先代、スイレンに戦士長、そして私を見回し話し始める皇帝様。
「みんなには報告していなかった話がある。ここ数年、この島で消息不明になった人がいるって話が上がってきて居るんだけど、戦士長、間違いないかな。」
　はい、とうなづく戦士長を確認し話を続ける皇帝。
「そうだよね。みんなに話していなかったんだけど、最近島民で帰ってこないとかいなくなったとか、原因もわからずに消息がつかめなく

なった人たちがいたんだ。」
「そして、消息がつかめなくなってしまった人が出始めた時によくわからない話も出始めたんだ。人が降ってきたとか見たことない島が近くに出たとかそんな話さ。島サイズの海王類なんてこの近くでは、少ないけれど現れることもある。見間違ったんだろうと話したさ。人が降ってきたなんて、悪魔の身を食べた人ならあり得ることだしね。」
「ただ、それがどんどんと増えてきている。島民は実力的にも海王類如きに遅れをとるような鍛え方はしていないし、海に落ちたとて生きて帰ってこれる実力の持ち主だっていたんだ。流石に不思議に思うよね。」
　スッと、見透かすような表情から少しずつ表情が変わっていく。
「原因を究明していたら、今度は娘たちの誘拐だ。原因さえ究明できていればって、あの当時ぐらい自分を恨んだことも何も情報がつかねない状況に苛立ったこともなかったんだけど、今回は置いておこう。ただ娘たちに聞いた話だと、海辺で釣りをしていた時に突然目の前が真っ暗になったと。意識を取り戻した時には、目隠しをされててしばらく状況はわからなかったそうだ。」
「もちろん、小さいながらもその辺の兵士や海王類に全く抵抗できないほど娘は弱くはない。不審に思った余は、最後に娘たちを目撃した報告があった場所を必死に探し回った。なにかないかと。手がかりでもあればと。」
「見つけたのは、鋭い刀傷の海王類。島民で海王類を倒すとなれば、主力は弓になってくる。剣での可能性がないわけではないけど、不思議と島民のものではないような気がして、確認したけれど島民に覚えはないと。フェン殿、一つ聞いてもいいかい？」
　どんどんと、皇帝様の表情は曇っていき、そして怒気のような殺気のような。
　近くにいるだけで臨戦体制をとってしまうような、心の弱い人なら倒れそうになるだろう濃厚なオーラは放たれる。
　これが俗にいう覇王色。

くっそ!!こんなところで味わいたくなかったわ!!!
めっちゃ重圧じゃないの!!!!
気を抜けば、すぐにでも飛んでしまいそうな意識を必死に繋ぎ止め周りを見ると、幼いマリーやソニアはすでに意識はなく、戦士長やスイレンも苦悶の表情。
先先代はさすがと言ったところか、苦悶の表情ではあるものの受け流しており、ハンコックもひとまず耐えている。
「金獅子は人の売買なんて金儲けをしていたなんて話は聞いたことないかな？」
「・・・ッしていたと思います！」
必死に話すこちらの表情に気づいてくれた先先代様が、抑えてと諭してくれたおかげでマシになったオーラに力が抜けてしまいそうになりながら、足に力を入れ直す。
「まさかサクラよ。そういうことなニョか。」
「婆様。そういうことさ。余の島民は娘くらいまでとはいかないけれど、外から見れば整っている子らは多いよ。それに政府非加盟国だ。昨日も行方がわからなくなったとの報告も来ている。これだけ条件似合って居るんだ。」
「許さないよ、金獅子。余の島民に、余の家族に。娘の命の恩人まで。何人奴隷になって居るのか、どれだけの苦痛に悩まされて居るのか考えるだけで感情が溢れそうだ。」
怒髪天といった言葉はこういった状況や表情で使うのだろう。
最初に会った時の柔らかな表情からは思いつかないぐらいに歪められ、目を合わせることですら恐怖を感じてしまうくらいの状況である。
気を強く持っていなければ足は震えだし、歯はカチカチと音を立てるだろう。
「いいよ、フェン殿。ここに住んでも。ただ力を貸してほしい。センゴクさんやガープさんに評価され、金獅子までが欲しいと考えるほどの技術を。医術の知識を。そして娘を治した不思議な力やフェン殿の戦力を。」

「余は金獅子を許さないッッっ
!!!!!!!!!!」

間話

この宮殿に勤め初めて数年が経つ。
ここアマゾンリリーでの仕事は基本は戦士や警備になるか、島の周りにいる海王類を仕留め食糧を確保する漁師になるか、果樹や作物を育てる農家になるのか。
または、ここの城での給仕になるかと造船をする大工か。
大まかには選択肢は多くはない。
もちろん、幼少期より戦士としての稽古や訓練は当然の如くあるため延長線上にある戦士にと考えるものが大半。
それ以外の職につくものは珍しい。
そんな中、私は給仕の仕事をしている。

私に戦士としての素養がなかったわけではない。
戦士長にも素養があるとお墨付きをいただいていたし、同年代の子供達に遅れをとったこともないくらい。
年上との戦いとなると、流石に負けてしまうこともあったけれど、それでも戦士になることを望まれていたし、戦士にならないと断った時には相応の反対があった。
それでも、給仕の業務について居るのには理由がある。

「ここにいたの？探したよ。」
見慣れた赤い髪が、後ろにいることに気づき振り返って頭を下げる。
「失礼致しました。こんな場所までいかがなさいましたでしょうか、サクラ様。」
「驚かせてしまったかな。そんなつもりはなかったんだけど。」
こちらは、私が支えているこの島の皇帝でいらっしゃるサクラ様である。

私の小さい時は、城で勤めるなんて思ってはいなかったし遠くで眺める存在だったのだけど、この方は誰彼構わず話しかけるような好奇心旺盛で、分け隔てなくかまってくるような困った方だから現在は気安く話しかけてくるのも日常である。

「別に急ぎの用事があったわけではないんだ。島の様子や状況に変わったことはないかなって聞きに来たぐらいさ。」

「サクラ様が気になさるような事象は、現在確認できておりません。何か気になることでもございましたか？」

私こと、スイレンは給仕の仕事とは別に一つ仕事をサクラ様より賜っている。

それは街での状況の定期調査と人員の管理である。いわゆる情報収集といった方が早いだろうか。

島内では、定期的に名簿での人員の管理を行なっている。

いつどこの家庭で生まれたとか、どこの人が死んだとか。

島内に関して、それほど広い敷地があるわけではない。

それでも方向音痴の人間からすると、一度道を見失うと迷子になったり帰って来れなくなったり。

崖から落ちて、海になんてこともある。

人員を管理することで、いち早くトラブルに気づき対処をしていくことだったり、国が存続するために出生率や戦士の数だって把握しておいた方がいいことだってある。

それから始まったのが、今の人員の管理だ。

1日の終わりに、それぞれ決められた広場に集結し点呼する。

人員が足りなければ捜索を。足りていればよし。

足りなかった時に、日に一度、私が巡回をして居るのでその際に報告。

何か急ぎの内容があった場合は、城に直接報告をといった段取りになっている。

まさか現皇帝が定期的に巡回に回ってこようものなら、街のものも気が気ではないだろうことや、サクラ様の負担を考えて「余がいくか

らな、絶対!!」と話す言葉を聞き流して居るうちに、私の業務になった。
別段、散歩がてら街に行くぐらいなので苦ではないのだが、昔から働かない顔のせいで「怒ってる??余が無理言ったから怒ってる??」なんて顔を伺ってくる皇帝がいる。可愛い。
ごほんっ。本音が漏れました。
気を使わせてしまって居るのだが、動かない表情が悪いので私は悪くない。

話が逸れたので、戻すのだが少し前に原因不明で突如行方がわからなくなってしまった島民がいた。
それは神隠しにでもあったかぐらいに前置きもなく、起こったそうだ。
家族のものから聞いた話では、前日の夕飯は一緒に団欒し、美味しいご飯をみんなで食し、普段通りの日常を終え眠ったのだという。
次の日もいつも通り訓練に行ってくると送り出し、帰宅を待っていたと言っていた。
ただ待てど暮らせど、家には帰って来なかったのだという。
友人の家に泊まり込んでいるのだろうと、交友のある友達の家族や知り合いに聞くも知らないと言われた。
訓練に行った時に何かがあったのではと戦士長や訓練仲間に聞くも、その日は普通に帰って行ったという。
アマゾンリリーで訓練しているものの多くは、武装色の覇気を身につけるぐらいには訓練を行なっておりその練度も高い。
その辺の動物に負けるとも、ちょっとした海王類に負けるとも思えない。
私に相談が持ちかけられ、戦士長やその子の知人らを含め島内全域を捜索するも見つからなかった。

痕跡も見つからないなんてことがあっていいのかと、過去に同じような話がなかったのかと話を聞けば、若い女性戦士が多くいなくなっ

ていたとのことが発覚した。
それまでは、海王類に食われたのだろう。
弱い戦士だとか、海に落ちたのだろうなどと考えられていたらしいが、突然何事もなく消えてしまったとされる話が次々と発覚してきたのだ。
そんな適当でいいわけがないし、原因を究明する意味がきっかけとなり、他の理由も加味した上で始まったのがこの取り組みである。
サクラ様が話して居るのは、神隠しは起こっていないかという話だった。

「いや起きていないのであればいいんだ。ほら、ハンコックや娘たちも落ち着いてきて、やっと普通の日常に戻りそうなのに嫌なことを思い出させるようなことは起きない方がいいと思ってさ。」
「今のところは、そのような事象は怒ってはいないと聞いております。また、何かあった時には至急こちらにと話もしておりますので、きていないということであれば問題はございません。」
目尻を下げながら、ほっと一息をつくサクラ様。
「本当に、余の杞憂だったならいいんだ。非常に腹立たしいことではあるんだけど、奴隷に売られたのは娘たちだけ。他の島民は事故だったのであれば、実力がたりなかったと諦められる。娘たちも帰ってきたしね。」
「だけど、もし他の島民も余が気づかないところで、娘たちと同じように奴隷にされていて、今も苦しんでいるかもしれないなんてことだったらと思うといてもたってもいられなくてね。」
この方、サクラ様は非常にお優しい方だ。
今もこうやって血縁もない島民や臣下の者のために考え、安心した表情や眉間に皺を寄せ、心配の言葉を漏らすのだから。
私の両親はいない。
すでに両親ともに私の幼少期に他界したそうだ。
父なんて文化がこの島にはないために、他の島で強い因子を授かってきたのだろうと思っているし、母は戦士の中でも病弱で私が物心着

くまでは母親として愛情をくれ、その後に他界した。
そのあとは、この島での生活は身に余るほどの食料に溢れて居る家庭ばかりではないため、親戚や知人に迷惑をかけるつもりもなく、母が住んでいた家で1人で暮らした。
訓練には身が入らなかったが、それでも同世代の中では一番の戦歴だったと思う。
同年代の戦士たちには疎まれ、上の戦士たちには将来を有望視される。
板挟みで、戦死なんてやめてやると家を飛び出しあてもなくブラブラとしていたところで給仕にスカウトされた。
皇帝様直々に。

こんな身寄りはなく、同世代で強いだけの子供を
「うちで余の給仕になってくれないか。娘たちとも同じくらいだろうし、友達になって欲しいんだ。皇帝の娘だっていうと、みんな気を遣ってくれちゃうからさ。」
ほぼ拉致だった。
いきなり話してきたと思って振り返ったら、赤い髪に気づく。
この島で赤い髪なんて皇帝様ぐらい。
皇帝様??なんで??スカウト???
あわあわして居る私に、「拒否しないってことはいいってことだよね!!表情はわからないけど、いいってことだよね!!!」と迫ってくるのだから、もう首を振るしかない。
首を振ったら最後、横に俵抱きで持ち帰り。
これを拉致と言わずして、なんなのだろう。
宮殿内に私室をすぐに用意をしていただき、家具はもともと宮殿にあったものを使用していいと話された。
非常に高価なものであると予想されるため断りたかったのだが、自由にしていいと話があり「ここでは家族だと思って話して欲しいな、娘の友達になるんだから、余の家族も同然さ!!」なんて語っていった。
あぁ、家族を亡くして無気力になっていた私に気づいていたのだろ

う。
同じ年齢くらいの娘が重なったのかどうかはわからないが、助けに来てくれたのだろう。
なんとなく、きっとそうなのだろうなと宮殿で暮らし始め、給仕の仕事を教わったりハンコック様のお相手をして居るうちになんとなくそう思った。
見ず知らずのいち島民の私に手を差し伸べてしまうこの方は、きっと非常に優しい。

少しでもお役に立ちたいと思って居るのだが、表情にはそれを表すことを顔自体が許してくれない。
表情は一切変化はないので、行動で伝えるしかない。
そう意気込んで数日。
いつも通り宮殿で働いている私宛に、町から戦死長。いや、いつか死にそうな方ではあるけど失礼だった。
戦士長が私の元に直接走ってきたのだ。
「スイレンはいるか!!スイレン!!!いないのかッ!!!!」
「こちらにおりますので、そこまで大きな声を出さずとも聞こえております。あなたが直接来るなんて、いかが致しましたでしょうか?」
はぁはぁと切らしている息から、非常に急いでこちらまで来ている状況を察する。
「ハンコック様から黒耳で黒い尻尾の御仁の話を聞いたことはあるだろうか。腰に奇妙な袋を下げたちんまりとした女だ。」
「特徴から察しますと、ハンコック様よりよく聞くフェン様と言った方の特徴に似ているかと思います。それがどうしたというのでしょう。」
「私の訓練している街に、その特徴を持つ御仁がハンコック様との面会を求めいらっしゃっている。ただ格好が非常に見窄らしくとてもハンコック様を助けた御仁とは思えず、可能とあらば先先代様や皇帝様に意見をいただきたいと考えて走ってきたのだ。スイレンはどう思う。」

常日頃から訓練で自身の体を痛めつけて、生を感じているぐらいに訓練をしている戦士長がこれだけ息を切らしているのだから、疑う余地もなく本当のことなのだろう。
「ひとまず私は見ていないので、判断が難しいところではございますが。本日は皇帝様やグロリオーサ様、ハンコック様を含め皆様広間で訓練かくつろいでいらっしゃる頃合いかと思います。お話を通して参りますので一緒に来ていただけますか。特徴などを直接ハンコック様に申し上げた方が確実かと。」

戦士長をつれて、広間まで歩いている中で詳しい詳細を聞いておくもボロボロの衣服。
運動後の戦士たちよりはマシであるが、多少泥に塗れたような色黒さにツンと刺すような身体から漂う匂い。
特徴といえば、その点が大きかったと言う。
あとは、頭部に人の耳とは違う獣の耳と腰には獣の尻尾。
漂流してきたミンク族だと言うところは濃厚である。
ただミンク族は体全体に獣的特徴が出ると言うのに、この方が出ているのは耳と尻尾部分だけ。奇妙なことに尻尾は二股に分かれているのだという。
ドアノッカーをコンコンっと4度ほど叩き、中からの返事を待っていると「入って良いぞ!!」とハンコック様の声が聞こえる。
「スイレンです。戦士長も一緒に来ておりますが、一緒に入ってもよろしいでしょうか。」
「いいよ。入っておいで。」
今度はサクラ様より返事をいただける。
グロリオーサ様も一緒にいらっしゃるのだろう、わいわいと声が聞こえる中に足を踏み入れる。
「戦士長も一緒なんて珍しいね、どうしたの?」
「本日、島内の集落の広場で訓練を行なっていた際に黒いミンク族の人物が現れたと戦士長より報告を受けました。今後の対応の相談に伺った次第です。」

バッとこっちを振り返り、ドタバタと慌ただしくこちらに詰め寄ってくるハンコック様と姉妹方。
圧力に引きそうになるのを抑える時は、この顔も便利だよなと考えながら状況を説明する。
「スイレン!!フェン殿がこちらに参ったと!!!」
「私が直接見てきたわけではございませんので、戦士長より伺っている内容をお伝えいたします。身長は小さく島の少女ぐらいの身長の女性で、頭部には人間ではなく動物の黒い耳、腰には二股に分かれた黒い尻尾があったと伺っております。また、こちらにハンコック様がいらっしゃることを知っているようで、ハンコック様との面会を希望されております。いかがなさいますでしょうか。」
サクラ様の様子を伺うと、戦士長に目を向け視線を合わせている。
戦士長も内容を汲み取ったのか、首を縦に振っているのが目に入る。
「母上、今の特徴を聞く限りフェン殿に間違いはない。マリーやソニアも会いたがっていたのだ、面会の用意を!」
はぁとため息をこぼしているサクラ様。
一度決めたら一直線のハンコック様の性格は、きっとサクラ様あなたに似たのですよ。
「戦士長も不審な点がなかったと確認しているようだしね。余もその辺のやつに負けるほど、柔な鍛え方もしてないから。スイレン、呼んできてくれる?」
「はい、おっしゃる通りに。ただ非常に汚れていらっしゃるご様子で伺っております。この広間に通す前に、身を整えてからと考えますがよろしいでしょうか。」
この広間も宮殿も掃除洗濯、雑務は私たちに回ってくるのだ。
「その点はスイレンの判断に任せるよ。不審だと思ったら、最悪殺してしまっても構わないから。」
ハンコック様を宥めるために、近寄ってきたサクラ様よりこっそりと耳元で囁かれる。
吐息が耳に当たってひゅんとしてしまうから、やめていただけます

でしょうか。

街に来ている女性を見に行ったのですがとっても可愛い女の子でいらっしゃいました。
私がフェン様を宮殿にお招きするときに、無表情が近くにいると警戒されるかもとこっそりと近くで警戒する役目を賜りました。
その話し方や、立ち振る舞いを見るにある程度歳を重ねられている方というのは見て取れます。
また、その立ち姿には隙もなく戦闘に関してもしっかりとこなせる方なのでしょう。
海賊のような蛮族ではなく、しっかりとしたまともな会話をできる人。
ただ重要なのは、そこではございません。
お話をしている時、私を見て戸惑っている時。
話している間に、何か考えているであろう時。
湯浴みの準備をしていると説明の中で話した時。
いけないことをしているような気分で、少々の快感があったのですがじっとフェン様を見つめておりました。
はしたなくはないです。仕事ですから。

仕方なく、見ていたのですが。
感情に応じて、尻尾と耳の反応が豊かだこと。
湯浴みの話のように喜べば、尻尾はぴんと立ち、警戒をすれば毛が逆立ち多少なりとも尻尾がモフッと膨らむ。
戦士長と話を終え私が湯浴みを案内した時なんか、対面時は少々逆立ち、浴場到達時はピンと立ち、浴場から出る時は横にぶんぶんと振れておりました。
あら可愛い。
きっと、今前関わってきた人は誰も尻尾で感情が出ているなんて言

わなかったのでしょうか。
今までの方々に頭を下げたい気持ちでいっぱいです。
そして、私の元にこんなに可愛らしい人物を送ってくれた神に感謝を。
あぁ、可愛らしい。これは今のうちに愛でておくべきですね。
給仕たるもの、湯浴みに入っていただいてからはしっかりと仕事をします。
そのボサボサだった頭髪や、尻尾や耳の毛並みはブレスダイアルやブラシでしっかりと埃や塵を飛ばし、ふんわりとした触り心地の良い毛並みにビフォーアフターを。
バサバサだった肌にはしっかりと、潤いを施し、どうにもならない部分は軽いメイクで誤魔化しておきます。
お召し物は、完全に趣味ですがハンコック様の召物の中から、黒い着物をチョイスしております。
和服少女、合法VERなんてなんて素敵でしょうか。
完全に私の趣味でございます。お黙りなさい。
出来上がった頃には、あら素敵。
ボロボロの少女から、綺麗な少女に早替わりでございます。
ここで働いていて良かったと心底思いました。
可愛いぃぃぃぃぃぃ！！！！！！
なんて狂気はしません。
だって無表情ですもの。
話は、サクラ様の怒声と表情。
一同皆の力で、打倒金獅子。打ち払え巨悪で話が締め括られました。
流石の私もあの状況では、多少の苦悶の表情はでてくれるようです。
ここにきて、やっと働く表情に今更感は拭えませんが新発見といったところでしょうか。
さて、本日もロイアルブルーの自慢の髪を整えて。
可愛らしいサクラ様と、ハンコック姉妹の方々。

そして新たな獣女子、改めフェン様のお世話といたしましょう。

可愛いいいいいいいっ!!!!!!!!!!!!!

ああ、歳をとるのって

ここでの生活にも慣れてきたもんね。
人間住めば都というけど、本当にその通りだなと実感する。

宮殿に住むことに了承を貰い、宮殿内の空き部屋を使っていいと話があった。
どうやら宮殿内部で働く人口自体が多くないが、他国の使者や政府関係者が来た場合に、宮殿の規模や装飾などから島の状況や判断される場合などがあると。
そのため宮殿を大きく建築することになり、無駄な部屋が多数存在しているとの話だった。
スイレンさんも皇帝様より、同じように部屋を渡されているようで空き部屋に詳しく、部屋の案内も付き合ってもらった。
本当に無表情で何を考えているのか、全くわからないのだけれど。
加えて、今後の慣れるまでのお世話も
「一緒に住むのに、堅苦しいのは不要だよ。気軽にサクラさんとでも呼んでくれると、余は嬉しいな。今後の慣れるまでの世話係とか、部屋の案内も誰かに案内させようと思うんだけど。スイレン、手配できる？」
「世話係は、引き続き私が対応いたします。他の者は、忙しいでしょうから。」
「スイレンにはみんなよりも仕事を追加で任せちゃっているから。他の人でもいいんだよ？」
なんてやり取りをしていたのだが、頑なに私がやりますといって、結局サクラさんの了承の上、しばらく身の回りのお世話もスイレンさんにお任せする形になっている。
嫌われてはいないんでしょうけど、怖いわよね。無表情。
表情筋の異常だったりするのかしら、後で貯まったら仙豆でも食べ

てもらいましょう。
本来であれば、秘密にしたい内容ではあるのだけれどサクラさんは知っている様子だったし、いいかな。
ハンコックに後程謝られた。
仙豆のことは隠したい技術であったことは、もちろん理解していたそうだが、奴隷紋を消すため以外にも訓練でついた戦闘傷まで全てまっさらに卵肌だったことが起因となり、私が癒したというところは隠しきれなかったのだという。
私もお世話になる以上、できる限りの還元はしたいし、借りばかり作って後々取り立てなんてことが現実に起こったときには頭が痛いので、正直に伝えた。他のものに他言しないという約束の元に。
戦士の傷は、誇りだと称される部族などもいるが、女性からしたら傷もシミもそばかすですら天敵。
サクラさんも「余の体でも安心できるか、試してみたいんだけど!!」とキラキラさせていたから、皇帝でも女性なんだなと今日できたばかりの1粒しかない仙豆を渡した。
私を疑うなんて選択肢にないと言わんばかりに、すぐさま口に放り込み先先代様に「コラっ!!!!少しは皇帝であることを自覚せい!!!」と怒られていた。
流石の仙豆も古すぎる傷跡には、対応が難しく残ったものも多少あったようだが、それでもたちまち多くの傷跡も傷も癒え、また顔の張り艶までいつも以上といった状況に感動していた。
満腹感に関してだけは、「なんか豆一つでお腹いっぱいって気持ち悪いね。」とここだけは不満だったようだけど。

娘の命を助けたとはいえ、すぐに信じ切る懐の深さや度量。
疑うことなく、不審な豆を口に放り込む度胸。
面会の時の威圧感ももちろんだが、流石に一つの国を統括している皇帝かと尊敬の念を抱くばかりである。
スイレンさんにおすすめされた部屋は、宮殿の角で窓から島が展望できるようなお部屋。

島自体がそこまで大きいわけではないため、海までも見渡せるような気持ちのいい立地の部屋だったことや、その窓より入ってくる草木の匂いがココヤシ村で暮らした日常を思い出す懐かしい匂いが吹き込んでくることあり、ひと目で気に入った。
今度、もし可能であればみかんの木を植えよう。
大きくてみんなで食べれるような大きい木にしたいな。

ちなみに、この部屋に住んでみてわかったこともある。
わかったときにはスイレンさんに泣きながら文句を言ったぐらいだ。
どうやらこの部屋には、お化けがいるかもしれないのだ。
まずは城に慣れるために、城の案内をしてもらったり城や島の方々に挨拶回りをしたりと初めての環境に慣れるために動いていた。
初めての人との会話や気遣いはいつになっても疲れるもので、部屋に戻ってくる頃には疲れて眠ってしまうこともしばしばあった。
そんな中、決まって夜に隣の部屋から
・・・・・・わいいいいいいい・・か・いすぎるんですけど・・・・・。
とか騒がしい声が聞こえてくるのだ。
最初は不気味すぎて、耳を塞いで就寝していたんだけど毎晩のように聞こえてくるものだから、耐えきれずにスイレンさんに相談した。
隣の部屋はスイレンさんの部屋だったはずなので
「スイレンさんの部屋からは聞こえないのかしら!!すごく不気味なのよ、部屋を変えてもいいのかしら!!!」
と頼み込んだら、次の日からスンッとなくなったのだから安心して過ごせるようになったので非常に助かった。
スイレンさんは霊媒師か何かだったのだろうか。
スイレンさんにはしばらく足を向けて眠れないらしい。
ちなみに後日、仙豆をスイレンさんに手渡しで送ったら「新しい結婚の申し込み方ですか?」といつもの表情で話していたため、無表情は日常なのだろう。
誤解を訂正し、食べてもらっても無表情は変わらずだったので無表

情の謎は深まるばかりである。

新たな日常は、割と楽しい方達と一緒に暮らすことになっているんだけど。

もちろん、訓練も早速のことで始めている。

この島での序列に関して話していくと、長くなるそうだが本来この島での皇帝女帝はその美しさや強さの総合的な判断から選抜されるのだといっていた。

無論、現行でもその制度は生きているのだという。

それでは何故、この現代の皇帝は世襲制のようになっているのかと思うだろう。

この世界では、まぁもちろん前の世界でも通じるものがあったのではないかと考えているが、血筋や血統のようなものが子孫にまで多大に影響を及ぼすなんてことはザラにある。

やれ道場の息子が、その強さで道場の師範の座を勝ち取って道場を継いでいたり、現行のオリンピックの選手は実は父や母も同じ種目のオリンピック選手でした。なんて話はよく耳にしたことだろうと思う。

無論、それだけが要因ではないが。

現在のアマゾンリリーで、戦闘力という点にて1番強いと評価されているのがサクラさんといった立ち位置にいるらしい。

その美貌も美術品のような美しさとは離れてしまうものの、当時、健康美や肉体美で1番美しかったそうだ。

戦士たちの美的センスはそちらも含まれるのねと驚いたぐらいである。

そして先ほどの話に戻るのだが、割と親から子に皇帝の座が渡ることも珍しくはないんだと語っていた。

１番強いものに幼少期より、訓練を施され、血統は所謂サラブレットなのだから、まぁ可能性は高いんだろうと納得した。
そんな中、島一番の強者に揉まれているハンコックもあった当時と比べると身長や体しっかりと育っており、出るところは出て、身長もすらっと伸びて、次期皇帝になるだろうと教育を施されている。
定期的に皇帝争奪戦の催しが開催されており、宮殿の近くに設置してあるコロッセオのような闘技場で行われるらしい。
ボア家で序列１位と、若くして２位はハンコックとサクラさんで埋めているらしくしばらくは動かななくなってしまったと嘆いていた。
ソニアとマリーはまだ、序列１０位以内とはいかないがそれでも上位につけているとのこと。

訓練の話に戻ると、その序列戦を近々行うんだそうだ。
サクラさんに勝ちたいハンコックから、こっそり鍛えてくれないかとお願いされた。
私の闘い方に興味を持った原因は、ガープさんからめちゃくちゃ何度も同じ私の話を聞かされていたらしい。
やれ奴の見聞色は強いぞとか、武装色は雑魚だが面白い武術や技能を持っている。
あれは見たことないから、やつ個人での技だろう見せてもらえとか話したらしい。
興味を持たれたために、サクラさんとの模擬戦といった催しもハンコックが見学していた。
模擬戦の状況としては、千日手。
お互いに決め手がなかったために、一旦引き分けとなった。
私の戦闘スタイルは、急所狙いの回避スタイル。
相手の攻撃を避けつつ、ちまちま攻撃をして機動力を落とすとか、首や頭部などの急所を狙い一撃で倒し切るか。
対して相手はタンク一撃型。
サクラさんの得意なところは、武装色によるゴリ押し。
見聞色は急所を狙う一撃に定め、他に関しては得意の武装色で防

ぐ。
そして相手の疲れや、隙を誘い力強い一撃を相手に喰らわせるスタイル。

サクラさんは、剣や武器を使うこともあるけれど、見聞色はまともに使えるようになり、大きな力強い一撃スタイルはガープさん相手で経験が豊富な私からすれば強くはあるものの避けることに専念すれば、攻撃をもらうことは少なかった。
サクラさん側は、攻撃を当てることは難しいけれど、逆に強固な武装色を撃ち抜いてくる攻撃がなかった。
それは訓練のような場所で、かつ女性であるサクラさんに発勁やワンインチのような人体に影響を及ぼす技が使えない私には到底突破できる硬さではなかったのだ。

よって、お互いに決めてなしで千日手。

それでもサクラさんと正面から戦える技術や武術は目新しいものがあったらしく、「妾にもその技術を教えてはくれまいか。」と話があった。
宮殿内でのことなんて、何処に目があって口があるのかわからない訳で、サクラさんにはバレているようで、「鍛えてやって欲しい、余よりもフェン殿の戦い方の方が舞のような美しさがある。ハンコックにはそちらの方があっているような気がするんだ。」とこちらからもお願いがあったため、教えることにしていた。
早速のところ、教えていこうと話をしていざ訓練を始めるとその実力の高さに驚いた。
まだ、年齢も１４とか１５とかその辺だろう。
対して私はおそらく２０代前半ぐらいの肉体と言ったところ。
身体能力に関しては、おそらく人間という種族の枠組みには収まらない身体能力を有している私に、この年齢でしっかりと食らいついてくるのだ。

見聞色で動きを読み、拳をハンコックの動きに合わせて添えても、急所をしっかりと逸らす。
合気の容量で、ハンコックの力を利用し投げ飛ばせばしっかりと受け身を取り、次の行動の起点を維持する。
足を狙って、軸足を叩けば見事な体重移動を瞬時に行い、軸足を変え、戦線を維持する。
上手いのは、戦い方ではなく体の使い方と己の力量をしっかりと把握できていること。
この年にして自らを俯瞰して、短所と長所を見極め、最善を選び取っていける目や頭。
この年でここまで戦っていける人がいるなんて思っても見なかった。
それは、今まで教えてきた海軍や海賊を含めても随一の才能によるものなんだろうと思う。
サクラさんに聞いても
「あの子、すごいだろ。余が教えた訳でもなく、元々の才能ってものなんだと思うよ。将来懸念がないことは嬉しいけど、大人になっていくのが早くてさ。寂しい気持ちかも。」
っていっていたから、天賦の才能ってあるもんなんだなって怖くなったぐらいだ。
元々の自分の体の使い方がしっかりわかっているというのは、武術を学ぶ上で非常に有利に働くことは多い。
それ故なのか、武術の吸収もめちゃくちゃ早い。

教え始めて数日でこれなのね。
私も素の状況で戦ったら、負ける日も遠くないんだろうなと悔しくなったので、サクラさんとお互いに強くなろうと拳を突き合わせ誓ったのも、記憶に新しい。
幼い頃の吸収力や好奇心って怖いわね。
どんどん吸収していくんだから、私も負けてられないって気持ちにさせられるんだもの。

それとは別に、もちろん他にも打倒金獅子で動いていることもある。
街の子や戦士たちの訓練や、もはや恒例となった医者として町医者をしている。
この島での医術の進歩は非常に恐ろしいことになっていた。
ウイルスや疫病のような流行りの病が出れば、己の身体が弱いのだと己を鍛え、怪我をして床に伏せれば怪我をする己が悪いと、コンディションが悪くてもバクバクとめっちゃご飯を食べる。
案の定、体調がすぐれない中、無理をして食したところで消化されずに出てくるか吐くか。さらに体調を崩す要因になりかねないなんて、わかるようなものだがこの島では常識になっている。
他国との国交を閉ざしている弊害って怖い。
筋肉的思考や、戦士の発想を淘汰し医学の常識を常識とするところから始めなくてはならないなんて、頭が痛くなりそうだった。
それでも、この島の人々やサクラさんたちは外界の技術や知識に興味津々であり、受け入れることに関して抵抗がなかったのは救いである。いつか誰かにコロッと騙されやしないかと不安ではあるが、国交がそれほどない以上、気にする必要もないのかと割り切った。
毎日、怪我をするたびに宮殿を訪れ治療をすると「おおーーっ!!」となるのだから、悪い気はしない、むしろ嬉しいんだけど大勢で押しかけてくるのはやめて欲しい。
そんなこんなで、数年間、ここで力を蓄えることになる。

数年の時間を経て

アマゾンリリーで生活を送り始めてから、５年ほど結局、訓練や自己鍛錬などの時間に費やしていた。
子供だったハンコック、ソニアやマリーもしっかりと大きくなり、子供の頃の面影も少なくなってきている。
私の体に関してはまったく変わらないわよね。
いい意味でも悪い意味でも。
一向に身長も伸びなくなってしまった。
いきなり急成長されても、今まで感覚として掴んできた間合いだったり感覚がずれるのは怖さもあるので、悪いことばかりでは勿論ないのだけれど、今だに初めて会ったりする方がいると子供扱いされるのだから、この身長も考えものである。
現在での行きつけの八百屋のおばちゃんや、本屋さんなんかだと年齢のことを信じてもらえないのだから、この世界基準のスタイルの良さには恨みが募るばかりである。

この５年間で、しっかりと強くなった。
私もこの島の周りの人間もである。
３年前には、フィッシャータイガーの聖地マリージョアでの一件もしっかりと確認している。
このマリージョアの事件の影響は、ここアマゾンリリーにも起こっており奴隷として捕まっていたここアマゾンリリーの戦士達も、しっかりと帰還している。
それでも全ての戦士が帰還できたわけではなかった。
逆らって銃殺されたもの、女性の尊厳を失うほどに辱めを受け、心を失い自身で自害したもの。
毎日のように、行われる暴力により体が耐えられなかったもの。
果敢に同じ奴隷の尊厳を守ろうと行動し、敗れてしまったもの。
聞くだけで胸糞が悪く、今にも握る拳は張り裂けそうで口は歯が軋

むくらいに強く噛み締めても、まだ胸の中にしこりのように黒い感情が渦巻く。
サクラさんと一緒に出迎えたが、サクラさんや島のみんなの気持ちを思うと胸が張り裂けそうだった。
少数でも奴隷から解放されて帰ってこれたのは、それでも救いだった。
この時には、騒動に乗じて脱出し路頭に迷っていたそうなのだが、自身の美貌や戦闘の勘までは失ってはいなかったそうで用心棒などをしながら食い繋ぎ、時を見て皆まとまって帰ってきたのだという。
帰ってきた時には子供は母親に保護され、大人は子供の手前強がっていたもののついた瞬間に糸が切れたように泣き崩れた。
それでも心や思い出、気持ちだけは失わずに帰ってきたことに、その強さに。本当の意味で感銘を受け、シキに対して打倒の意思をさらに強く誓った。

私個人の成果から上げていくのであれば、素の身体能力や筋肉の強化である。
この体は耳や尻尾の感覚からすると猫科由来のものだと思うのだけれど、持っていた身軽さや瞬発力などのアジリティに磨きがかかった。
ここにきて、初めておおよその感覚での走りを測っても以前のものよりも5割り増しで早く動けている状況である。
知識や勉強、研究さいていた時間を訓練に使っていたことが功を奏したのだろうと思っている。
勿論、薬学を疎かにしていたのかというとそういったことではない。
基本的な医術書や薬学の知識は、ココヤシ村に着く前におおよそ掴んでいるし、スーロンになるための丸薬に関しても研究し尽くした感があるからだ。
一応の成果として、丸薬成分を希釈して効果時間を1時間から30分程度に減らし副作用や、クールタイムを短く抑える方法は確立でき

ているがそれ以上にすることはなかった。

また、チョッパー医師のようにランブルボール的な薬はできないのかと研究していたこともあったのだが、まったく原理が理解出来ないし、成分の当てもさっぱりわからない。

流石に主人公の船に乗るだけあって、彼もある種の天才なのだろう。

天才になりたかったと嘆いたものだが、私には俺ＴＵＥＥはできないのだろう。

まぁ、それでも武術知識やスキルがあってスーロンになれてと言ったものだけで、充分普通に生きれるので高望みしてもしょうがない。

素の身体能力が上がったと言うことは、エレクトロでの能力増強の幅も広がっており、当社比８倍ぐらいまでは許容範囲に収めることができた。

私も界王拳、８倍だって言える時代がついにきたのだ。

この世界では、攻撃するときに技名を語り相手を惑わしたり、わかりやすく威圧したりする文化があるのだけれど、その点は今だに取り入れることができていない。

前の世界ではやっていたのよ？

スーパーで忍者走りしたり、小さい頃だったら変身してみたり。

１０年近く経った今でも、記憶もある程度あり常識を引き継いできているので抜けない感覚といったところだろう。

前の世界の感覚が全てなくなってしまうのは、なんとなく寂しいから私は変えずに行こうと思っている。

武装色はあまり進歩はなく、サクラさんやハンコック、果ては街のほとんどの人にさえ不憫なものを見る目で見られるのが悔しいのだけれど、才能がないのだろうあきらめた。

反面、あの忌まわしい生活で生を感じたことがきっかけになったのか、グングン見聞色は成長し、ここは一目置かれるぐらいなのでプラ

マイゼロであろう。
覇王色は、何回もサクラさんに付き合ってもらって耐性はできてきて、影響下でもなんとか普通に動けるぐらいにはなってきている。
勿論、上に立つ才能なんてカリスマ的なものは私に生えてきたりはせず、覇王なんて柄でもないので使えないのも納得のことであった。
ちなみに、今だになぜ尻尾が二又になっているのかはわからないままである。
神様のイタズラであるのか、また何かの能力がこの体に別途隠されているのか。

覚醒フラグなんてかっこいいフラグがあれば、幸せだよね。かっこいいもの。

「フェン、ぼんやりとしている暇があるなら手伝ってくださいますか。」
スイレンとは、隣の部屋ということもあり仲良くなった。
基本的にめんどくさがりな性分で、可愛いものに目がないなんて無表情からは想像ができなかったから、びっくりした。
私が暇そうにぼんやりとしていると、こうやって仕事を押し付けてくる。
5年も一緒にいるから、流石に隠すのも億劫になってきたと最近はめんどくさがりも可愛いと抱きついてくるもの布団にも潜り込んでくるのも慣れつつある。
誰かと一緒に寝るのは、安心できるから別に構わないのだけれど、仕切りに鼻息が荒いのが怖いから。

皿洗いに掃除、庭の管理や街の調査まで何でもござれの状況で動いているため人手がどうしても足りなくなる時があるらしい。
「今日は何を手伝えばいいのかしら。」
「最近、また人攫いが増えてきておりまして。定期的に見回りを強化しておりますが、対応しきれていないのが現状です。状況の把握と対

策をと思っております。」
ここ5年間の間も定期的に、やはりというか人攫いは継続的にくる。
流石に人攫いが金獅子と繋がっていることがわかっている以上、私がそのまま直接対面できないので、顔を布で覆い隠して対策を打っている。
シキ本人が来たことはなく、戦闘の訓練を私たちのように専門に取り行っているわけではないので流石に最近は追い返している。
撃退はできるのだが、最近はさらに連中も過激化しており送ってくる人数を増やしてきたり、手練れを送ってきたりとこちらの対応がギリギリといったことも多くなってきている。
それで問題が起きるたびに、現場検証を行ったりしているわけだ。

本当を言うなら、そろそろ根本的な要因を取り除かなきゃならないのよね。
「スイレン、そろそろ私も今のままじゃいられないと思っているの。そろそろかなって思っているのだけれど。」
「わかりました。それでは、サクラ様や皆様に広間に集まるようにと伝えて参ります。」

ちなみに5年で変わったものというと、サクラさんは現役皇帝をハンコックへと去年譲り渡した。
これは、シキとの話の中で自分に何かある可能性を考え事前に譲っておきたいといった考えだそうだ。
スイレンに声をかけて、数分。広間にみんな集まったと報告があったために自身も広間に入る。
「フェン、そろそろかとスイレンに話していたとスイレンから聞いたよ。動いていくっていうことでいいのかな。」
「はい、そのように考えているわ。あれから、私がサクラさんと出会って5年という月日が流れた。私もサクラさんやハンコック達、それに街の人たちやスイレンも家族が連れて行かれるかもしれない恐怖に

耐えて。過去に連れて行かれた可能性がある人は、その恨みや怒りを心に留めて。みんな、金獅子を打倒するために歯を食いしばって耐えてきたわ。そろそろ準備は整ったかなって思っているの。如何かしら。」
「余もそのように考えていたよ。今は警戒の範囲で抵抗できているからいいんだ。ただ、今後も今の状況が続くのかと思うと許容できるものではないから。加えて、過去に私の娘や家族に手を出しておいて、いまだに島民に継続して手を出してくるのは、余も看過できない。それに、このまま余とこの場所自体を舐められたままじゃあね。今まで我慢してきた分、しっかりとツケを清算しないといけないよね。」
いつもの家族のような優しい目でも、皇帝としての見透かすような目でもなく、戦士としての獲物を狙うような目。
猛禽類が獲物を見つけたときのような目。
その隣ではマリーやソニアも、鼻息荒く息巻いている。
あの解放された人員や、人々の様を思い浮かべるとその気持ちは私も一緒だ。
「それで今後、どうやって動いていくか。その内容が重要になってくるわけなんだけど。考えてあるんだよね、聞いてもいいかい？」
これからの動き方も、もちろん考えてある。
いくら鍛えた、強くなったからといっても相手は神出鬼没であり、行方知れず。
こちらがずっと警戒をしていて隙をつかれ後手に回るしかなくなる、なんてシナリオは1番最悪である。
「サクラさんが海軍直通のでんでんむしを持っていてくれて助かったわ。海軍にも話を通しておきたかったの。」
「それは、ハンコックに言ってくれるかな。ここに送り届けてくれた時にガープさんが置いていったものを、ハンコックが持っていたんだ。」
これからの内容には、海軍にも一枚噛んでいただく予定である。
流石に舵輪ジジイをインペルダウンから解き放った罪は清算してもらわないといけない。

「ここからの内容は考えてあるの。話していくから、疑問点があったらちゃんと教えてね。
まず私が考えているプランは
・私の存在が生きているという内容をばら撒くこと。
・海軍には、私のココヤシ村を守ってもらうこと。
・この島に来た奴隷商の大元を叩く
・私に関しては、警戒されづらいように常に個人で動き回ること
大まかにはこの内容に沿って動いていこうと思っているわ。」
「生きている情報をばら撒くっていう話は撒き餌は理解している。けど、フェンが捕まったらこの作戦は全てが失敗に終わってしまうと思うんだけど、どうかな。」
「それはそうね。だけど、私の周りが固められている状況下でリスクを取ってまで、シキが動くとは到底思えないの。普通の海賊とは違って、楽しい方にではなくてメリットとデメリットを天秤にかけて動く男よ。ここに関しては、私だけなら逃げるくらいはしてみせるし、できるぐらいの速さはあるつもり。」
5年前、わざわざ幹部ではなくシキ本人が私のところに飛んできているという背景は、おそらく他のものでは交渉は出来ても逃さず捕まえるという条件を確実に行える部下がいなかったのだろうと思う。
現在として、映画でのうっすらと残っている記憶を辿ってもそこまで突出した部下には恵まれていなかったように思う。
もちろんシキの島内であれば、ダフトグリーンや準ずる毒など怖いものはあるけれども、引っ張り出してしまえば戦い様はあるというもの。
加えて、思い出してブランクの状況を見るに日々鍛錬というような勤勉さはなく、対して私はここまで鍛錬を続けてきている。
私の武術のスキルや知識が多少伝わっているとて、逃げることもままならないといったことはないと睨んでいる。
「余たちは、フェンの考えではどこに配置されるのかな。」
「サクラさんやみんなには、各地のシキと繋がりのある奴隷商を片っ端から潰して欲しいの。ここはやはり人手が必要だし、海軍には頼め

ない部分になってくるわ。」
　海軍軍部では、天竜人の意向が世界政府から伝達される。
　そしてその命令は、込み入った事情がない限り絶対的な命令として海軍でも動かなくてはいけなくなる。
　天竜人が奴隷を欲している以上、海軍が動くことはできない。
「なるほどね。それでフェンの懸念である故郷を守るのは、余たちではなく海軍にってことなんだね。」
「でもそれだけが理由ではないの。私が生きていることで、シキは少なからず私に意識を割くでしょう。出来れば、潰しておきたいでしょうね。少なくともシキの下に募っている者以外では、私が1番シキの情報を持っているから。無論、偽情報の可能性があると疑われるでしょう。」
「海軍を動かすことで、あくまで海軍にツテのある人物という点を強調するわけかな。」
　ここまでちゃんと考えていることが伝わるのであれば、話が早くて助かるわ。
「そこで私が生きていることに関して信憑性を増したいの。ここまですれば、流石に私本人か、それとも相当シキに執着をしている鬱陶しいやつかぐらいになってくる、どっちにしろシキ本人からしたら目障りになってくると思うわ。警護以外にも、シキの確保にも人員をさいてもらうよう交渉するつもり。本当にガープさん直通の電話があって助かったわ。」
　ただ目下の懸念事項は、ハンコックが懸賞金をかけられていることにある。
　訓練もほどほどに、実践訓練じゃと九蛇海賊団と船を動かし海賊を狩っていたら、懸賞金がついていたと。まぁ、ガープさんなら私相手であれば話ぐらいは聞いてくれるぐらいの信頼関係はあると思っている。
「余もここまでは理解したよ。後半の部分も教えてくれるかな。」
「後半の部分は、あくまでシキの余力を削りたいところと、奴隷商だけ

があっても今回みたいに連れ去られる人は出てきちゃうのだから2つの意味で潰しましょう作戦よ。」
奴隷商といった事業は、天竜人という天上のお金持ちが金に糸目をつけず人を買っていくという背景上、多額の収入や利益があがりやすい。
それは珍しければ珍しいほどである。
シキの能力や特性上、いろいろな地域、いろいろな人種や種族。無論、仕入れを行うことは非常に容易い。
それを売っていると考えれば、収入の多くを奴隷で担保している可能性は高い。
まぁこちらは建前もある。
奴隷なんて、近親のものや友達がといった話でなければ遠い話で別になんとも思うことはなかった。
ハンコックたちの過去の記憶や、奴隷に捕まっていた人の生の声がおまりにも聞くに堪えない内容だった。
故に、この場所が狙われるのがこれで最後になればいい。
ここのみんなが狙われるリスクを下げたいと浮かんだのが、これだった。
奴隷で捕まえれば、武装色を身につけた戦闘力の高い武人が集団で殺しに来るなんてわかっていたら、今後ここにはこなくなるだろうと考えてこの点も入れてある。
「じゃあ後は、どうやって世界にフェンが生きているってばら撒いていくのかだけど。ここの当てはあるの？」
「ごめんなさい、ここに関しては海軍に電話してみないことにはなんとも。世界政府が発行している新聞があるはずなの。センゴクさんに、シキを確保するチャンスを提供する代わりに掛け合ってみるつもり。これがうまくいけば、シキと会えるんじゃないかって思っているわ。ただ、ここまでは私の考えだけどセンゴクさんとうまく連絡が取れれば、もっと作戦も煮詰めていけると思うの。九蛇は海賊だけど、サクラさんは懸賞金かけられていないし、私は海軍との関係は悪くないし。進めてみる価値はあると思っているわ。」

「何も進めないよりも一歩ずつでも。このまま進まないじゃ、余も死んでいった同胞に顔向けができないよね。よし、乗った!!!!!!!!」

動き出します

「久しぶりだな、よく生きて帰ってきたものだ。」
あれから、ひとまず海軍へと電話して見て交渉してみようという内容に話が落ち着いた。
結局のところこの交渉が上手くいかないことには、計画倒れになってしまう。

まずはハンコックより、でんでん虫を拝借し先にガープさんへと連絡をとった。
こちらのでんでん虫は、海軍になる気持ちが芽生えたらの時のでんでん虫だったらしく、海賊になるとは何事だと出て最初から怒鳴られた。
いえいえ、違います。フェンですよと挨拶をすれば「ばかもんが。生きているなら、さっさと連絡ぐらいよこせ。」とお説教をいただいたものの、現在は海軍本部に駐屯されているらしく、センゴクさんに取り次ぎを行うから待っておけと話をいただいた。
ガープさんにも、きっと迷惑と心配をかけてしまったんだろうな。
海軍は命令に忠実であれと、正義は世界政府にを宗教の如く教えられるのだという。
それでも、ガープさんは人情に溢れ、人としての繋がりを大切にできる人であることはよく知っている。
きっとココヤシ村のことや、私の捜索も手を貸してくれた可能性だってあるぐらいだ。
むしろ手を貸してくれたのだろう。
そうでなければ「お前の故郷には伝えているのか。」なんて言葉をいうわけがない。
ただ今回の作戦内で、全世界に私の存在と内容を発信するために耳に入ることだろう。

ひどい人だって軽蔑されるかな。生きているのに帰ることも、伝えることもしなかったんだから。
こんなに時間も経って、ナミやノジコも大きくなっているんでしょうね、ナミは私のことなんて覚えていないかも知れないわね。
考えたら、きっとキリが無く自分の気持ちが落ち込んでしまうことはわかっているのに、考えてしまう自分にも嫌気がさす。
それでも、ここを乗り越えないと安心して会うことだってできないからって決めたのに。

ここで憂鬱になっても仕方がないと、自身の頬を叩き、気合を入れ直す。
そんなことばっかり考えている間に時間は経っていたのか
「取り次いで来たぞ。おい、センゴク。フェンがお前に電話だといっておるぞ。」
「いきなり訳も説明せずに引っ張ってくるやつがあるか!!!!!!まったく!!!それにしても生きていたのか。」
電話口では、当初にお会いした時よりも幾分低くなって、さらに深みの増した声。
「ココヤシ村の時はしょっちゅう定期連絡していたのに、5年間も連絡できなかったんですもの。死んだと思われても仕方がないわ。」
「私たちで脱獄を許したものが、迷惑や危害を加えていることに申し開きする言葉も無い。インペルダウンよりの脱獄といった行為を許してしまったこともあり、海軍でも総出でシキの捜索にあたったのだが、いかんせん宙に浮く海賊の捜索など前代未聞。いかに前例があるとはいえ、流石に警戒しておるようで結果は打つ手無しだった。」
話すセンゴクさんの表情は、苦虫を噛み潰したような表情で苦悶を浮かべていた。
「いいの。わかってて私が行ったことだから、センゴクさんに落ち度は無いわ。私こそ勝手なことをして申し訳ない気持ちでいっぱいよ。」
「そう言ってくれるとありがたい。それで、わざわざ今回電話を寄越

した理由を聞いても良いか？」
「今回、私がセンゴクさんに電話をしたのは海軍とセンゴクさん、ガープさんに力を貸して欲しいの。シキを捕まえるために。」
　電話口の後ろから、「何を捕まえるって言っておるのじゃ!!!!ワシには全く聞こえんぞ!!」とか「うるさい、話をしている最中だ!!!!黙っておけ!!!!」とか揉めている声が聞こえる。相変わらず仲がいいらしい。
「それでシキを捕まえることは賛同してもいいが。具体的にどうやって誘いだす。奴はさっきも話した通り、前例がある分よっぽど慎重に動いている。おいそれと出てくるとは考えずらい。どうする。」
「世界政府で発行している新聞があったわよね。その新聞に私の名前を生きていることを、どんな形でもいいから記載して欲しいのよ。可能かしら。」
　ううむと唸る声が電話口から漏れる。
「確かに政府で発行をしている新聞や文書は存在している。それにお前の存在を撒き餌にしたいという内容なのもおおよそ把握した。だが、あくまで政府発信の新聞になると私の立場でも確実にとは言いづらいな。それで、載せて情報発信と撒き餌。それだけで食いつくのかと言った疑問が残る。その点はどうだ？」
「その点は、私は食いついてくると感じているわ。現状、外部のものでシキの島で活動、情報を持っている人間というのは貴重だわ。加えて、海軍内部とのつながりも持っている。シキからすると相当鬱陶しいでしょう。おそらく、ココヤシ村を交渉の材料に出てくるのでは無いかと考えているの。私個人さえとらえて殺してしまえば、海軍はひとまず放っておいてもいいから、狙うのであればリスクは少ないはずよ。個人だもの。」
「それでもココヤシ村の警備を、私たちが行うとしたら海軍と共同で動いていることは奴に伝わる。伝われば動くことのリスクに勘づくだろう。」
　ちょっと変われ、センゴクといった声とともに電話口の声がガープさんに変わる。
「そのためのワシじゃな。ココヤシ村にしょっちゅう出入りしていた

ワシならば、多少出入りしたところで不自然では無いじゃろう。そう考えているな。」
「ガープさんの考えている通りよ。私はあくまで個人で動く。海軍の守りもつけないし、同様に一緒に動くものもつけない。もちろん、陰から援護や監視なんてものもいらない。その代わりに子でんでん虫を持ち歩くわ。」
「続けてくれ。」と電話口よりセンゴクさんの声が聞こえるので続ける。
「子でんでん虫から定時に1コールだけ連絡を入れるの。1コール定時に連絡が入ったら無事だって認識して欲しいの。だから、私の半径10キロ程度のところに観測主を駐屯させてほしい。1コールのコールが入ったら問題なし。連絡が途絶えた場合は、シキに遭遇したと思って。」
「お前だけでシキを留めておけると言った話に聞こえるが、内容や受け取り方に間違いはないか？」
　センゴクさんも海兵。インペルダウンの汚名返上の内容で考えればきっと切り捨ててもいいはずなのに、心配をしてくれるのね。
「できる限りはやってみるつもりだし、シキに通用するぐらいには鍛えてきたつもりよ。それでもダメだったら、第2案は海兵が到着するまでの時間稼ぎに徹するとするわ。最低限、その役割ぐらいはなんとかして見せる。」
「そうか。その内容だとまず全世界にお前が生きていることを周知しないことには始まらんな。ともなれば、どのように世界に発信していくか。政府での発行の新聞では、確実にと私も断言ができん。ううむ。」
　唸る仙石さんの後ろから、煎餅をボリボリしている音が響いているのでガープさんは飽きてきた頃合いなのだろう。
「モルガンズなんぞに頼ったら、後々何を言われるかわからん以上、あそこは頼りにはできん。」
「そんなもん映像でんでん虫で放映すりゃあいいじゃろ。」
　映像でんでん虫で放映するって言われても、私自身で何かトピック

になるようなものがあるわけでもないし。
「なるほどな。たまには良いことを思いつくなガープよ。フェンよ、シキ相手にそこまでの啖呵を切れるほどまで鍛えたのだろう？」
「おそらくと言った内容だけどそうね。しっかりと鍛えてきたつもりよ。」
「であればだ、今回の話に海軍を動かすか否かを含めて、海賊を捕縛し海軍本部まで連れて来い。倒すのはお前にしろ、連れてくるのはお前と関わりがあるものであれば良い。ここで海軍までお前が来ては本末転倒だ。そこでお前の実力を見極める。問題ないとなったら、この電話に連絡を入れるからこの電話は持って歩くように。連れてくる海賊は、そうさな。懸賞金が高ければ高いほどいい。そこまで行けば、海賊検挙の報道と検挙者の内容をまとめて記事に出すことも映像でんでん虫で報道を流すことも選び放題だ。」
テストと言ったところかしら。
海賊を検挙できて、尚且つ私の実力も測れるためのものっていうことね。
確かに乗った船が泥舟じゃ話にもならないわ。
「確かにそうよね。わかったわ、それじゃあなるべく早く海賊を捕まえなきゃならないわね。」
「相手なら、ワシがしてやっても良いぞ。」
「バカたれ!!!それじゃあ報道できんだろうが!!お前は黙っとれ!!!」
ゴチンっと響く音に、自分の頭に手を置きたくなるが我にかえる。
この音はめちゃくちゃ痛いわよね、「痛いじゃろうが!!もっと手加減せい!!!」そりゃあ、そうよ。ここまで音が聴こえたぐらいだもの。
「今後の話はそれからだな。だが良い話をもらった。こちらも前向きに動くつもりで準備をしておく。期待しているからな。」
それから、センゴクさんは電話口から離れ仕事に戻っていった。
「おい、フェンよ。家族にはお前が生きていることを先に伝えなくていいのか。」

「伝えられないわ。私の知っているベルで、私が生きていることを知ったらなんとしても会いに来ようとするわ。下手したら、ナミやノジコをゲンさんに預けてでも来ようとするでしょうね。金獅子検挙の報道が出ていない以上、私がこの後金獅子相手に争うことも、おおよそ予想はつくでしょう。あの子は人一倍責任感が強いから、一緒に戦うって言い張るでしょう?そんなの私は望んでないし、巻き込みたくないもの。だから、できるだけギリギリに知ってもらいたいの。私の我がままもあるわね。」
「ワシはベルメールに会ったら素直に伝えてしまいそうじゃな。あやつは、お前のことを思って当時は飯も碌に喉を通らんと痩せ細っていった。訓練していて健康的だった体は見る影も無くなっておった。今は少し落ち着いて、ナミやノジコとひとまず元気にしておるが、その時の憔悴具合と言ったら見ておれんかったぐらいじゃ。本当に伝えなくて良いんじゃな?」
「うん、ごめんね。伝えないで欲しいの。ナミやノジコは私のことを覚えていないかもしれないと思うとショックだったりするし、ベルメールが私の元になんて来たらきっと揺らいでしまうから。」
「そうか。」とはなし、納得はいかない声はしているもののひとまずは了承してくれた。
「ノジコもナミもお前のことは覚えておったぞ。安心せい。ワシはしばらくあの家族には会わんようにするわい。」
「ごめんね、迷惑をかけるわ。」
「本当に迷惑じゃ!」と言いながら、仕事に戻ると電話を切った。

そっか。あんなに小さかったのに覚えているのね。
２人で育てていこうって、一杯一杯したい事あったんだけど。
きっともう大きくなって、会うたびに嬉しそうな笑顔を向けてくれたのもきっと今会ったら人見知りとかされちゃうのかな。
なんて思うと、今でさえすぐにでもココヤシ村に行きたい。
みかんの木だって植えたよって。
こんなに美味しい実をつけたんだよって、一緒に話したいし笑いた

い。
なんで自分だけって思う事だってたくさんあったのだ。
成長する姿も、今大きくなっている姿も見れない今の自分の状況に歯痒くなる。
なんでもっと強くなかったんだろうとか、もっと上手い方法ななかったのかなとか。
後悔すれば、一杯一杯溢れてくる。
たまに思い出して、布団で泣いてしまった時は腫れぼったい目と、浮腫んだ顔でサクラさんやハンコック、スイレンにまで心配をかけたぐらいだ。
我ながら女々しい。
まぁ今世は女の子だから良いんだけど。
こんな状況で、こんな敵でなかったらとんで会いにいっていた事だろう。
ベルになんてあったら、きっともう立ち上がれなくなるもの。
それじゃあ、今立ち上がってくれた人にもここで良くしてくれた人にも申し訳が立たない。
会いにいくのであれば、自信を持って会いに行きたい。
自慢できる家族でありたい。だから、内緒にしていていいの。
自分に言い聞かせる時間は終わりだ。
「サクラさん、待たせてしまってごめんね？今後の内容を話すわね。」
電話していた自分の部屋よりもどり、広場にいるサクラさんに声をかける。
そして、話していた内容を伝えた。海軍に海賊を輸送すること。その人員が必要であること。
その後、海軍との協力体制について検討すること。
中でも前向きに検討すると話していたこと。
「なるほどね。前向きに検討するっていう言葉が、どこまで本当かにもよるのかな。今の内容だと。」
「海軍としてもシキの確保の優先順位は相当高いものと考えて間違いないわ。そうじゃなければ、にべもなく断られているでしょうから。

前向きに検討すると話してくれたのは私の動き次第ではあるものの、ここさえクリア出来れば、動いてくれると考えて間違いない。」
「じゃあ、あとは海賊を海軍まで送り届ける役割かな。余の元から選ぶものは、海賊を送るだけではなくその後も一緒に行動してほしい。電話の前に余たちでも話してみたんだけど、個人で動くのが危険であることと、それに海軍や他と繋がりがあるとバレなければ問題はないはずだよね？航海技術は必要だし、少数で進めていきたいしとなると限られてくる。余はここで奴隷商の件での指揮を取らなきゃ行けないし、ハンコックは奴隷に関しては相当入れ込んでいたから、余の元で動いてもらうのが1番だし。スイレンはどうかな。」
そばに控えているスイレンに目線を投げると、億劫そうな反面喜ばしいような複雑な表情を浮かべている。
シキの警戒心をあげてしまう要因は排除しておきたいのだが、心配してくれているサクラさんの気持ちも理解しているため、ありがたくついてきてもらうことにしよう。
「私からのお願いしたいの。1人で何役もこなせるスイレン入ると心強いわ。お願いできないかしら。」
「わかりました。今回の内容お引き受けいたします。」
スイレン自体が幅広く技術を習得しているため、以前なんでそこまでと質問をしたところ、給仕としての嗜みと言っていた。
私も航海技術は一応習得しているものの、グランドラインでの公開は初めてになる部分も多いため。航海技術を持っている仲間ができてより安心だ。
一家に一台スイレンである。スイレン様様。
少しだけ身の危険を感じるのは気のせいと。

まずは一歩前進である。

再会

私が航海を始めて数日。
島から出発をしていくとて、カームベルトの魔境から出向するとなると海王類に襲われて終わりといった未来が訪れてしまうためカームベルトから、シャボンディ諸島までは九蛇の海賊船で送ってもらった。
途中で海賊に襲われるかと望んでいたものの、九蛇の海賊船の威圧感がすごいのか運がいいのか。
結局、海賊に遭遇することなくシャボンディ諸島まで辿り着いてしまった。
自分で見つけて倒さないといけないわよね。
ため息なんてついている場合じゃないわ。
島に入港し、サクラさんやハンコックたちとお別れした。
奴隷や海賊達の溜まり場たるこの島で、詳しい奴隷商の情報だったり、その横のつながりを調べていくとのことだ。
男子禁制の島で育った子達で、情報を調べていくことができるのか心配していたのだが
「大丈夫だよ。ここで情報を調べていくための拠点の当てもあるから。伊達に余も海賊をしてないよ。だから余たちのことは心配しないで。しっかりとやっておいで！」
との言葉をいただいた。
どうやら、元船長なのか、先先代様なのか。情報を集めている方がいるとのことでそちらをあたってみるとのことだ。
船に乗っていた船員兼島のみんなには別れを惜しむ子がいたり、揶揄ってくる子がいたり。
別れが多少惜しいところもあったが、みな口々に励ましの言葉をくれ、頑張ってきてと応援の気持ちをくれ、私自身にも気合が入った。
船を降り、スイレンと改めて今後の動きを確認する。

「まずはこの島で活動している海賊の情報集め。そして、いつまでも海軍の膝元にあるこの島にもい続けられないから適当な島のエターナルポースが必要だと思うのだけどどうかしら。」
「お話の通りかと思います。エターナルポースのお話につきましては、取り扱っている場所に心当たりがございます。」
　このシャボンディ諸島には、九蛇の船で給仕兼戦闘員として同乗した時に、来たことがあると話していた。
　おそらくその際に、繁華街や歓楽街などを見たことがあるということなのだろう。
「それはありがたいわ。じゃあ、２人一緒に探すよりも各々で当たった方が効率もいいでしょうし、私は海賊の情報を集めるようにする。エターナルポースの件は任せてもいいかしら。」
「かしこまりました。では、本日夕刻に７０番街にてホテルを確保しておりますので、そちらでの集合といたしましょう。それでは行って参ります。」
　夕刻での件で頷くと、スイレンは繁華街の方向に向かっていった。

　私は１～２９番街の方が無法地帯って話していたから、そっちの方に向かっていけばいいのよね。
　無法地帯っていうぐらいだけど、話が通じる人っているのかしら。
　無法地帯で飲み食いしているものは、繁華街に隠れるなんて技術や頭がない人だらけという可能性は非常に困る。
　ちょっとでも話せる人がいるといいわよね。
　現在は食料調達分や、生活必需品のための最低限の金銭は持ち歩いているものの交渉に使えるものは持ち歩いてはいない。

　私が武力で交渉する可能性を考慮に入れて動くなんて。
　いつの間にこの世界に毒されたのかしら。
　最初に出会った原作の人物が血の気の多いものだったことが起因なのだろうか。
　それとも、シキのところでの状況に頭のネジでも飛んでいったのだ

ろうか。
どちらにせよ、嫌な影響である。この世界で戦わずして生きて行くことの困難さに改めて頭を悩ませるがいまさらである。
ため息を吐き、自分を落ち着けながら1番街から、２９番街へと順繰りに巡っていく。

確かに海賊はちらほらと見受けられるようだが、あまり強そうな見た目をしているわけでも、またオーラを出しているわけでもない。
懸賞金がせめて、５０００万クラスの海賊ぐらいがちょうどいいのかと思っていたんだけど。
感じることのできる気配からは、あまり強さは感じないことに恐怖を覚える。
昨今の海賊って、自分の力を隠す工夫をしているのかしら。
そうであれば理知的な海賊がいっぱいいるって話になるから、会話ができそうで嬉しいわね。
海賊のイメージは、横暴で粗暴で暴力的。人の話は聞かない荒くれ者。
少なくともココヤシ村で討伐していた海賊は、このイメージに該当していた。

流石にグランドラインも中盤の島ともなると、爪を隠すのだろうか。
ただそうなると、交渉の材料を持っていないことが悔やまれる。
流石に、無作為にその辺にいる海賊を襲うなんて通魔のようなことはしたくない。
飛んだ板挟みである。
そんなことを考えながら、1番から２９番まで歩いている中での中腹ぐらいに差し掛かると
・・・・・・・・っくまん、宴の準備だ・・・・
にぎやかで、聞き覚えのある声が耳に入ってくる。

私、海賊の知り合いなんて多くはないのだけれど。
いつこの声に遭遇したのかしら。
気になり、声の主の方に歩みを進めていくと、見覚えのある赤い髪と見覚えのない白髪の髪が目に入る。
「おおー!!懐かしい顔ぶれがもう1人いるじゃねえか!!!久しぶりだなぁ、フェン!!」
「あら、本当に久しぶりね。あなたお話は新聞で拝見していたわ、元気そうで何よりよ。まさかこんなところで会うと思わなかったわ。」
声の主は、赤髪に隻腕の男とその隣には緑と白のボーダーを身につける小太りの男。
端の方には、黒のロン毛のダンディな男も揃っている。
「シャンクス、この女性はどちら様かね。」
「レイリーさん、こいつはフェンっていうんだ。ミンク族っぽいのに耳と尻尾しか持ってないんだ、面白いだろ。昔、東の海であって一緒に飯食った仲だ。ルー!!飯の追加だ、こいつにも飯を出してやれ!!」
食うだろと、こちらに目線をよこすシャンクスに首を縦にふる。
最近は、仙豆はめっきり食さずに普通にご飯を食べて生きている。
もちろん、コスパはいいのだが味気ないため必要な時のみ頼るようにしている。
「そうか、フェン君というんだね。レイリーと言う。レイさんとでも呼んでおくれ。」
「こちらこそ。改めてフェンよ。ファミリーネームはないの。よろしくね。」
これが生レイリーかとそのダンディさと歳を感じさせない屈強さ。
また精錬されたオーラや立ち振る舞いに、戦々恐々としながら伸ばされた手を握り握手に応じる。
その手も剣をずっと振り続けているのが素人でも分かるほど、皮は厚くゴツゴツとした武人の手であった。
「老人の手は硬くて敵わん。」
「いえ、佇まいから察してはいたけれど。手の感触にビックリしただけよ。気に触ったなら謝るわ。」

笑いながら流してくれるレイリーに、ほっと貯めていた息が漏れる。
心臓の音もバックバクで手や足が震えていないものか心配である。
「獲って食ったりはしないから安心していい。それに、緊張していてはせっかくの宴が台無しだろう。楽にするといい。」
酒を片手にこちらを気遣う言葉をくれる人柄と、周りを見ながら楽しそうに目をむける仕草に人の良さを感じ安心する。
「それにしても東の海で、ベルメールとゆっくり暮らしているもんだと思っていたし、ココヤシ村で暮らしているって話も聞いたりしたもんだが。それがどうしてこんなところに。」
「お前、ココヤシ村の出身か!!近くのシロップ村って知ってるか、俺の故郷なんだ!!」
もじゃもじゃ頭のおじさんが話しかけてくる。シロップ村出身ということはきっとこの人がヤソップなのだろう。
「おい、ヤソップ。オレの話が先だ。聞かせてくれ、どうしてこんな所にいて、わざわざこの無法地帯の方にいるのかを。」

事の顛末を語った。
現在はもう行動を起こす段階に入っているし、海軍でもなくシキ側でもないシャンクスであれば、話しても問題もないだろう。
「そうか、シキか。俺もよく覚えている。よくあの支配欲の塊のような男から逃げてきたものだ。」
「いえ、当時私にできたのは逃げるだけ。褒められるものじゃないわ。」
「オレも覚えている。金獅子は強いし、オレァ生きていてくれただけで安心した。それにしても、金獅子と争うってなぁ。オレも力貸すか？」
剣に片腕を添え、助力をしてくれると申し出るシャンクスに心強い

気持ちを感じながらも
「気持ちだけ受け取っておくわ。片腕失ってきて、今のいまじゃ慣れてもいないんでしょう？怪我人はしっかりとリハビリをして、直して欲しいもの。」
「金獅子は強いぞ。オレも船長の船に乗ってた時に遠巻きで見ていたもんだが、記憶に残っているぐらいだからなぁ。そういえば!!オマエ、オレから勝ち逃げしたままじゃねェか!!!!」
先ほど、怪我の心配をしたばかりだというのに早速元気そうに剣を振り回し始める船長に遠くで見守っていた副船長から拳骨が落とされる。
「バカか!!!!!怪我が治ったかと思えば、戦って傷が開いての繰り返しだ!!!!しばらくは大人しくしてろ!!!!」
傷は塞がっているのだが、安静になんてしていないため、開いては治っての繰り返しだそうだ。
「あなたも変わらないわね。」
「お前もちっさいまま変わらねえじゃねえか!!!!やーいチビ!!!!」
子供のように、バカにしてくる表情にイラっとはしてくるものの子供のように争うなんてことはもうしないのだ。
今度はショットガンのように長い銃の絵の部分で無言で叩かれ、涙を流しながら黙るシャンクスによくこんな子供についてきているものだと感心する。
少し前は私も一緒になって、喧嘩していたかと思うと恥ずかしい。
「ちびだから悪いんだろ、チビじゃんチビ。」
「ちびちびいうな!!!!片腕になって、可哀想だからって気を遣ってたら調子に乗って!!!!私のが勝ち越してるのだから、あなたは雑魚よ、やーい雑魚!!!!」
はぁと頭を抱える黒髪ロングイケメンが目に入るが、こいつが悪い!!
この世界で唯一の合法ロリかもしれない希少性があるだろうが!!!!
豪快に笑う白髪のイケおじも目に入るが、気にしている場合ではない。

「そこまで言うならヤるか!!!!お前なんて片腕で十分だ!!!!」
「やってやるわよ!!!!あんたなんて、5秒よ!!いや3秒もかからないわ!!!!」
「いい加減にしろ!!!!飯が冷める、やるなら飯抜きだからな!!」
争っていると、!!後ろから緑ボーダーさんからの警告が耳に入る。
後ろから漂う、肉の香ばしい匂いや焼く音などに食欲をそそられる。
その中でのご飯抜きは流石に辛い。
「仕方ないわね。ひとまず休戦よ。ご飯食べてからにしましょ。」
「おう、野郎ども!!!!仕切り直しだ、パァーといこうぜ!!!!」

実力

「私がエターナルポースを探しに行っている間、こんな所で楽しい宴をしていらっしゃるなんて。フェン様に掛かれば、情報を集めることや探すことなんて片手間に行える内容でいらっしゃるのですね。是非とも私にもその有益な情報を教えていたが期待ものです。もしかして、すでに検挙まで行き着いていらっしゃるのでしょうか。エターナルポース一つで、時間を消費してしまった私は必要ないぐらいですね。」

「ごめんね!!!!本当にごめんなさい!!!!!そんなつもりじゃなかったの、許して!!!!」

シャンクスと、美味しいご飯や酒。ノリの良い、ベックマンやヤソップ、そしてレイリーさん。

みんなとの楽しい宴の時間に、情報を探しに出ていたことなんてすっかり忘れて、料理や酒に舌鼓を打っていた。

そんな中、突然背中に感じる肌寒い空気感と震えるような悪寒。

背中を伝う冷や汗に、自身の行動を思い出し、ただならぬオーラの元凶に目を向けるとスイレンが立っていたのだ。

そのオーラたるや、今世や前世を含めても1位を争うぐらいに恐怖した。

目のハイライトが消えて、ぶつぶつと念仏のように非難を受けて見ている状況を想像して見てほしい。

それも近しい人となれば、恐怖は倍増しである。

「そんなつもりじゃなかったのとは、どんなつもりなのでしょう。手分けした方が、早く悲願に近づけるのだ、お役に立てる嬉しいと張り切っていた私は思い上がっていたのでしょう。この程度、フェン様な

ら余裕だったのでしょうね。思い上がっていた私は恥ずかしいですね。」
　その手には、いくつかのエターナルポースが握られており候補になりそうな場所を見繕ってきてくれたのだろうことがよくわかる。
「申し開きの余地もございません。旧知の人に出会ってしまって、楽しくなってしまったの。本当にごめんなさい。」
　はぁとため息を一つこぼし、
「私も責め立ててしまったようで、大人気なくございました。旧知の方との事でございましたが、新進気鋭の赤髪様でお間違い無いでしょうか。」
「そうよ、あれはシャンクス。昔、私の村のある島の近くの海で出会ったの。それがこんな所で出会えるなんて嬉しくて、ついつい楽しんでしまったわ。」
　少し離れた所で、仲間たちと肩を組みながら馬鹿騒ぎをしている赤い髪を指さして話す。
　その横ではベックマンやレイリーも楽しそうに、その風景を眺めていた。
「君は、シャッキーのところの子じゃないか？」
　ふと、こちらで私とスイレンが話し込んでいることに気づいたレイリーより声をかけられる。
「シャッキー、いえシャクヤク様の故郷で給餌をしております、スイレンと申します。レイリー様、お久しぶりでございます。」
「おぉ!!やっぱりか!!昔、シャッキーの元に来た時に見た以来だが、すっかり大きくなった。」
　表情や話の内容から見るに、昔会ったことがあるのだろう。
「昔、シャクヤク先代様にお会いするためにシャボンディ諸島に来た事がありまして。レイリー様、幼少の頃の私の話は、私も恥ずかしくございますのでお控えいただけないでしょうか。」
「これは申し訳ない。この歳になって昔馴染みにあうことも少なくなってきていてな。つい、要らぬことを話してしまう。」
　はっはと豪快に笑うレイリーと、拗ねるようなスイレン。

「それで、フェン君と一緒に行動をしていると言うことはスイレン君もシキを倒そうと考えているのだな？」
「はい、今回は島の者たち総出で行動しております。ただ、シキと直接というお話であれば、私とフェン様で動いていく形になるでしょう。」
「そう、か。シキがどれほどの存在であるか、分かっての行動と思って良いんだね？」
　本題の話に移るにつれ、引き締まっていく顔と言葉に、真剣味を帯びてくる。
　スイレンと顔を見合わせ、その言葉に頷く。
「分かっているのであれば、私からの言葉は控えよう。それで、海賊の情報などと小耳に挟んだのだが、海賊の情報を必要としているのか？」
「はい、レイリー様。今回の行動に伴いまして、海軍から助力いただく方向でプランを立てております。その際に、懸賞金や知名度のある海賊の検挙を条件にされておりまして、その情報を集めるためにフェン様が行動していた次第です。ただ、こちらで楽しくお食事をされていた様子ですが。」
「そうかそうかっ!!!!実は私の元にも定期的に海賊がくるのだが、いかんせん私も名が売れていてな。その辺に捨て置くしかなかったのだ。処分に困っているものを引き受けてくれないか。」
　ニヤリと口角を上げて話すレイリーの後ろには、いまだに騒いでいる奴らが見え、渋くてカッコいいニヤリは台無しである。
　もう少し静かに騒いでくれないかしら。
　やはりシャボンディ諸島には海賊が頻繁に訪れ、幾分昔とはいえかの有名な冥王の元には結構な確率で海賊が訪れるらしい。
　逃げるか、興が乗れば相手をしているそうなのだが、面倒になることも多いし、事後処理に困っているとの話だ。
　チラッとこちらに目を合わせてくるスイレンに頷くことで返答を返す。
「こちらとしては非常にありがたいお話よ。だけど、タダってお話では無いんでしょう？」

「フェン君。もちろんだ。最近、私もこの辺の海賊程度では腕が鈍って来ているのだ。そろそろ骨のあるものと一戦を交えたいと思っていてな。軽く手合わせをお願いしたい。シャッキーの故郷のものと、私の旧知の者を任せられるのかのテストと思ってくれても構わないのだが、どうだろう。」
　顎に手を添え、こちらを伺うように目を合わせてくる。
「私もシキを知っている方に、どの程度通用するのかの聞いて見たいと思っていたの。そこは問題ないのだけど、テストに合格できなかったらどうなるのかしら。」
「それはその時に考えよう。なに、酷いようにはせんさ。それに立ち振る舞いを見るに今のシャンクスとある程度戦えるぐらいには、鍛えていると見ている。それで合格できない無理難題を条件にするつもりもない。安心していい。」
　レイリーと話していると、後ろから酒の匂いと「ずいぶん楽しそうな話をしてるじゃねえか。」と赤い髪がふと視界に入る。
「レイリーさんのことだ。信用して良い。それにしてもレイリーさん、置いてけぼりはないんじゃないか？」
「シャンクス、お前はまだ片腕に慣れていないだろう。重心の取り方も、剣の構え方も両腕の時の癖が抜けていない。今の状況では混ぜてやれんな。」
　さすがにもと乗組員と副船長という間柄もあってか、「ちぇ。ばれてらぁ。」と引き下がるシャンクス。
「それでいかがかな。割りのいい話だと思うのだが。」
　確かに、客観的に現在の私の実力や立ち位置を評価していただける機会もないし、実際にシキ相手にどれほど通用するのかも確認しておきたい。
「お気遣い感謝するわ。ぜひお願いしても良いかしら。」
「知り合いの故郷のものとその友達を見過ごせなかっただけのことよ。こちらこそ、よろしく頼むよ。」

「野郎ども、余興が始まる見てェだぞ!!」と余計な赤髪の大声により、みんなの注目の的となりながらレイリーとの軽い手合わせを行った。
年齢も年齢だからと、ブランクや劣化を期待して、立ち会って見たものの立ち合い数刻も行かないうちに、その考えが甘かったことに気付かされた。
立ち会った直後には、ニヤリとレイリーは楽しそうに口角を上げ、普段通り力む事もなく向かってくるのだがそのオーラに威圧され、私の筋肉は萎縮してしまっていつも通りの動きなんてできやしなかった。
もちろん、人当たりは非常におおらかで好奇心旺盛。
そんな印象からは想像が出来ないほどの威圧感。
立ち会った直後から、獰猛な肉食動物を前に丸腰で立ち向かっているようなそんな気分だった。
軽い立ち合いといったことは嘘じゃないかと後悔しそうになりながら、こちらも構えた。
悠々と向かってくる姿で、隙だらけかと思いきや、こちらの筋肉の挙動なのか、見聞色なのか。
こちらが動こうとすれば、その挙動に合わせて、瞬時に切り替えてくる怖さ。
その速さは、こちらとしては手を動かすことを脳裏で考え、手が動く時にはすでにレイリーも対応のための動きを始めているのだから頭がおかしいのだろう。
レイリーはこちらに向かって歩いてくるものの、私はその状況や威圧感が怖すぎて、一歩も動くことができなかった。
流石の世界を股にかけた副船長である。
「シキを相手に逃げ出すことができるなんて、滑稽だな。私はまだ何もしていないのに一歩も動くことすら出来ていない。それでは逃げることすら出来まい。」
なんて言葉をいただき、正直泣きそうになった。
いや貴方の無意識の威圧や表情が怖いんですなんて、言えるわけも

なく。
私自身、特段負けん気が強い訳でもないため奮起するどころか、あれだけ鍛えて来てもダメかと普通にショックを受けた。
その表情はきっと、レイリー本人にも筒抜けだったように思う。
「シキは昔から支配欲の塊のような男だった。私たちのところに来ては、下に着くように会うたびに話があった。支配に興味がないことや自由が奪われること、あいつや私はそのたび断っていたがね。きっとそんな奴のことだ。君も何かを奪われたのだろう。家族か友達か、恋人か故郷か。大切な何かだったのではないか。ここで終わりで良いのか。」
と諭された。
訓練や軽い手合わせと考えていたのが、予想外に対戦相手が容赦なく焦ったのだが、さすがにここまで言われて奮起しないわけには行かなかった。
私の後ろでは、スイレンが手を握ってこちらを見ている。
信じている人がいる以上、ここで奮起できなければ今後の計画もうまくは行かないかもしれないと、自身の気持ちに発破をかけた。
その手を握っているサインは後々思ったのだけれど、御愁傷様ではないよね？

「やっとやる気になってくれたか。私も腕には自信がある。どこからでも来なさい。」
「胸を借りるつもりで、全力でいきます!!!」
今回に関しては、自分の全力で戦うつもりだった。
これは今までは自身の中だけにとどめていた、スーロン化、エレクトロによる身体強化、全て含めて全力がどれほど通用するのか見極める相手が欲しかったのだ。
ただここまで全力で戦うのであれば、生半可な相手では怪我を負わせてしまうかもしれない危険性を考えて避けて来たのだが海賊王の副船長で、かつガープとも対等に戦える人物であれば問題ないだろうと判断してのことだ。

出し惜しみはなし。全力で相手をしてもらう。
もし私の目が間違っていて、怪我させてしまうようであれば、仙豆はあるものね。
自身の腰から、件の丸薬を口に放り込み、軽く咀嚼し飲み込む。
飲み込んだそばから、効果はすぐに現れるように作ってある為、表皮からは白い毛が伸び始め体の隅々まで白い毛で覆われていく。
当初は伸び、軽く切り揃えられた髪も腰丈まで伸び、その色も黒から白へと変色していく。
また、この現象は私だけなのだろうか。他のミンクには遭遇していないので不明な部分も多いが体格もスーロン化に応じて変化する。
１５０センチ前後の小柄な体格からいつしか、男の身長と比べても遜色のない身長まで体格が変化するようになった。

元々の強みが、小柄な体格とアジリティを利用しての超至近距離での高速戦闘が強みだった。
が、おそらくスーロン化で過剰に溢れる力を内包しきれなかったのか、体格は大きくなり、その分力で押し切ったり対等に戦えるぐらいの力が発揮できるようになった。
無論、体格が変わった故に当初は慣れるまで時間はかかったが。

そんなものをここで披露すると、ギャラリーは沸いた。
「おい、そんな隠し球があるなんてオレァ聞いてねえぞ!!!!」と赤髪の男にキレられそうになったが、無視である。
「あんなちんちくりんが、こんなになるなんて驚きだ。」とタバコを咥えたロン毛イケメンがボソッと呟くが、めっちゃ聞こえるから説教な。

「ほう、自在にスーロン化を操るか。面白い。これでは私も手を抜いては失礼か。」

結果を申し上げると、めちゃめちゃ負けた。
もう言い訳の仕様もないぐらいにコテンパンにやられた。
と言っても、体をボコボコにされた訳ではない。
最高速度で、レイリーの懐に潜り込む拳を振れば黒く染まった刀を間に挟み込みブロックされ、その細身から考えられない力で後ろに押し戻される。
距離を空けては勝ち目がないため、剣も振れないぐらいの至近距離で連撃を叩き込もうと拳を振えば、刀の柄で弾かれる。
刀の柄が間に合わなければ、武装色で覆われる。
唯一ダメージに発展したのは、一撃目の発勁のみだった。
いわゆる初見殺し。
それでも、最初の一発だけであり、ほとんどが受け流された。

最後には、気を遣ってくれたのだろう。
頭にポンと柄を添えられ
「ひとまずは合格と言ったところか。」と声を頂いた頃には、スーロン化は切れ、息も絶え絶えで倒れかかったところを抱き止めて頂いた。

「速さは一級品。シキから逃げると言った言葉は実現可能だろう。走りだけに集中すれば、速さ特化の悪魔の実でない限りは追いつくことはできないだろう。奴の攻撃や癖は、大振りで大勢を相手にする上では有利に働くことは多いが個人のように対象が小さいと強みを活かし切れない事も多い。ただ倒すとなれば、話は別。全盛期のままとは言わないが、それでも不安の残るラインだと言わざるを得ない。」
と総評をいただいた。
では、時間稼ぎならば如何かと話したところ
「時間稼ぎであれば、十二分だろう。筋肉の動きや、動きの起こりから動けていることと元々の動きが洗練されていて隙も少ない。耐えて待っていく、攻撃に意識を割かなければ大丈夫であろう。」

とお墨付きをいただけたので、まぁ及第点。
スイレンを任せていただけると、笑って話していたが精神的にはボッコボコだった。
それにしても、今の今まで真剣に鍛えて来て、それでも逃げることで精一杯とは。
シキが真面目に訓練といった柄ではないだろうから、才能といったものは恐いものである。
神からもらったこの体には、自分でも気付かない特別なスペックでも隠されてはいないものだろうか。

処分に困っている海賊の捕虜は、襲われた場所に転がしてあるか、ミノムシにして吊るしてあるとのことだったので、スイレンに回収と海軍支部への搬送を頼んだ。
これであとはセンゴクさんからの連絡を一旦待つだけである。

「ここまでの高速戦闘を行うことも無くなって来たため、良いリハビリである」とシャボンディにいる間は相手を所望されたのだけれど、自身もここまで全力で戦闘に踏み切ることもなかったので、慣らすという意味では良いかもしれない。
それにしても、十分に高齢であろうにこの世界のお祖父さんの在り方はどうなっているのかしら。
戦闘民族で若い体の期間が長いといった特別な理由があるのかしらね。
この世界での七不思議である。

「スーロンかは通常満月の光で己の身体の変化が起こると、昔あったミンク族のものは話していたが、それを自在に操るのは予想外だった。ただその後に今の状況になってしまうのであれば、それは最後の奥の手で取っておきなさい。さもなくば、その変化やミンク族のスーロン化の後の披露具合を知っているものであれば、時間を稼がれてうまく立ち合われなくなってしまう。」

スーロン化の代償であるのか否かは不明であるが筋肉は痙攣し、過剰に力を発揮する故か、息も切れ、ふと気を抜けば倒れる程度には疲労する。
その分、レイリーに太鼓判を押してもらうぐらいには戦闘ができる十分なメリットはあるのだが使い道を間違えると、もちろん望まない結果を生み出してしまう。
「理解しているわ。長らく研究して、デメリットの少ない薬やものも持参しているの。でも、かの副船長と戦うのに出し惜しみも失礼かしらと思って、1番強いものを使ったわ。使わないに越したことはないのだけれど、試しておきたかったの。」
「そうか。わかっているなら良い。いらない心配だったようだ。」
キリッと先頭に入った時の表情はなく、酒を嗜むイケオジがふんわりと優しい目でこちらを眺めていた。

「それにしても、昔戦った時には手加減されてたとはビックリだ。」
「そんなことないわよ。これは誰にでも教えられるものじゃないし、あんな船の上で使ったら船が燃えてしまう危険があるもの。これを使わない全力で貴方とは戦ったつもりよ。」
「戦い終わったら、こんなちんちくりんに戻るんだもんな。本当におもしれェな!!今すぐにとは言わねえ、昔は断られたが事が終わったらオレの船に乗る気は無いか。ベックマンやルゥも気に入っているようだし、ヤソップだって嫌いじゃねえって言ってたしよ!!」
「丁重にお断りよ。私は今はシキとの事の後まで考えている余裕はないの。ここで負けてしまったら、何も私の掌には戻って来なくなっちゃう。それに、ココヤシ村に戻ってのんびりしたいし、海軍には私の教え子だっていっぱいいるの。」
心底残念そうな顔で、ただ結果は見えていたのだろう。
断った割には落ち込んでいる様子はなかった。
「そうか。それはしょうがねえな。そうだベックマン、アレをもってこい。」
シャンクスがベックマンに声をかけると、ベックマンは腰に下げて

いる袋から徐に白い紙を取り出し、こちらに持ってくる。
「これはオレのビブルカードだ。見たことはあるか？」
「ええ。掌に置くと、シャンクスの居る方向を示してくれるのよね？これをどうしろっていうの。」
「いつでもオレの船に乗りたい時は、これをたどってオレのところに来れるだろ？昔の誼もある、そのまま死んじまったなんて夢見も悪いしな。暇だったら、力を貸してやるから持っておけ。」
　このお人好しは、海軍との共同作戦と話したのにも関わらず、こういうことをしてくるのか。
　豪胆と言うか、器の問題なのか。
「バカね。そんなことをしたら海軍に貴方が捕まることになるわよ。気持ちだけ貰っておくわ。」
「それで丸く治るなら、それに越した事はねえんだ。だが、少しだけ嫌な予感がしたもんだからな。ビブルカードなんざ、無くなっても作りゃあいい。持っていけ。」
「お頭の勘はよく当たるんだ。貰っておけ。」
　渡されるビブルカードをポケットにしまう。
「シャンクスの勘が当たるのは本当だ。俺の船に乗っていた時もよく面倒ごとを当てていたからな。どこの馬の骨に片腕をくれてやったのかは分からんが、それでもいざという時は役に立つだろう。」
「腕はぁ、未来に投資してやったのさ!!帽子もそいつにくれてやった。いつか新時代が来る、アイツが大きくなって新時代を運んでくるさ!!」
　うっしっしと笑うシャンクスに、未来の少年の笑顔が重なるような気がする。
　今頃、主人公やその仲間たちは大きくなっているのだろう。
　ウソップの話もヤソップの口からいっぱい聞かされた。
　やれ俺に似て強い男になるとか、妻に似て可愛いやら。そんなに可愛ければ自分で育てろよと思わなくもないが事情があるのだろう。
「さあて、宴の仕切り直しだ!!!!酒だ、飲むぞ!!!!」